

昭和期建築家による和室の可能性について
—白井晟一の事例を中心に—

羽藤 広輔

目次

第1部 論文本編

序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

- 1 研究の背景と目的
- 2 論文の構成

第1章 白井晟一の著作にみる伝統論・・・・・・・・・・・・・・13

はじめに

- 1 1950年代伝統論争の建築評論と白井晟一評論
- 2 1955年以前の白井晟一の伝統論
- 3 1956年の白井晟一の伝統論
- 4 1957年以降の白井晟一の伝統論
- 5 晩年の白井晟一の伝統論

おわりに

第2章 白井晟一建築作品の和室における空間構成・・・・・・・・・・29

はじめに

- 1 天井形式による和室の分類
- 2 平面・天井間差異室の分析
- 3 天井形式の類型に対する考察

おわりに

第3章 白井晟一住宅作品における床の間の意匠について・・・・・・・・・・43

はじめに

- 1 床の間の意匠
- 2 床の間論

3 白井による床の間の意匠の意味

おわりに

第4章 「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式の意匠・・・・・・・・・・62

はじめに

1 「雲伴居」概要

2 白井晟一の和風建築観と桂離宮観

3 「雲伴居素描」スケッチにみる「雲伴居」の構想過程

4 同時代の建築家の事例との比較

5 白井和室作品における「雲伴居」書斎

おわりに

終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

1 研究のまとめ

2 結論

引用・参考文献一覧

図版出典一覧

第2部 資料

第1部 論文本編

序章

1 研究の背景と目的

1-1 研究の目的

本研究は、昭和期建築家による和室の事例について、特に白井晟一（1905-1983）の活動を中心として、作品の意匠的特徴とその背景となった建築観を考察し、現代における和室建築の可能性を探索するものである。

現在、『新建築』等の建築専門誌において、和室や和風建築が取り上げられる機会は非常に少なくなった。和風は一般に共通の論題とはならず、一つのジャンルとして脇へ置かれている。一方、昭和期（1926-1989）には、和室や和風建築が建築家の積極的な作品として発表され、伝統論争の気運の中で盛んに議論された時期であった。

まず、昭和期の戦前・戦後という時代の中、和風建築と民家建築が近代建築運動の傍らでどのように語られてきたのか概観しておこう。

1-2 戦前・戦後の和風建築論

昭和期が始まる1920年代中頃は、和風建築にとっても一つの転換期であったと言える。洋風化の熱が衰えを見せ、日本の伝統的なものも受け入れていこうとする気運が生まれ、数寄屋や民家が注目されるようになった。（民家については1-3～1-5で後述。）このような状況の中、既存の形式のバリエーションを繰り返すだけであった数寄屋の改革に、大きな役割を果たしたのが建築家という存在である。後に伊藤ていじは『現代の数寄屋』の中で「現代数寄屋の因襲からの離脱と再生には、西洋の伝統とくに近代主義建築のイデオロギーの注入が必要であり、その資格があったのは建築家であったことをみおとしてはならない」〔伊藤・二川 1971:34〕と主張している。

具体的には、まず藤井厚二（1888-1938）、吉田五十八（1894-1974）、堀口捨己（1895-1984）の名前が挙げられよう。藤井は「聴竹居」^{ちようちくきょ}（1927）等5つの実験住宅で、通風や換気の方法を科学的に分析しようと試み、これを数寄屋建築の空間で形にした。主に活躍した時期は昭和より前の時期であるが、後に続く建築

家達による和風改革の萌芽となったと言えよう。

吉田は、近代化の流れの中で、既存の数寄屋を改革し、新興数寄屋を創設した。『建築と社会』に掲載された「近代数寄屋と明朗性」という論文〔吉田 1935〕が注目される。この中で吉田は、和風住宅の一般の天井、壁面は、柱、長押、天井竿縁など様々な部材によって仕切られた多数の平面から構成されており、数寄屋建築特有の「ウルササ」が存在するという。これを排除して明朗性を高めるために、「(1) 内法上を大壁にする方法、(2) 天井を壁と同材にして、内法上の大壁と連絡せしめ、之を一つの部面に見る方法、(3) 長押、附鴨居を見ず、(2)の方法に依り天井から下りて来た大壁と一つに見る方法」を挙げ、具体的に図を示して説明している。大壁の採用については、防火構造の法規的要請が背景にあったが、吉田はこれを逆手にとり、大壁の壁面に見せたい部材だけを付ける方法により、外観上、柱の秩序の拘束から解放された数寄屋を完成させた。先の論文では、「建築の明朗性」をコルビジェやグロピウスによる近代建築理論を肯定的に受入れる形で説明している点も注目されよう。

堀口は、1926年に住宅作品「紫烟荘」を発表する。『紫烟荘図集』に寄せた解説文の中で、堀口は、「非都市的な建築はわが国においては都市的なものにならん見るべきものがないのに比して非常に洗練された徹底した伝統を作り上げている。その中で最も注意をひくものは茶室建築であろう。」〔堀口 1927b〕と説明しており、この頃から茶室建築に注目していたことがわかる。堀口は、この時期の伝統理解に大きな役割を果たした。1932年の「現代建築に表はれた日本趣味について」という論考〔堀口 1932〕は、いくつかのコンペにおいて、いわゆる「帝冠様式」と呼ばれる建築が当選したことに抗議したもので、「日本的なもの」の定義があいまいである点や構造合理性に欠ける点が指摘された。

藤岡洋保によれば、堀口らが建築における「日本的なもの」の特質として挙げたものは、「a) 平面・構造の簡素明快さ、b) 素材の美の尊重、c) 無装飾、d) 非相称、e) 周囲の環境（自然）との調和である。それに f) 規格の存在（畳割り）が加えられることもあった。そしてそれらをよく体現した例として、伊勢神宮正殿や桂離宮が称揚された。」と説明している。以上の各要素は、近代建築の教義や美学に似ていることがわかるが、これは堀口らによる近代建築のフィルターを通した伝統理解であったため必然の結果であったという〔藤岡 2009:86〕。

こうした日本における伝統理解のあり方は、1933年に来日したブルーノ＝タウト(1880-1938)による桂離宮や伊勢神宮への称賛により、その傾向は一層強ま

った。

戦後もこうした海外からの日本建築に対する称賛が続く。1954 年、ニューヨーク近代美術館の中庭に吉村順三(1908-1997)の設計によって書院造の住宅が展示されたが、ルイス=マンフォードは「日本建築から学ぶ—ニューヨークに展示された書院造—」と題して論考を発表し、日本建築を高く評価した〔マンフォード 1954〕。その他、堀口は和風の作品として、「八勝館八事店」(1950)を完成させ、建築学会作品賞を受賞し、また「サンパウロ日本館」(1955)をつくった。

こうした中、池辺陽(1920-1979)は「日本的デザインにどう取り組むか」を書き、伝統建築を無批判に称賛する状況に問題提議を行う〔池辺 1955a〕。これについての議論はいささか空転するが、池辺は続けて「和風建築と現代デザイン」を発表し、当時の和風建築に対し厳しい批判を展開した。堀口捨己の「サンパウロ日本館」については、「この作品には全く創造的なものがない。現代の時代の苦しみは全く反映されていない美しい亡霊のような感じを受けたのである。古典建築の創造の伝承ではなく、形の継承であり、せいぜい音楽における編曲的な意味以上の何ものも感ずることができなかった。」という。また吉田五十八の新興数寄屋についても「この作品では日本的な形は完全に表面のアクセサリのようなものになっており、技術はそれをつくりだすために使われており、技術自体の生命力を失っているのである」という。さらに池辺は、同論文で、和風建築は現代の生活には適合せず、特殊な階級、生活に限られていることに言及している〔池辺 1955b〕。

戦後の 1950 年前後の状況において、重要になるのが「民衆」の視座への共感であると言えよう。浜口隆一は、1956 年に「現代数寄屋に流れているのは“西洋”に対する民族主義的な抵抗意識、しかも民衆の生活感情に連帯した抵抗感ということが出来るであろう。しかし、それと同時に、この民衆の生活へのつながりが、(中略)民衆のための住宅そのものとしてでもなく、また民衆の生活の貧しさを克服しようと実質的に努力するものとしてでもないということが、忘れられずに指摘されなければならない」としている〔浜口 1956〕。また浜口はこれに先立ち、花柳界と和風建築の関係について、自身の複雑な思いを次のように正直に語っている。「やや飛躍的な言い方になるが、数寄屋建築・和風建築に対して、私は何となく“女”それも prostitute 的なものを感じる。もちろん和風建築と prostitute (水商売・花柳界 etc) との間に深い縁があることは誰でも

も知っていることである。料亭の建築はすべて和風である（もつとも和風建築のすべてが料亭というわけではないが）。現代数寄屋の名手・吉田五十八教授の作品の多くは花柳界関係のものであり、堀口捨巳博士のものにしても、やはりそうした色合いがある。」[浜口 1955]

こうした中、川添登（「岩田知夫」はペンネーム）は「伝統と民衆の発見をめざして」の中で、白井作品の中に認め得る可能性について指摘した。「日本の民衆の中に古くから存在した「生活の知恵」をみぬき、逆に建築界に人知れず影響を与えたものとして、まず一連のローコスト住宅をあげることができる」としている [岩田 1956]。

以上のような議論は、1950 年代に伝統論争という形で盛んに行われたが、次第に議論は収束して行った。高度成長期を迎え、1960 年代に入ると、建築家達の和風は、白井の「呉羽^{くれは}の舎^{いえ}」（1965）を含め、大邸宅の中に見られるようになる。『新建築 11 月臨時増刊 昭和住宅史』では、次のように概観している。

1960 年代に入って、材料を吟味した質的にもすぐれた大邸宅が、第Ⅰ期、第Ⅱ期において活躍した熱達した建築家の手によってつくられるようになる。村野藤吾の北川邸（1959）、吉田五十八の北村邸（1963）、堀口捨己の礪居（1965）、白井晟一の呉羽の舎（1963）などはいずれもその部類に入るものであり、それぞれに味わいの深い個性ある和風の表現が一段と深められているのが見られる。この4人（もつとも白井晟一の和風を一般的に数寄屋と呼ぶのは問題があるが）にさらに谷口吉郎を含めたあたりが第Ⅰ期に起源をもつ現代数寄屋の名手に数えられよう（文中の第Ⅰ期は1925～1935年、第Ⅱ期は1935～1945年をさす。）[横山(監修)1976d]

また、伊藤ていじも「吉田五十八を始めとして、村野藤吾・堀口捨己・谷口吉郎そして白井晟一などという建築家の役割は、単なる伝統的な数寄屋棟梁では困難と思われるその独自のハイ・スタイル・デザインを創出することであったといってよい。しかし仔細にみると最後の白井晟一と吉田・村野・堀口・谷口などとの間には、いささか異なる点がみられる。」[伊藤 1974b] としており、和風の建築家として吉田五十八、堀口捨己に加えて村野藤吾(1891-1984)、谷口吉郎(1904-1979)、白井晟一が代表的な5人として挙げられる中、白井の特異性についても指摘された。

1-3 昭和初期の民家への関心とその背景

ここでは、建築家達への民家または民家論の影響を確認しておこう。昭和期の最初期にあたる 1920 年代～1930 年代にかけて、その後、和風の代表的建築家に数えられる 5 人の建築家達¹⁾ が設計活動を開始する。その中で、谷口吉郎を除く 4 人の建築家において、共通して民家の影響が見られるのは注目に値する。

日本における民家への関心は、柳田国男や今和次郎の「白茅会」^{はくぼうかい}²⁾ によって推進され、一般の住宅にも民家風の建築が見られるようになった。『図説・近代日本住宅史』によれば、「1920 年代後半になると伝統回帰の動きと相まって民家風の住まいが流行し、また、ハーフティンバースタイルの流行は、この民家風の形を変えた流行でもあったのである」という。またその手法的特徴について、「この民家風の表現として好まれた手法が、手斧仕上げのハツリ(ナグリとも称する)のついた太い柱や梁、さらには小屋組みといった構造部材を意匠的に露出させることであった」としている [内田・大川・藤谷 2008:98]。

民家への関心を高めた民家研究や民芸運動について、藤田治彦は、「民家研究も、民芸運動と同様、イギリスの運動を背景にしている。民芸運動はアーツ・アンド・クラフツ運動を、民家研究も同運動や田園都市 (ガーデン・シティ) 運動を背景にしていた」 [藤田 2010] と説明している。

長谷川堯によれば、20 世紀初頭のイギリスのガーデン・シティを訪問した日本の建築家のレポートの中で、最も正確でしかも細かい点に気を配った最初期のものは、大沢三之助 (1867-1945) によるものだという。ガーデン・シティにおいて個々の家屋が、イングリッシュ・コテージ即ちイギリスの民家風であったことは、産業社会としての大都会文明への明確な批判と疑視の表明であったとし、また、民家研究の業績で知られる今和次郎 (1888-1973) が卒業した東京美術学校には、主任として大沢三之助がおり、影響があった可能性を指摘している [長谷川 1975:288]。

1-4 建築家達への民家の影響

個々の建築家の状況について見ておこう。村野藤吾は、自邸 (写真 1 / 1940) の計画において、大阪河内の民家を移築し、その後も増改築を繰り返した。内部空間は、床柱の位置を何度も変更した残月写しの床の間等が知られるが、各所に民家風の要素も見えて取れる³⁾。村野は、「読後感」という文章で「学生時代にラスキンやウィリアム・モリスに傾倒し、ハワードの田園都市計画などに虚無心を癒した。」 [村野 1972] と述べており、思想的背景も一致する。

長谷川堯は、村野の「叡山ホテル」(写真2／1937)における大和棟を持つ民家の影響を指摘し、吉田五十八の「杵屋別邸」(写真3／1936)との比較を行っている。「叡山ホテル」では、屋根は「立面においては目立たない存在であるように抑えられている」のに対し、吉田の「杵屋別邸」は「<屋根(面)>を建築表現上の重要な視覚的要素として、人々の目に直接曝し、その形態や材質感を、はっきりと印象づけることに、何の躊躇いも迷いも感じていない」という[長谷川 2011:622]。



写真1 「村野邸」(1940)

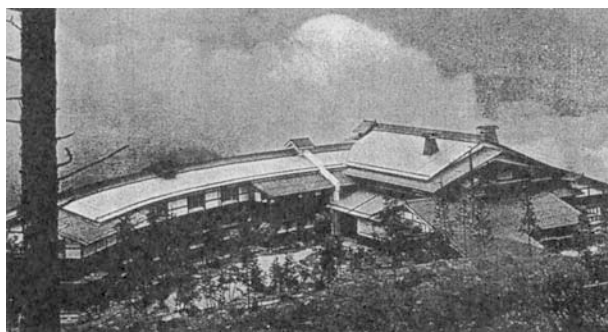


写真2 村野「叡山ホテル」(1937)



写真3 吉田「杵屋別邸」(1936)



写真4 堀口「紫烟荘」(1926)

「杵屋別邸」について『吉田五十八建築展』図録では「吉田五十八が、往時、奈良地方を旅行した際に、法隆寺近くで瓦葺きの上から藁屋根をかぶせて葺き、けらば瓦だけがみえる珍しい大和棟の屋根を発見し、ヒントを得たのがこの屋根である」[吉田五十八建築展実行委員会ほか(編) 1993:47]と説明しており、同種の屋根形状は「吉田五十八邸」(1944)にも見られる。

堀口捨己も民家に影響を受けた作品を残している。「紫烟荘」(写真4／1926)

が該当し、堀口は「これは馬好きな主人が、私の「現代オランダ建築」という本を見て、茅葺き屋根の洋館を作ってみたいということから生まれたものである。」[堀口 1978c:44]と説明している。『紫烟荘図集』に寄せた解説文の中では、建築の非都市的なものについて、「しかるに近代の科学と工場的産業からあらわれた多角な騒擾な都市生活は、必要以上の競争的興奮と疲労とを課して、官能的な末梢的な強い刺激の多いあわただしさ、いらいらした繁雑さであって、その個々の生活が集積した一大都市の生活はその和よりも一層加速度的に拡大されて、住宅とは何か、どうした要求から作られたかを、自然のままに考える暇なく、まず多数の当面火急の問題に包囲されてしまうのである。」[堀口 1927b]と述べ、田園都市運動の影響が如実である。このような田園都市運動を背景とした堀口の興味の対象は、同論文でも語っているように、民家というよりは茶室へと向けられた。

谷口吉郎については、目立った民家論の影響は見られないが、その著作の中に「民家趣味の誘惑」[谷口 1981c:88]という文章が見られる。思想的な田園都市や民衆への共感は見られず、むしろスタイルとしての民家風が横行することへの危惧が示されている。

1-5 白井晟一への民家の影響

白井晟一は、上記の建築家達と比較し、もっとも「民家」への意識を持ち続けた建築家かも知れない。白井のデビュー作となった「河村邸」(写真5/1936)は、ハーフティンバー様式の住宅である。この建築の設計を当初依頼されたのは、平尾敏也⁴⁾という建築家であったが、白井が施主側の代弁者として意見を述べるうちに白井の設計となってしまったという。平尾は「河村邸」の解説文[平尾 1936]で「この家に関する限り近藤氏の義弟白井晟一氏の建築に対しての理想及表現が徹底しているので、これは私の建てた家ではなく白井氏の建てた家であって、私には教へられた家であった。」と説明している。さらに「ホールは白井氏好みの室。仲々面白い。」としており、白井の意図が「ホール」によく表れていることが読み取れる。またこの建築の特徴として「特に申し上げたい事は玄関より段々各室が一尺乃至一尺五寸づつ上がつてゆき最後の近藤氏のアトリエは地面より四尺餘上つてゐることである、ガラスの窓の中には日本式の障子を入れてある。今迄の洋館とか日本館とか茶室とか云ふ純粹さはなく共「近藤浩一路氏を中心とした生活の家」として完全なものであると信じる。」と説明

している。



写真5 白井「河村邸」外観(1936)



写真6 白井「河村邸」ホール(1936)

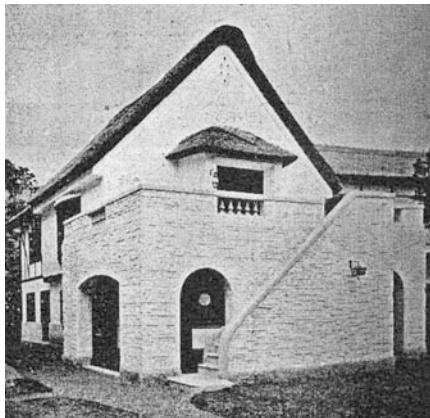


写真7 白井「歓帰荘」(1937)



写真8 白井「試作小住宅」(1953)

戦前、この後、白井は「^{かんきそう}歓帰荘」(写真7／1937)、「嶋中山荘」(1941)、「清沢山荘」(1941)等を手がけるが、いずれも民家風の意匠となっており、「歓帰荘」の雑誌掲載時の説明文では、「禅刹の静溢、日本民家の素樸重厚さを心として造ったが、フランス、ドオルドオニュ県にあるモンテエニュの城邸を参考にした」[白井 1937]と説明している。

戦後においても白井の心には民家があった。「試作小住宅」(写真8／1953)、「^{つくしきよ}土筆居 書屋」(1953)、を発表し、ローコスト小住宅として注目された。「試作小住宅」の説明文でも「日本民家」について言及し「白い漆喰壁とくすんだ木部との階調は、新旧を越えて素樸な故郷の感覚であると思う」[白井 1952c]と書いている。だが、この文章で主題となったのは、現代数寄屋に対する批判、もっと言えば吉田五十八批判であり⁵⁾、その花柳界とのつながりを批判し、民衆

の健全な住宅のあり方について主張した。（「試作小住宅」説明文の内容は、本文第1章及び第4章で後述。）

また、1950年代の伝統論争で注目された白井のエッセー「縄文的なるもの 江川氏舊葦山館について」（詳細については第1章で後述）では同建物について「茅山が動いてきたような茫漠たる屋根と大地から生え出た大木の柱群，ことに洪水になだれうつごとき荒荒しい架構の格闘と，これにおおわれた大洞窟にも似る空間は豪宕なものである」〔白井 1956a〕としている。こうした主張は民家そのものへ向けられたものではないが，内容としては当時の民家論に通ずるものであった。

1-6 研究の方向性と用語

前節まで和風建築論の大筋の流れと建築家達への民家の影響についてみてきた。ここで気づくことは，和風建築への興味が，技術や設備の近代化，ナショナリズム，近代主義建築の影響，戦後の民衆への関心といった，社会状況の急激な変化による，緊張状態と密接に関係している点である。事実，1970年代以降，社会状況が落ち着きを見せると，和風建築や和室に対する活発な議論はほとんど見られなくなった。

したがって，和風への批評は，対象となる建築の概要とその背景にあるイデオロギーとの相関関係を観察するに止まっており，具体的な各部の意匠に対する議論にまで深化しなかったと言えるのではないだろうか。特に和室には，座敷飾りをはじめとする伝統的様式が含まれており，これらを建築家達がどのように評価して自身の建築意匠の中に反映させていったのかについては，議論の余地が残っている。別の言い方をすれば，安定した社会状況においてこそ，公平かつ冷静に，詳細な伝統的様式に対する建築家達の姿勢を見直すことが可能になったと言えよう。

また，白井晟一については，前述のように，吉田五十八，堀口捨己，村野藤吾，谷口吉郎とともに昭和期の住宅史の中で和風を手がけた代表的建築家と捉えられ，しかもその中では特異な存在として位置づけられてきた。しかしながら管見では，白井の和風建築や和室の意匠的特徴が究明された学術論文は見当たらない。また，和風に限らず，白井に関する論文で，学会誌に公表されたものがほとんどない。建築専門雑誌や，単行本等でなされた批評は数多く存在するが，本稿では批評に止まらず，白井の意匠の特質を客観的に明らかにしてみ

たい。

よって本研究では、白井晟一の活動に立脚しながら、昭和期の和室を手がけた建築家の言説や作品、さらには建築専門誌上の論争を、あらためて見直すことにより、和室のデザインが示し得る現代的可能性を究明する。

本論文では、建築物外観上の和風の問題には触れず、和風による内部空間の考察に主眼を置いている。周囲自然的環境と調和した前提で語られることの多い和風建築のシチュエーションの歴史については、近代に特徴的な都市域の拡大と市街化との関連を考察しなくてはならないため、別の研究態勢を必要とする。ここでの「和室」の定義についてであるが、本研究では「和室」を「座敷飾りを含んだ畳敷きの室」と捉えている。歴史的に形成されてきた床の間や付書院といった座敷飾りに対する視座が、本稿では主要なテーマとして位置づけられている。

また本稿では、文中の用語として、座敷飾りの一要素を云う「床の間」と建物部位の床との区別を明確にするため、後者を「ゆか」と表記する。

2 論文の構成

本論文は、序章、第1章～第4章、終章の合計6つの章から成り立っている。

第1章では、白井晟一の和室に対する考え方の背景となる、白井の伝統論の全貌を明らかにする。白井の伝統論は、「縄文的なるもの 江川氏舊菰山館について」[白井 1956a]に代表して語られることが多いが、白井のエッセーや対談記事といったその著作全体を見渡すと、むしろその後の「伝統拡大」発言での主張のほうが白井の真意に近い。またエッセー「縄文的なるもの」の主張は「縄文」自体とは本質的にほとんど関連がないという指摘も存在する。そこで第1章では、白井の著作や対談記事を網羅的に見直すことにより、建築の伝統に対する白井の考えが、いかに変遷し、その過程で何を重視していたのかを究明する。

第2章では、白井の建築作品における和室の空間構成について、物的な構成を中心に、特に天井の形状に着目して、その特徴と変遷を考察する。このように事例を網羅的に用いた白井の和室制作史研究は、既往の批評群にも見られず、本稿の意義は大きいものと考えられる。

第3章では、白井の住宅作品における床の間の意匠について、同時代の建築家による事例との比較を通じ、その特徴を考察するものである。床の間につい

て、近代の建築家はその現代的意義に関心をもった。住宅の近代化の中で日本文化の独自性を見出す格好のモチーフであったからである。

第4章では、白井の遺作であり本人が使用する目的で計画された和風住宅「雲伴居」(1984)を題材に、桂離宮の影響に着目して、その意匠的特徴と、その背景となった白井の建築観を考察する。「雲伴居」は、書齋に床の間・付書院を備え、日本の伝統的様式に近い構成が顕著に見受けられる特異な事例である。他方、桂離宮は日本の近代建築家達にとって最も重要な日本の古典の一つであったことは言うまでもなく、「雲伴居」にも桂離宮に近い意匠が見られることから、本章では、白井の桂離宮観を踏まえた上で、特に付書院のあり方に着目して、「雲伴居」計画における白井の古典に対する姿勢を明らかにする。

最後に終章では、上記の考察を基に、結論として、昭和期の建築家、特に白井晟一の活動が示唆する、和室の可能性についてまとめる。

本稿で扱う資料についてであるが、白井晟一の著作（エッセーや対談記事といった言説）については、『白井晟一全集』別巻Ⅰ・Ⅱに収録されたものと、これに収録されなかった2つの対談記事と1つのエッセー、すなわち、対談「詩と建築の原質」（1970）、対談「建築と書」（1980）、「漢字を書く」（1966）を対象とする。以上は、巻末の引用・参考文献一覧の「白井晟一のエッセー」と「白井晟一の対談記事」という項にまとめている。

序章 注記

- 1) 1-2 最後で触れた5人の建築家、すなわち村野藤吾、吉田五十八、堀口捨己、白井晟一、谷口吉郎をさす。
- 2) 「白茅会」は1917年に柳田國男と佐藤功一により発起され、日本各地の古い民家を保存する主旨でつくられた。会員は石黒忠篤、細川護立、大熊喜邦、田村鎮、内田魯庵、木子幸三郎、今和次郎であり、翌年まで活動したという[今1954]。
- 3) 「村野邸」については、[和風建築社(編)1986a]を参考にした。また村野の戦前の住宅作品に対する民家の影響については『新建築 11月臨時増刊 昭和住宅史』でも指摘されている[横山(監修)1976b]。
- 4) 平尾敏也は、西洋館の専門の建築家で、とくに英国様式を得意とし、農家を解体して利用した。『建築知識』1935年6月号では、今和次郎らの民家研究家に混じって、「民家と新興日本住宅建築」という論考を寄せている。[川添

登 1978a] を参考にした。

- 5) 白井自身は吉田五十八という具体名を挙げていないが文脈からそう判断できる。川添登もそう指摘している。[川添登 1976]

第1章 白井晟一の著作にみる伝統論

はじめに

本章では、白井晟一の著作にみる伝統論の全貌を明らかにする。白井の伝統論は、「縄文的なるもの 江川氏舊葦山館について」（以下エッセー「縄文的なるもの」）〔白井 1956a〕に代表して語られることが多い¹⁾が、白井のエッセーや対談記事といったその著作全体を見渡すと、むしろその後の「伝統拡大」発言での主張（本章第4節で後述）のほうが白井の真意に近い。またエッセー「縄文的なるもの」の主張は「縄文」自体とは本質的にほとんど関連がないという指摘も存在する²⁾。そこで本稿では、白井の著作や対談記事を網羅的に見直すことにより、建築の伝統に対する白井の考えが、いかに変遷し、その過程で何を重視していたのかを究明する。

本章で参照する白井の著作は、序章で定義した通りである。その際、引用文中の旧字体は新字体に改めている。

1 1950年代伝統論争の建築評論と白井晟一評論

1950年代の建築界における伝統論争は、主に川添登が編集長を務めた『新建築』誌上で展開され、丹下健三（1913-2005）の「現在日本において近代建築をいかに理解するか ― 伝統の創造のために―」が1955年1月号に掲載されたのをきっかけに議論が活発化した。

丹下健三は、この文章において「近代建築における伝統は（中略）その精神にあるのではなく、その表現において、近代的なものと伝統的なものの交錯のなかから、建築家の実践が創造してゆくものであると思うのである」と主張している。さらに、「現代建築の創造と日本建築の伝統」〔丹下 1956〕では「歴史的に機能的なものの典型は、また同時に歴史的に美の理想と一致する可能性をもつものである。そうして、そのような典型的機能と美の理想の一致する形象を発見すること、これが建築における創造であり、またこれは典型化への方法によって可能となるのである。」と述べている。丹下が主張する伝統と創造のあり方とは、弁証法的な過程を経て、形として表現されるものであり、形象として典型化されたものへ向かうことが重視されている。また丹下が、「弥生的なもの」と「縄文的なもの」の関係から伝統を捉えようとしたのが、1960年の桂離宮を取り上げた写真集『桂・日本建築における伝統と創造』に収録された「日本建築における伝統と創造―桂」〔丹下 1960〕である。この中で「伝統と破壊のディアレクティクな統一が、創造の構造である。」とし、「こ

の二つの系譜の伝統は、日本歴史上はじめて、この時期に、この桂でぶつかりあうのである。この上層文化の系譜と下層のエネルギー、弥生的な文化形成の伝統と縄文的文化形成のエネルギーとが、ここで伝統とその破壊として、ディアレクティクに燃焼しあうことによって、この桂の創造はなしとげられたとみてよいだろう。」としている³⁾。

池辺陽もこの時期に伝統と創造の問題について発言している。「『日本的デザイン』といかに取りくむか」[池辺 1955a]では、「私たちは伝統と対決することによって、新たな伝統を生み出して行くことができる。」とし、伝統を掘り出すのではなく、対決することが創造につながるとしている。また、「和風建築と現代のデザイン」[池辺 1955b]では、「建築家の創造者としての立場と、再現者としての立場、この2つの立場は建築が普遍的な生活に得られた芸術であり、しかも一品生産で行われている限り必要かも知れない。この問題を根本的に解決するのは恐らく工業生産への道であろう。工業生産によって建築家は現代建築の創造性を取り戻すことができる。」としている。「日本的デザイン」という言葉を使う等、伝統の問題を形象の問題に偏って捉えていたようにもとれるが、住宅生産の規格化を研究し、工業化の立場で住宅作品をのこした池辺なりの主張が見られる。前掲、1955年2月の評論では、「私たちは日本の伝統を考える時に、大きく分けて2つのこと、上層文化の中で輸入文化がどのように処理され、発展して行ったか、という点と、原始以来持ち続けられている日本の下層社会の建築の特質を明確に把握すること、に集約して考えることができる。日本の歴史上にこの2つのものがぶつかり合ったのは桃山時代の茶室・数寄屋の発展である」[池辺 1955a]とし、前述、丹下の桂論への関連も見て取れる。

上記のような1950年代の建築の伝統論争について、藤岡洋保は「その背景には社会主義美学の登場、海外からの日本建築への関心、急激な伝統排斥への反動などが挙げられよう。このときには1930年代のモダニズム的伝統理解が基礎になったが、そのほかに、①「民衆」の視座への共感、②「空間」による伝統の把握、③「縄文的なもの」への関心、が登場した」[藤岡 1991]と解説している。

特に③について白井晟一の果たした役割は大きいと考えられている。藤森照信は、「結局、伝統論争という演目の丹下と川添の二人芝居を見せられていたのではないかという気になってくるが、そうしたなかで、ただひとり、二人芝居の盛り上げ役にならずに独自の見解を吐露したのが白井晟一であった。伊豆の大型民家である江川邸をとりあげ、「縄文的なるもの」を書く。日本の造形文化の流れを縄文と弥生のふたつに分けたうえで、縄文的なるものの生命力を謳いあげた画期的な文であった。それまで、建築史家はともかく建築家の

目は伊勢から桂までの弥生系の伝統にしか関心が向いていなかった。(中略) この白井の文によって、丹下の論と作は、はじめて相対化された。」[藤森 1995]と白井を位置づけている。

また、丹下健三の伝統論についての論考を見ても白井の影響が指摘されている。門脇稔・田路貴浩は、『桂』は石元泰博との共著で、前半の「日本建築における伝統と創造」を丹下が執筆している。その第2章「桂にいたる伝統」で、丹下は突然「縄文的なもの」と「弥生的なもの」の交錯のなかで伝統を捉えようとする。「縄文的なもの」とは、自然に対し戦い挑んでいく、生命力にあふれたエネルギーのことであり、農民・町衆のような下層系譜に流れるものである。一方、「弥生的なもの」は自然に対し妥協し、美学的に形式化を推し進める文化で、これは反対に上層系譜に現われるものとされる。これには岡本太郎や白井晟一の影響があったと考えられる。」[門脇・田路 2008]と論じている。

このように、1950年代の伝統論争の中で、白井晟一は、近代主義と相性の良かった日本建築の伝統にみる弥生的系譜への対立軸として、縄文的なものへの評価を提示し、結果として、時代を中心にいた丹下健三の活動に影響を与えた建築家として位置づけられている。

他方、白井晟一を論ずる評論においては、上記の位置づけに対する違和感が表明されてもいる。布野修司は、「ただ単に、日本建築の伝統は「弥生的なるもの」ではなく「縄文的なるもの」である、「伊勢」や「桂」ではなく「民家」である、というのではない。白井にとっての「伝統」「民衆」「創造」は、何よりも、自らの具体的な体験をもとに、また歴史の根源に遡って思索されるものなのである。」とし、白井が「機能主義」へのアンチテーゼの建築家として積極的に位置づけられたこと等に対し、「こうした白井晟一評価の構図は、それが直接に対置された部分において、裏返しの意識として保持された。その皮相な位置づけにおいて、白井晟一に対する反感もまた広範に組織されるのである。」と記している[布野 2010]。

さらに松山巖は、伝統論争における上記の問題に、より意識的であり、エッセー「縄文的なるもの」の一節について次のように主張する。

「強靱な精神の表現」とは枠に嵌らず、類型化されず、むろん枠に収まらない、もののはじまりであり、決められた型や手本などない表現である。だからこそ人は理屈や手本など知らなくとも、直感的に歴史の重みや人間の可能性を感じることができる。ならば我々は自己の主体を枠も理屈もない、原初の可能性にかけろ、と白井は語っている。さらにいえば彼は、弥生だ、縄文だと分類しても意味はない、伝統

は手本だと思い込み、一筋の希望を見ようとする日本人のコンプレックスを喰い、かつ悲しんでいるのだ。しばしば彼は孤高の建築家とレッテルを貼られたが、こうレッテル貼りすること自体がいかにも、彼の言葉が理解されなかったかを、明瞭にあらわしている。[松山 2010]

以上のように、1950年代の伝統論争における白井の位置づけと、白井が実際に語ろうとした内容には齟齬があると考えられる。そこで、次節では、白井晟一による伝統論を、その著作全体を通じて時系列に見ていくことにより、白井が伝統について語ったことの変遷と真意を確認してみよう。

2 1955年以前の白井晟一の伝統論

2-1 「華道と建築」

白井の伝統論において重要なエッセー「縄文的なるもの」は『新建築』誌1956年8月号に公表された。これより前の白井の伝統論について見ていこう。

まず、講演記録「華道と建築 日本建築の伝統」[白井 1952a]が挙げられる。白井がはじめて伝統に対する考えを述べたものであるが、後に展開する伝統論とは主旨が異なる点が多い。そこでは、白井の伝統に対する姿勢が熟していないことが伺える。すなわち、後に否定していく昭和初期の建築家達による伝統論が形成した、近代主義のフィルターを通した「日本的なもの」⁴⁾、言い換えれば弥生的系譜の伝統を肯定的に扱っているのである。例えば、伊勢神宮を「永遠の象徴」と賞賛し、日本建築の特徴として、「構成そのものに美的効果を内在」し、「屋根の美しさ」は「独特な風土・自然」によるという。また、「構造そのものに仕上がった建物の美」、「日本の伝統的建築の構成は木材架構につきる」、「木材の質の理解取扱の練磨は勿論、寸法の規準、比例の厳密精妙なること」と述べ、室町期の建築については、「「単純」の理想を確立し乍ら、人間的な表現の目標として「簡素」という創造形式を獲得」したという。

他方、それらの建築家とは異なる主張も見られる。床の間について、「床の間の起源は祭壇」であるとし、その精神性を含んだ伝統的側面を重視するほか、そこには「あらゆる芸術を受容できなければならない」が、「何一つ飾りものがなくとも、それ丈で既に幽玄な芸術世界」をつくるものであるとしている。生活空間に芸術を取り込む点に注目して、床の間の現代的意義を求めていた他の建築家達とは一線を画している⁵⁾。

2-2 「試作小住宅」

「試作小住宅」[白井 1952c]は、同作品の雑誌発表の際に付けられた説明文であるが、ここでは白井が生涯言い続ける近代数寄屋批判が展開されている。「都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず、殆んど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚楽色のリシン壁で、いわゆる近代数寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあつては、当然、充分な考慮を払わなければならないインシュレーションや壁体内の通気には甚だ冷淡である。この様式は花柳狭巷にはよろしい。しかし健全なるべき階級の住宅までこの様式を逐うのは問題である。」という。

建築の構法について言及しているが、その背景となっているのは、限られた者だけが享受する官能に媚びた文化への批判であり、民衆の健全な文化のあり方を重視している。川添登によれば白井は、和風建築と売春との関係に言及した浜口隆一と同様の感覚を持っていたという⁶⁾。

同様の主張は、対談「木のはなし」[白井・神代 1978]や対談「建築と書」[白井・栗田 1980]でも見られ、白井の和風建築に対する態度として根幹をなすものであった。

2-3 「住宅思言」

「住宅思言」[白井 1953c]は、『新建築』11月号で発表されたエッセーであり、「機能」を主題として取り上げている。コルビジエを中心とした西洋的な機能主義を批判し、日本の伝統の中から捉え得る機能の考え方の優位性を主張している。匙について「西洋的な機能と意識前と考えられる日本的な機能との対立の中に埋れ乍ら之等が正しく把握されていれば、箸が匙におとる機能と断ずる誤はおかさない。」とし、「生理に甘えさせること丈が機能的で合理的であるとは考えない。むしろ人体を正し、教え鍛える建築にこそ従事したいと思う。限られた瞬間に特定の人間のみに媚びる様に造った建築に永遠の形など現われることはない。(中略)日本の若い建築家が日本的機能の内的な規定者を明確につかむこと、即ち我々の文化が発達してきたプロツェスの試練のきびしさを体得すること、匙の追求以上に箸のファンクションをもって吾々の建築をのばしたいものである。」という。白井の造形における目的意識として、限られたその時々機能的要請に応えることなく、むしろ人間を鍛える永続性あるものを目差していたことがわかる。

後述のエッセー「豆腐」やエッセー「めし」に通ずる、日本の生活文化に着目した独自の伝統論とも言えるが、日本文化の優位性を説明しようとしている点で、昭和初期の他の

論者による伝統論の文脈に近く⁷⁾、いまだ白井の伝統論が、発展途上であることが見て取れる。

3 1956 年の白井晟一の伝統論

3-1 エッセー「縄文的なるもの」

白井は、エッセー「縄文的なるもの」において、江川氏旧葦山館を取り挙げ、独自の伝統論を展開する。同稿の中で白井は「日本文化伝統の断面を縄文と弥生の葛藤において捉えようとしてきた」とし、江川邸について、「文化の香りとは遠い生活の原始性の勁さだけが迫ってくるのだ。(中略)民家のように油じみた守銭の気配や被圧迫のコンプレックスがないのは何よりわが意を得たものである。」としている。

ここで注意しなければならないのは、桂や伊勢を賞賛する既存の伝統論が弥生的であるのに対し、江川邸の荒々しい表情をもって縄文的とし、これを新たな日本の伝統の典型として提示しようというのが、この文章の真意ではないということである。白井が着眼しているのは、あくまでも表面的な形象と内的なポテンシャル（潜在力）の関係であり、かつ創造の主体である自分自身がそのポテンシャルをいかにつかまえるかということを主張しているのである。「Type あるいは Model から表徴の被を截りとり、その断面からそれぞれの歴史や人間の内包するアプリオリとしてのポテンシャルをわれわれの現実において感得し、同時にその中に創造の主体となる自己を投入すること」と記している。

白井が「縄文」自体を強調したかったわけではないことは、この文章の後にエッセー「めし」（次節参照）を発表して弥生の文化の特徴を肯定的に述べていることや、1957 年の「「縄文的なるもの」がよるめいて、輸入のアブストラクトや怪奇なオブジェが「伝統を克服する」ぞという勢いである」[白井 1958]という発言からも読み取ることができる。

白井の主張の論敵となったのは、桂や伊勢といった形式に範をとる、弥生的なものに偏重した当時の伝統論であったことは間違いないが、白井が重視したのは、縄文・弥生の対立構図のなかで「縄文」を推すことではなく、創造の主体として、形象に惑わされず、いかに潜在力をつかまえることができるかということであったと言えよう。

3-2 エッセー「めし」

前節にみたエッセー「縄文的なるもの」発表のすぐ後、『リビングデザイン』誌の 10 月号、11 月号において、エッセー「豆腐」[白井 1956b]とエッセー「めし」[白井 1956c]が

続けて発表された。「豆腐」は編集側からの指示題目であったが、「めし」は白井からの提案であったという⁸⁾。特にエッセー「めし」は、弥生文化について肯定的に触れたものであり、エッセー「縄文的なるもの」を中心に批評される白井の伝統論にとって注意を要する論と言えよう。

内容について見て行こう。ここでは、弥生文化の象徴ともいうべき稲作をモチーフに、「用」という概念について考察がなされる。白井は「めし」について次のように説明する。

人間とその仕事がまだ自然と適切な繋りをもっていた時代から、すぐれた自然法の体得者であった我々の先祖は、粒々辛苦の米稲をつくっていた。彼らの「土」のもっとも深い所から湧く水と、清祓の火によって炊かれた「めし」は先ず「神」に捧げられ、かれらの生を養うのは天の恵与たるその残滓であって、感謝と祈りによって再びこれを神に還元するのである。「めし」が人間の生きる糧であると同時に又「神」の力を養うものであったこのような時代には、「めし」は単純に手段ではなく、人間の生きる理由であり目的であった。「生」と「聖」を、「めし」において契合統一させた我々の祖先は、やがてこの祈りを共同体精神文化の背骨とするのである。弥生文化は「めし」の文化であった。

また、その「めし」を家族に取り分ける「母」によって支えられる「家」のあり方について、「日本の「家」は母の愛を中心に大きな自然の意志をもって個人を止揚する毅然たる秩序に支えられているところに特色がある。」としている。

「めし」の「用」とは、単純に腹を満たすものではなく、神への祈りと生きることを一つにして共同体を支えることであり、その共同体は「母」の無私の愛によって支えられているというのである。白井は、エッセー「めし」の中で、「「美」は究竟において「用」の属性にすぎず」としている。「機能」に相当する「用」のあり方を提示することによって、日本的な文化の独自性を主張したものと考えられる。同稿の最後では「「めし」は神と人倫の「愛」を契機として究竟の「用」に達した。日本的機能の原型としての「めし」にこの祈りと、無私の愛を見誤っては、語るべき色をこえた無垢に完全な白の「美」も、渾然たる部分と全体の緊密な「徳」も、日本人が感情し、願望する、いや歴史の過去、現在、未来を貫く共同体の幸福理念につなぐ「めし」のロゴスを自分のものとすることはできない。」と締めくくっている。

エッセー「めし」におけるこうした主張は、エッセー「豆腐」での議論を引き継いだものである。エッセー「豆腐」で主題となったのも「用」という概念であり、これによれば、

「用」とは、一つの生命が他の生命に奉仕することであり、それは同一共同体における永続性ある信頼としての「常」の中で成熟したものであるという⁹⁾。

エッセー「縄文的なるもの」で議論となったのは、創造の主体としての自身の内的な問題であったのに対し、「めし」や「豆腐」では、共同体や神といった集合的主体が意識されたものであり、両者は併存し、補完関係にあると考えられる。

4. 1957 年以降の白井晟一の伝統論

4-1 「伝統拡大」論

エッセー「縄文的なるもの」、エッセー「めし」が発表された 1956 年が終わると、1957 年に白井は、対談『『ギリシャの柱と日本の民衆』を読んで』[白井・神代 1957]で「伝統の拡大」という主張を行い、白井の伝統論は次の段階に入った。日本という限られた地域の事象を自分達の伝統と捉えるのではなく、世界全体に関わっていくものと捉え、その上に、つくり手としての自分達それぞれの個性が主体性として立つものだという。

第 3 節で取り上げた両論考では、白井独自の伝統論が披露されたが、主張の内容を見ると、日本という枠組みにとらわれていることがわかる。しかしながら、この「伝統拡大」論では、まさにその日本という枠組みを取り払うことが意図されている。

白井は同対談で次のように述べている。

世界はその歴史を通じて一つの有機体であって、世界の文明については一つの目標があるだけだと思うのです。伝統の問題をせまい民族と地域におしこめては、自己の文明を誇示するにすぎず、伝統の発展的な世界的意味をなくしてしまうものだと考えます。(中略) 伝統の拡大などというまでもなく、もともと伝統というものはその様に世界全体がかかわっているものであり、人類の心の底になにか統一のあることを感ぜざるを得ないのです。(中略) 歴史世界の現実を、われわれが夫々の個性の底で確信している終局的な価値と目標との対応の中でとらえなければいけません。

主体性はこのような対応の関係における、全体の上にたつものだと思います。

このような「伝統拡大」の主張は、「伝統の新しい危険 われわれの国立劇場建設」[白井 1958]でも見られた。シドニーオペラハウスについては、「とにかく私には、全体の造形からデンマーク人伝統 [ママ] の自然な流出と同時に、シュメール (古代西アジアの民族) 文化への強い歴史的関心が感ぜられた。人類文化の源泉を追求しながら、作者の内にある新しい強固な世界共同体への願いをこめた「伝統拡大」という自由で積極的な思想を表わ

すものに違いない。」とし、日本における国立劇場コンペについても「われわれの国立劇場も、民族の表徴であるだけでなくシドニー国立劇場当選案が示したような世界共存の思想の通路となる創造でありたい。それには身近な新しい伝統の危険を克服しながら、一步進んで世界史的な鍛錬の中で「伝統拡大」という目標を持つことだ。「創造の壁」の一つの突破口である。」とした。「新しい伝統の危険」とは、パターンとしての桂や龍安寺の復習や、輸入のアブストラクトが伝統を克服するというような風潮を指している。

これについては、川添登の「白井晟一その人にとっての“世界の伝統”とは、諸民族の芸術的要素を恣意的にとり入れることを意味するのではなく、具体的には氏が若い日にそこに沈潜していたヨーロッパと日本との内面的な融合なのである。」[川添登 1968]という指摘もある。

4-2 「ユーラシア的」スケールへ

白井は、日本に限定した伝統の捉え方を否定し、その議論は「人類」・「世界」といったある種の普遍性に拡大されたわけだが、1960年代後半になると「東洋」や「ユーラシア」といった具体性を持つようになる。

対談「人間、物質、建築—現代のデザインについて語る」[白井・原 1967]では、「日本人は東洋人にはちがいないが、僕にとっては東洋は西洋よりエキゾチックで、だからこそ東洋という総称の概念でない、オリエントや印度や中国で知りたいことがたくさんある。僕は二年程前から漢字を筆墨で習うのを日課にするようになって、中国文化の豊かさが、だんだん身近にわかるようになった。まえに僕のことを、日本伝統に回帰する人だと言ってくれた人があるけど、僕にはそういう実感がいまもってわいてこない。」と説明している。白井は建築家でありながら、1960年頃から書に没頭するようになった。1977年には「この十数年、一日の半分を習書でうずめることができたのは大きな恵みであった。」[白井 1977m]と記している¹⁰⁾。日本にとどまらない東洋やユーラシアの雄大さへの傾倒は、白井を書の手習いに向かわせる一つの原動力となったとも考えられよう。

また、対談『『西洋の壁』を突き破ろうとした建築家の哲学と作品』[白井・村松 1969]では、「伝統というのは自分の中にいやでも応でもくっついていてるものだと思います。僕がどうしようと日本人だし、日本の文化と歴史を負ってここにこう出て来たんですからね、もっと大きい目でみれば西洋のものが我々の伝統の中に入っていると思うし、事実、我々の昔の日本独特の文化の中にも非常にヨーロッパ的な要素、或いはユーラシア的な大きな

美の原理というものが流れていると思うんですよ。」という。

さらに 1970 年の対談「詩と建築の原質」[白井・草野・栗田 1970]では、見たいと思う場所についてオリエントを挙げ、日干しレンガを積んでできたような建築に話が及ぶと、
「根本的にああいうふうにものを積んでいくというのは、無心になれると僕は思うね。ただひたすら積んでいくという無心な努力の積み重ねの方が、人間がちょっと頭で考えたものよりももっとスケールが大きくて、それこそ大地に肉薄するようなものができる。」¹¹⁾
とし、スケールの雄大さについて言及している。また日本という意識について、「精神とか文化意識というようなことじゃなくて、もっと肉体的なものだね。しょうがない、日本人だということがあるんじゃないかな。僕らの場合、日本意識とか、日本の美の原理というものには、あまり関心がない。」と語っている。

1957 年以降白井の伝統論は、まず、日本という限定された地域のみを対象とすることを否定する。否定の要因となっているのは、日本における文化または造形そのものの限定性であり、日本に生まれたのでしょうがないといった、それに関心を持たない姿勢が強調された。その上で提示されたのが「ユーラシア」であり、永続性や、スケールの雄大さといった白井の求める考えと符合し、かつ日本文化の根底にも流れているものという捉え方が示された。

5 晩年の白井晟一の伝統論

5-1 伊勢と桂

1978 年 1 月の対談「木のはなし」[白井・神代 1978]では日本の伝統的建築についての様々な見解が示された。2-2 で見た近代数寄屋批判の考え方はここでも変わらず同様の主張がなされた¹²⁾ のだが、ここで注目したいのは、伊勢と桂の扱いである。

伊勢神宮については、「あれを日本的造形原理の典型として創造力のカリスマとするのは素朴すぎると考えています。あの建築造形は南方あるいは北方水辺での生活の定着を獲得した民族の住居様式であることが明らかなだけ、いわゆるユーラシア大陸文化の東のターミナルとしての普遍性をもった原型として扱うには遍在性が顕著すぎて、私にはオリジナルな感情移入さえむずかしい。(中略) 建築者として大きい影響をうけてきたのは伊勢ではなく唐文化を日本的に開花させた奈良、唐招提寺や東大寺法華堂などだった」としている。2-1 の「華道と建築 日本建築の伝統」で示された伊勢の扱いとは全く異なるものになっている。

また、桂離宮については「後世では旧聚楽第移築の三溪園の諸建物、桂や修学院、京都御所などたくさんありますが、どちらにせよ特権者のための建物以外でないということは一様にわれわれの文化遺産といってもいろいろ考えさせられるものがあります。イデオロギーではなく造形のガイストの問題です。」としており、白井の近代数寄屋批判と重なる。

しかしながら一方で、川添登が「白井晟一は、桂離宮・修学院離宮を見学し、学ぶところが多かった」[川添 1978a]というように、白井にとって桂離宮は良質な木造建築の手本であったことは否定できない。したがって、建物の成立経緯は否定するものの、物的な実例としては肯定するという両義性が見てとれる。1983年のエッセーでは、「桂」の空間は語りつくされている。ここでわたしが新鮮を加えられるものではない。ただ、その卓絶にひそむ日本的感性の凝縮した構成の純粋さと自由。その追体験の厚薄こそ、これからの日本文化の質に深く関わらねばならぬことを重ねて銘記するにとどめよう。」[白井 1983b]としている。

5-2 伝統論争を振り返って

1978年4月の対談「創造の倫理 精神の荒廃のなかで」[白井・原・宮内 1978]では、1950年代の伝統論争を振り返っての白井の思いが明らかにされた。「あの論争は多少見聞きしてましたが、関心はなかった。あれは何か地域戦争のような気がしてね。私はもともと伝統主義のほうではないが、そうかといって積極的に伝統否定に立っていたわけではない。まず、伝統は好む好まざるにかかわらずおのずから身についたもので、意識下のことだし、とやかくいうことじゃないぐらいに考えていたんだ」、「当時謳歌されていたジャポニカと不倫な連繋をもっている、そそっかしい伝統論への違った観点からの抗議だった」、「伝統という概念を特殊なローカリティから開放された自由人間的、普遍的なものの場で確かめてゆくことなんだ」といった発言がなされ、前章で見てきた「伝統拡大」論以降の考え方をベースにした白井の考えが確認できる。

また、白井にとっての伝統と創造の関係性を示す注目すべき発言もあった。「“わび”・“さび”という消極性の極限にしても、まして卑賤な権力、文化や守銭、遊蕩、せいぜい“いき”の文化では、現代をかけて継承すべき伝統の仮託すら心もとないと思うのは僕一人ではないと思う。疑いなく現代を風靡する西欧的文化にしても、所詮目先がきき、小手先の器用で写し、これまた批判精神の欠けた模倣文化にすぎない。批判精神と創造の契機とは、伝統論の中ではシノニム〔同義、引用者注記〕ですよ。大陸文化受容から始まって明治・

大正という現代に至るまで、いわゆる日本的創造といわれているものの脆弱さは、実はこの批判精神の貧困によるんだ。」という。前半部については、批判精神の欠如という意味で、白井のエッセー「待庵の二畳」[白井 1957]における利休批判¹³⁾にも通ずる、日本文化として特徴的な「わび」、「さび」、「いき」への批判が見られる。後半部では、批判精神と創造の契機とは同義であるという伝統論の中で創造に向かう白井の態度が示された。

5-3 アニマとペルソナ

対談「普遍のアニマ」[白井・磯崎 1981]で白井は、「アニマ」という語を使って古典の捉え方を説明している。ここでも「伝統拡大」の主張が確認できる。

古典のアニマは、西洋人のうちにも、われわれのうちにも呼吸している普遍な実存だ、という自負がほしい。(中略) 一口でいうと、神から人につながる歴史全体を含んだ古典の質と表象は、白紙で感得する修練の蓄積によってはじめて、その対決する一人一人のうちに、各々の古典観を触発するものとなる。古典を典型やドグマの中でかたづけるのではなく、アプリアリとして、内在する普遍なアニマから、その時々刻々転変する生命のアトメン(息吹)を感得する。そのような眼と心一如の「行」。そうなれば自ら、古典は向い側のものでなく、自分の中にあるものとなる。ギリシアもローマも、アールヌーボーさえ¹⁴⁾。

続いて対談相手の磯崎新が「やはり地域性や土着性というようなものを越えた、もっと普遍的に訴える力を持つものというのが古典なんでしょうね。」と言ったのに対し、白井は「そのスケールと骨格に問題があるんだね。古典はある短い時間や狭小な地域の表象では支えられない、なにか悠久な勁筋の肉付が要る。(中略) 必ずしも、「種」にかかわるわけではないが、数寄屋のスケールや骨格はそこまでには距離がある。」としている。古典が持つべきものは、地域性や土着性ではなく普遍性であるとし、ここでも数寄屋を否定している。

対談「現代建築と聖なるもの」[白井・栗田 1982]では、「源信や最澄にはアプリアリとして縄文的なポテンシャルが憑いていたと思いますよ、アニマが生きてる気配があるんです。イズムとしておしつけるのではなく、そういうアニマに積極的に導かれてゆく心を民族精神の柱として確認したい。わたしは「縄文的なるもの」を形として誰にでも見える怪奇なものに結びつけるわけにはゆきません。アニマの抜けがらのような土器もあります。ひっくりめてわれわれの文化の原形とはし難い。(中略) ペルソナは仮象だし、アニマは実

存だもの。わたしのいう「縄文的なるもの」はアニマなんだ。」といい、エッセー「縄文的なるもの」から主張された表面的な形象と内在する潜在力の関係について、ここでは「アニマ」と「ペルソナ」という形に置き替えてで主張された。

おわりに

白井晟一の伝統論において象徴的とみなされてきたエッセー「縄文的なるもの」は、縄文文化を賞賛するものではなく、その真意は、創造の主体が、表面的な形象に惑わされずに、いかに内的な潜在力を掴むかという主旨であった。数ヶ月後のエッセー「めし」では、弥生文化の象徴である「めし」をモチーフに、白井独自の「用」の概念が、日本文化の独自性として説明され、神への祈りと生きることを一つにして共同体を支えるという見方が示された。前者では、創造の主体としての自身の内的な問題が取り上げられ、後者では、共同体や神といった集合的主体が意識されたものであり、両者は併存し、補完関係にあるものと考えられる。

その後、白井の伝統論は「伝統拡大」論へと変化していく。日本という限られた地域に限定して伝統を語ることを否定し、世界共通に、普遍的に求めていけるものだと主張するようになる。こうした主張は、やがて「ユーラシア的」という形で具体性を持つようになり、その文化に対する傾倒は、白井を書の手習いに向かわせる一つの原動力となった可能性がある。晩年、伝統論を振り返っての発言が見られるが、上記のエッセー「縄文的なるもの」での真意を説明するものが多く、「アニマとペルソナ」はまさにその内容を指し示していた。

以上、白井の著作の経過を客観的に見直すことによって、白井の「伝統」に対する考え方とその変遷が明らかになったと言えよう。1950年代伝統論争において白井が主張したかったことは、創造の主体として伝統に臨む際に、対象の地域的由来や形象によらずに、普遍的な古典の潜在力を捉えるということであった。伝統なるものを考える時、創造の契機と批判精神とは、白井にとって同義であり、当時の伝統認識が批判精神を欠いていることに抗議をしていたのである。

第1章 注記

- 1) 以下の諸論考を参照した。「このような伝統論議がようやく行きづまりを示しはじめた昭和三十一年八月の「新建築」誌上に白井晟一の「縄文的なるもの」があらわれる。伊

豆菰山の江川邸を媒介としての彼〔白井、引用者注記。以下同様〕の所論は、直感的な鋭さもあり、「弥生的なもの」の行きづまりの中でひとときわ光を放った。〕〔八田 1959〕、
「伝統論争で菰山の江川邸を推して独自の論陣を張った彼は、とくに武家屋敷などに見られる書院の剛直なディテールを求めて数寄屋系と異なる和風の新しい世界を創り出していく。それはやがて次の第Ⅳ期〔1960～1976、引用者注記〕に呉羽の舎(1961)の離れである書屋や親和銀行本店(1967)の和室などへと展開していくものである。〕〔横山(監修) 1976c〕等。

- 2) 「大体、彼は縄文そのものを論じていない。考察は「縄文的なるもの」であって、岡本のように縄文土器を称賛したわけではない。江川邸住宅はもとより縄文時代の住まいではなく、江戸初期の建物である。〕〔松山 2010〕
- 3) 〔小林・山名 2011〕を参考にした。
- 4) 藤岡洋保による。その内容は「彼ら〔堀口捨己を含む近代建築家〕が建築における「日本的なもの」の特質として挙げたのが、a) 平面・構造の簡素明快さ、b) 素材の美の尊重、c) 無装飾、d) 非相称、e) 周囲の環境（自然）との調和である。それに f) 規格の存在（畳割り）が加えられることもあった。そしてそれらをよく体現した例として、伊勢神宮正殿や桂離宮が称揚された。〕〔藤岡 2009:86〕と説明されている。
- 5) 藤岡洋保は、伝統的要素と考えられる床の間を近代建築家たちは否定せず、むしろそこに現代的意義を見出して「日本文化」の独自性・優越性と普遍性をともに示そうとした傾向を指摘している。〔藤岡 2001〕を参照した。
- 6) 〔岩田(川添) 1956〕による。引用された浜口論は、〔浜口 1955〕である。
- 7) 「昭和初期の「日本的なもの」と堀口捨己」〔藤岡 2009:84〕を参考にした。
- 8) 「「豆腐」というのは編集者の方で考えた題ですけれども、「めし」というのはご自分でこういう題で書きたい、ということで白井さんの方から出て来た。〕〔川添 1982〕。
- 9) 「もし豆腐に美ありとするならば、体系をもって直接生活にとけている、「用」の美同一の如きものと考えより他ない。それは用に対して、永続性ある普遍的信頼が予想されることによって、このような善における美同一が考えられる。われわれは、板の上できられる豆腐の音のテンポとリズムを、少年の頃から知っている。融通無碍の原型から、このような生に順応する尺度を截りだすときに発する美しい響きを、信頼のうちにききなれてきた。豆腐は、ながいあいだ日本人の生活の中で栄達者にも失意者にも普遍的「用」として「常」の中で成熟し完成したもの

の生命が他の生命に奉仕することだと言えるなら、豆腐も人間との適応の関係においてのみ、豆腐たり得る。(中略) 美も、機能も、或いは論理も、「用」に完全に埋没せられて始めて価値を生ずる。然も「用」は理性を生み、その理性をこえて善の意思に従う。」[白井 1956b]下線引用者。

- 10) 白井はエッセー「明窓淨机」[白井 1977m]の中で、書について「今日私等をして仰ぎ学ばざるを得ない「書」はいずれも時代精神の象徴であったことはいうまでもないが、これは聖なるもののサインというより人間の正息であった。だから「用」の最尖端にたつ重要さを支える明快さと、理性のノルムを逸脱することのないきびしさをそなえていなければならぬ」と「用」に徹することの重要を説いている。また、「筆・墨をもって紙にむかうことはたしかに一つの「行」にちがいがなかった」とし、これに関わって、「「空」にせよ、「無」にせよ「風」にせよ、これらをいわば即如の弁証法的な実体として書の空間を通して自分の肉質の中に叩きこみたいからだ」と述懐せずばなるまい。」[白井 1966]としている。
- 11) 引用文中、「ああいうふうには」とは、直前箇所より、「どろをこねて、乾かして積み上げる」ことを指す。
- 12) 「木骨の両端をモルタルで包んでしまつて軸がむれ腐りかけている瀟洒な建物を見たことがあります。インターナショナル・スタイルだか、花柳狭巷スタイルだか知らないが、これは、もつてのほかだ、と思いました。木は生きものですから呼吸しなければなりません。それをモルタルで塗りつぶしては、ジョイントやエンドはフリーにならない。全く無茶苦茶な構法です。私の真壁式大壁はその欠点に対応するものだったはずですが、誰も何ともいわなかった。」「数寄屋建築で通っているものに、ある時期を風靡した花柳出生としか考えられぬ和風建築がありますが、私は同情が凡てないのです(中略)たとえば木造の主体的外構をモルタルで塗りつぶしてその呼吸をとめ、日光の照射や雨風の侵蝕を守るべき外部詳細に、木を紙のように扱う軽技的手法をあえてするなど、ここらはまだ論外、末梢の問題とするのもよいですが、おどろくべき高価な資材と手練の名人職方の影で、果して現代日本を最も汚染した精神に奉仕・表徴するデザインになり畢ることはないのか、そしてその内外空間にくりかえされる卑賤な洗練も、所詮、一握りの特権階級のための媚態の増幅デザインに過ぎないのではないかということ。いずれにしても多難な歴史的使命を荷わざるをえない庶民の健全な住文化昂揚への指針冒瀆に対する自覚の無さ。そんな作例への批判を忘れなかった建築ジャーナリズムがあつ

たかどうか」といった箇所が挙げられる。

- 13) 「藁屋の草庵と黄金の席の併存するところにどのような抵抗があったか、無着圓悟や虚堂墨蹟にささえられる茶禅一事は数寄であろうが精神とはいいいがたい、佗数寄であってもわびではない。待庵の二畳は抵抗の数寄か、数寄のイロニイか。利休は身中の矛盾と時代の矛盾にいかにかたかったのであろうか。(中略) 芭蕉の「わび」はイロニイではなかった。利休の抵抗はイロニイを出ることができない。芭蕉は一切を否定する精神の此岸で骨身を削る内苦の意識に飽和しながら自然と官能へ真正面から対決したのである。生涯見性成仏を掲げながらなお富貴と権勢に胸ふくらます利休が、数寄とイロニイを断絶するのは釜の湯のたぎる音をききながら切腹の座についた時からであろう。」
[白井 1957]

- 14) 文中「アニマ」は、「生命」の意味と注記されている。また「古典」は、文脈より西洋建築における古典を指すものと理解できる。

第2章 白井晟一建築作品の和室における空間構成について

はじめに

本章では、白井晟一の建築作品における和室の空間構成について、特に天井の形状に着目して、その特徴を考察する。

白井は昭和期住宅史の中で、和風を手がけた代表的建築家のひとりと捉えられ、中でも特異な存在として位置づけられてきた。「土筆居 書屋」(1953)、「呉羽の舎」(写真1 / 1965)がその実例として挙げられる一方、白井は住宅に限らず公共建築等においてもその一部で和室を手がけており、「親和銀行本店Ⅰ期」4階客室(写真2 / 1967)はその代表的な作品である。

白井の和風についての主要な評論の内容は、以下の四点に焦点を当てていると考えられる。

一に「試作小住宅」説明文[白井 1952c]の木造住宅に関する白井の言説に立脚した、真壁風大壁のシステムと民衆の建築家としての白井の建築家像を結ぼうとするもの¹⁾、二に白井のエッセー「縄文的なるもの」[白井 1956a]を基に、柱の太さ、深い軒の出、閉鎖性、低い床といった特徴を取り上げ、これを数寄屋風と比較して、つよい表現または禅堂風として説明するもの²⁾、三に同時代の建築家とは異なるヨーロッパでの経歴³⁾を背景に、和と洋といった対比に代表される、形式の混在について指摘するもの⁴⁾、四に茶室等からの影響の可能性を示唆しつつ、柱、壁、天井のつくり方による空間分節のあり方に触れたものである⁵⁾。

本章では、内部空間としての性格に論及している第四の主題に注目し、調査可能な白井の和室を全て見直すことによって、その特徴と変遷を客観的に究明するものである。このように事例を網羅的に概観する白井の和室制作史研究は、上記の批評群にも見られない。したがって、この方法により、白井の設計の一般的傾向を明らかにする一助となる可能性がある。

本章が天井の形状に着目する経緯について触れておこう。第2節でみるように、白井の和室では、ゆか面の配置計画に呼応しない、天井独自に形状や高低が決定されている例が多数存在することから、天井面の構成に空間構成上の意図が表現されている可能性が認められる。さらにその事例は特定の時期に限らず、活動期間を通じて存在することから、作品の変遷が考察可能である。よって、白井の和室における平面計画と天井伏の相関あるい

は「ずれ」が考察すべき課題となる。

考察の事例については、白井晟一の建築作品における和室⁶⁾のうち、『白井晟一全集』⁷⁾図集Ⅰ～Ⅵおよび補遺に図面が掲載され、天井伏図またはその他の図によって天井の形状が読み取り可能なもの、計76例を分析対象とする(表1)。

第1節では、分析対象の天井に見られる断面形状を抽出・分類し、その上で、各形状が天井伏図上どのように組み合わせられるかによって各事例の天井伏構成の類型を得る。

第2節では、1節の結果を踏まえながら、平面計画上の秩序と天井伏計画上の秩序に差異(以下、「平面・天井間差異」と表記。これを含む室を「平面・天井間差異室」と表記。)が認められるものを、空間構成上特徴的なものとして抽出し、天井面と平面図との変化がどのように分布しているかを調査する。さらに平面・天井間差異が生じている部分が、どのような建築的要素が関連しているかに着目し、平面・天井間差異を含む事例の類型を得る。

第3節では、第1節で得た天井断面形状及び天井伏構成の類型、第2節で得た平面・天井間差異室の天井伏構成の類型について、竣工年との関係から考察を行う。

なお、写真の竣工年の前に付した番号は表1の事例No.を示している。

1 天井形式による和室の分類

本節では白井の和室の天井形式を二段階に分けて分類する。まず、天井の断面形状の特徴から図1に示す、7つの形状に分類する。次に、これらの形状が、図2に示すように、天井伏図上どのように構成されているかによって17種類の類型を得る⁸⁾。

1-1 天井断面形状による分類

表1の各事例に見られる天井断面形状は、①平、②室内に一部勾配をとる天井(以下、「一部勾配」と表記)、③落、④船底、⑤掛込、⑥下り壁、⑦室内四方から勾配をとる天井(以下、「四方勾配」と表記)の7つの形式である(図1)。下り壁については、天井の形状というよりは、落掛を伴って床の間の要素として考える方が一般的であるかも知れないが、白井の和室においては、床の間以外の部分に設けられる事例があるため、天井断面形状として扱っている。逆に落天井を床の間の落掛と見立てる例もあり⁹⁾、天井に存在する形状は差別なく取り上げている。

事例として最も多かったのは平天井であり、全事例76件のうち27例見られた。次に落

表1 和室事例と分類の結果

No.	作品名	年	種別	階	室名	畳	天井断面形状(図1)	断面形状と天井 伏の関係 (図2)	横抜	平面・ 天井間 差異室 (図4)	備考
1	アトリエNo.5	1952	住宅	1	寝室	2	①平	①単平型			
2	試作小住宅	1953	住宅	1	和室	4.5	③落	②単落型	○	○	
3				1	三畳室	3	①平	①単平型			
4	土筆居 書屋	1953	住宅	1	居間	8	③落	②単落型	○	○	
5				1	書斎	6	③落	⑧L落落型	○	○	
6	半澤邸	1953	住宅	1	予備室納戸	3	②一部勾配	④単勾型	○		
7				1	夫人室	6	④船底	⑤単船型	○		
8				1	主人室	6	⑤掛込	③単掛型	○	○	
9	仙北木材会館計画	1953	公共	1	宿直室	2	①平	①単平型			
10	琅かん席	1953	住宅	1	(1室のみ)	6.5	⑥下り壁	⑥単下型		○	
11	知宵亭	1953	商業	1	私室「蘭」	6	⑥下り壁	⑥単下型			
12	アトリエNo.6	1955	住宅	2	寝室	6	③落	②単落型		○	
13				2	納戸	3	①平	①単平型			
14	永田邸	1956	住宅	1	書斎	3	①平	①単平型			
15				1	寝室	4.5	①平	①単平型			
16	竹本邸	1956	住宅	1	老人室	4.5	①平	①単平型			
17	料亭 岡本	1956	商業	B1	小客室1	4	①平	①単平型	○		
18				B1	小客室2	4	①平	①単平型	○		
19				B1	小客室3	6	③落	②単落型	○		
20				3	和室	6	②一部勾配	④単勾型			
21				3	宴会室	13	⑥下り壁／③落	⑩二下落型		○	
22				4	寝室	6	①平	①単平型			
23				4	予備室	2	①平	①単平型			
24	松井田町役場	1956	公共	2	和風会議室	16.5	③落	⑮コ落落落型		○	
25	松井田町役場 附属棟	1956	公共	1	宿直室	4.5	②一部勾配	④単勾型			
26				1	使丁室	4	①平	①単平型			
27	雄勝町役場	1956	公共	2	談話室	10	⑥下り壁	⑥単下型			
28	奥田邸	1957	住宅	1	客用座敷	15	⑥下り壁／③落	⑨L下落型	○	○	
29				1	客用次ノ間	8	③落	⑧L落落型	○	○	
30				1	主人室居間	9	⑥下り壁	⑥単下型	○	○	
31				1	主人室寝室	8	③落	②単落型	○	○	
32				1	居間及び食堂	8	①平	①単平型	○		
33				1	女中室	4.5	①平	①単平型			
34				2	子供室(女子)	6	①平	①単平型			
35				2	若主人寝室	6	①平	①単平型	○		
36	中山邸改装	1957	住宅	1	和室	7	③落	⑮コ落落落型	○	○	
37	古川邸	1959	住宅	1	老人室	4.5	①平	①単平型	○		
38				1	寝室	6	⑤掛込	③単掛型		○	

No.	作品名	年	種別	階	室名	畳	天井断面形状(図1)	断面形状と天井 伏の関係 (図2)	横抜	平面・ 天井間 差異室 (図4)	備考
39	四同舎	1959	公共	1	集会室	20	①平	①単平型	○		飛梁
40	漣亭	1959	商業	1	10畳室	10.5	③落	②単落型	○	○	
41				1	6畳室	6	⑦四方勾配	⑦単四型			
42				1	茶室	3	③落	②単落型		○	
43	嵐亭		商業	1	居間(大和室)	12.5	③落	②単落型		○	吊天井
44				1	寝室	6	①平	①単平型			
45	杉亭		商業	1	大和室	12	③落	⑧L落落型		○	
46				1	寝室	6	④船底	⑤単船型	○		
47	浜野邸	1961	住宅	1	団欒室	4.5	①平	①単平型	○		
48				1	寝室	6	①平	①単平型			
49	飯塚邸	1962	住宅	1	客間	6	②一部勾配	④単勾型	○		
50				1	使用人室	3	①平	①単平型			
51				1	寝室	9	③落	②単落型	○	○	
52	呉羽の舎 主屋	1965	住宅	1	客室	11	③落	②単落型	○	○	飛梁
53				1	寝室	7	①平	①単平型	○		
54				1	主婦室	4.5	①平	①単平型	○		
55				1	子供室	4.5	①平	①単平型	○		
56				1	老人室	7	③落	②単落型	○	○	
57	呉羽の舎 書屋	1965	住宅	1	畳座	6.5	⑥下り壁／④船底	⑫二下船型	○		
58	鹿子木邸(原案)	1965	住宅	1	寝室	6	⑤掛込	③単掛型		○	
59				1	客室	8	④船底	⑤単船型	○		飛梁
60	親和銀行本店 I 期	1967	商業	4	客室A	16	⑥下り壁／③落	⑭コ下落落型		○	
61				4	客室B	12	⑥下り壁／③落	⑩二下落型		○	
62	海山居	1968	住宅	1	和室A	6	②一部勾配	④単勾型			
63				1	和室B	10.5	⑥下り壁／③落	⑩二下落型		○	
64	昨雪軒	1969	住宅	1	客室	8	⑥下り壁／③落	⑯L落落+下型	○	○	
65				1	居間	6	⑦四方勾配	⑦単四型			
66				1	使用人室	3	①平	①単平型			
67				2	寝室	6	③落	⑧L落落型	○	○	
68	尻別山寮	1972	商業	1	和室主室	11.5	③落	⑧L落落型	○	○	
69				1	和室次ノ間	6	①平	①単平型	○		
70				1	和室広縁	3	③落	②単落型	○		
71	高松I邸		住宅	1	客室	10	⑥下り壁／②一部勾配	⑪二下勾型		○	
72				1	居間	4.5	⑦四方勾配	⑦単四型			
73				2	寝室	10	⑥下り壁／②一部勾配	⑬L下勾型		○	飛梁
74	雲伴居	1984	住宅	1	書斎	18.5	⑥下り壁／③落	⑯L落落+下型		○	
75				1	寝室	11	⑥下り壁／④船底	⑰コ下下下+船	○	○	
76	桂花の舎	1984	住宅	1	寝室	6	④船底	⑤単船型			

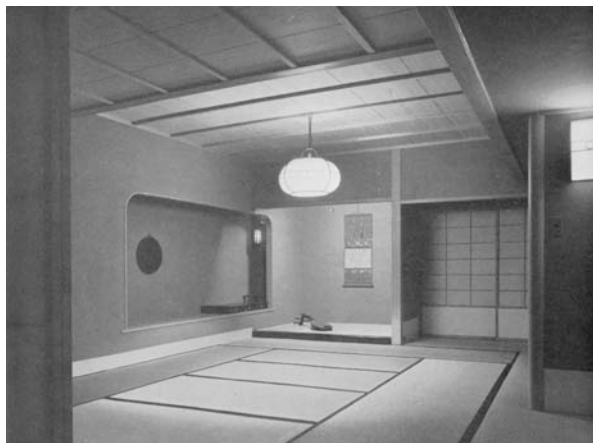


写真1「呉羽の舎 書屋」(57/1965) 写真2「親和銀行本店Ⅰ期」客室A(60/1967)

① 平	② 一部勾配	③ 落	④ 船底	横抜なし
⑤ 掛込	⑥ 下り壁	⑦ 四方勾配		横抜あり

図1 天井断面形状7例

① 単平型	② 単落型	③ 単掛型	④ 単勾型	⑤ 単船型	⑥ 単下型
⑦ 単四型	⑧ L落落型	⑨ L下落型	⑩ 二下落型	⑪ 二下勾型	⑫ 二下船型
⑬ L下勾型	⑭ コ下落落型	⑮ コ落落落型	⑯ L落落+下型	⑰ コ下下下+船型	

※太破線は下り壁、細破線は天井面の切り替え線(稜線)、一点鎖線は断面形状、グレー部は天井高の一段低い部分または下り壁で区画された部分を示す。

図2 天井断面形状と天井伏の関係種類17例

天井を含む例は合計 26 例にのぼる。落天井のみで用いられたのは 20 例であり、室内の一部に天井高の低い部分が設けられ、空間が分節されている。

続いて下り壁を含む事例は 14 例ある。そのうち下り壁が単独で見られたのは 4 例に止まるが、他の形式と組み合わせて用いられた例は 10 例ある。

一部勾配天井、船底天井を含む事例について見て行こう。一部勾配のみは 5 例、下り壁を伴う場合は 2 例で、合計 7 例である。船底のみは 5 例、下り壁を伴った例は 2 例で、合計 7 例である。

掛込天井、四方勾配天井については、それぞれ下り壁等を伴うことなく単独で用いられているが、数例に止まっている。

その他、表中、備考欄で注記した事例に触れておこう。「飛梁」は、室内上部の中空に梁状の部材を渡したもので、これも空間分節の装置と考えられる。例えば「呉羽の舎主屋」客室では、床の間部分の上部に落掛状の部材が渡され、下り壁はなく、天井面は隣室にそのまま続いていく構成となっている。「吊天井」は、「嵐亭」居間のみに見られるもので、これも床の間部分を定義するように、室内中空に設けられている。

また、隣室との間を隔てる壁の内法上部が吹き放ちとなり、天井面が直接、隣室に続いていく（図 1 参照／以下、「横抜」と表記）例についても、参考として表 1 に表記している¹⁰⁾。

1-2 天井伏構成による分類

図 2 に示す天井伏の構成は、大きく 3 つの群に分けられる。4 面の立面によって成立している矩形平面の室内において各面にそれぞれの天井断面形状が対応する形式が多く、単一の面に断面形状が表れているもの、2 つの面に断面形状が表れているもの、3 つの面及び 1 面内に複数の断面形状が表れているものである。

この構成を基に各類型を設定し、名称にも反映させている。同一室内において 1 断面形状のものは、まず「単」と表記し、その後に断面形状の種類を表記している。2 面に断面形状をもつものは、その形状同士の位置関係から「L」または「ニ」と表記し、後に断面形状の種類を 2 面分表記している。3 面以上のものについてであるが、まず 3 面のものは、その位置関係から「コ」と表記し、3 方向分を表記している。3 方向より複雑化したものは、既出の形式に追加されている形式「+○○」の形で追記している。

分類の結果を見て行こう。まず、天井面の構成が同一室内において平坦で一定である例

と、何らかの変化がつけられている例を分類してみよう。前者の事例に該当するのは①単平型で27例ある。変化あり（単平型以外の例）は計49例ある。単平型の中で横抜を含むものが11例ある。これは、当該の和室と隣室とを隔てる壁の内法上部が吹き放ちとされ、天井面がそのまま直接隣室につながる構成であり、全体的な天井構成として見れば特徴的な事例と言える。残りの16例の内容を見ると、殆どが主室には該当しないものであることから、白井の主要な和室の大部分が、天井に何らかの形状的变化を持った構成をとっていると言えよう。

天井面に変化を持った構成の内容を見て行こう。1室内に1天井形状要素が表れているものの事例が多く、②単落型は12例見られ最多の事例である。以下、④単勾型、⑤単船型、⑥単下型、③単掛型、⑦単四型と続き、それぞれ5、4、4、3、3例見られた。1室内に2面にわたって断面形状が表れた例の中では、⑧L落落型と⑩ニ下落型の事例が多く、5例と3例見られた。以下、⑨L下落型、⑪ニ下勾型、⑫ニ下船型、⑬L下勾型が、それぞれ1例ずつ見られた。1室内に3面以上にわたって断面形状が表れた例の中では、⑮コ落落型と⑯L落落+下型が2例ずつ、⑭コ下落落型と⑰コ下下下+船型が1例ずつ見られた。

2 平面・天井間差異室の分析

2-1 平面・天井間差異室を含む事例の抽出

前節で見て来たように、白井の和室の天井構成の特徴は、様々な断面形状によって変化を与えられていることである。こうした変化の要因として考えられるのが平面計画上の秩序に呼応した天井面意匠の切り替えである。端的な例は、床框によるゆかの段の変化に呼応して、落掛を伴った下り壁が設けられる床の間回りの例や、畳敷から板間へのゆかが切り替えに呼応して、落天井が設けられるといった例である。しかしながら、白井の和室においては、平面計画上で段差なく畳敷のゆか面が続いていく空間の上部で、落天井や下り壁等によって天井面の切り替えがなされている例、すなわち平面・天井間差異を含む例が32にも及び（図4で取り上げた例）、その天井面切り替えの要因については検討を要するところである。しかも多くの主室級の代表的事例がこの形式に含まれることから、白井の和室の特徴を究明する上で手掛かりとなる事例と考えられる。したがって本節では、この32例を対象に、平面・天井間差異の状況を探るものとする¹¹⁾。

2-2 平面・天井間差異室の天井伏構成の類型

図4は、32の各和室の平面図に天井伏図の情報を重ねたものである。図中、破線で示したのが天井の切り替えや下り壁の位置であり、改めて平面図上の秩序と天井伏図上の秩序に差異があることが読み取れる。天井高が低くなった部分および下り壁によって他の領域と区分された箇所（図4ではグレーで網かけしている）は、以下の論考で重要な要素となっており、「区分天井部」と呼ぶ。

この32の事例を図5に示すように、次の方法によって分類する。まず、区分天井部が室内の過半に及ぶ場合と、室内の端部に分布している場合に分けて考える。

前者の中で、室内の主要開口部に対し、これを含まない側の領域が天井高の低い部分となり（落天井）、区分天井部を形成しているものを①奥型とする。また、当該の室の秩序というよりむしろ隣室の天井の秩序が当該室に延長してくることによって、室内に天井高低差が表われ、区分天井部を形成しているものを②隣型とする。

次に後者についてであるが、区分天井部がいかなる建築的要素と対になっているか¹²⁾について分類した結果、次のような類型が得られた。床の間を含む面、小出入口を含む面、大出入口を含む面がコの字状に連なる③コ型、床の間を含む面と出入口を含む面がL字状に連なる④入L型、床の間を含む面と主要開口部を含む面がL字状に連なる⑤窓L型、床の間を含む面と出入口を含む面がニの字状に対面する⑥ニ型、床の間を含む面のみの⑦床一型、出入口を含む面のみの⑧入一型、押入や戸棚といった収納部を含む面（単複問わず）のみによる⑨収型である。各事例がどの形式に該当するかは、図4の中に示している。

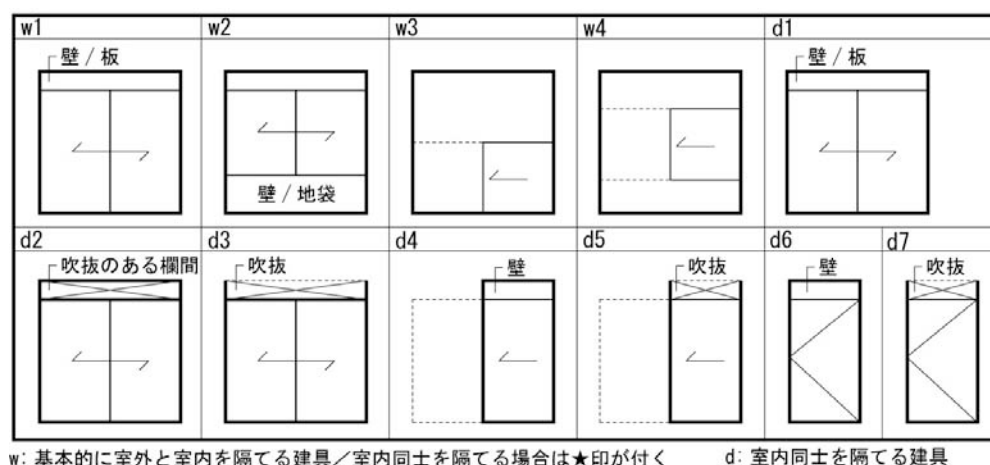
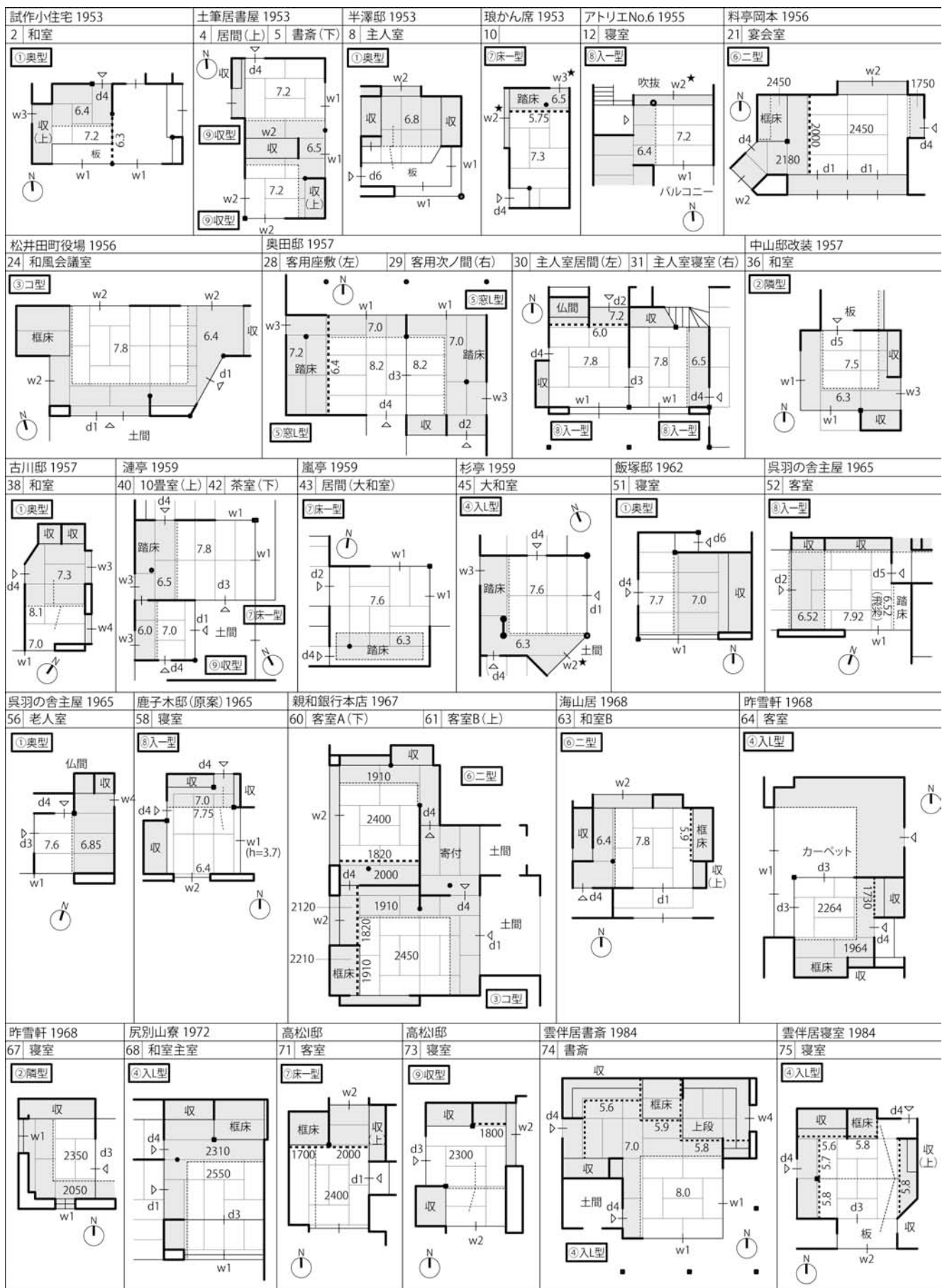


図3 建具の種類



図中、細破線は天井の切り替えライン、太破線は下り壁の位置を示す。グレー部は、天井高の一段低い部分または下り壁によって区画された部分を示す。建具の種類を示す記号については図3による。太破線に沿って記入された数値は下り壁の下端のゆか面からの高さ、その他の数値は当該箇所の天井高を示す。単位は基本的に尺であり、4桁の数値の場合はmmである。

図4 平面・天井間差異室 32 例の状況 (隣接する 2 室は同一図内に表記している)

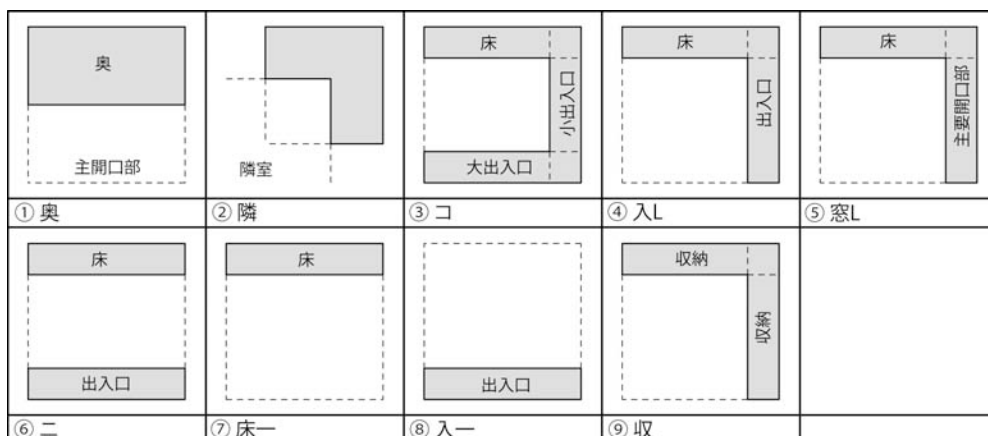


図5 平面・天井間差異室の天井伏9類型

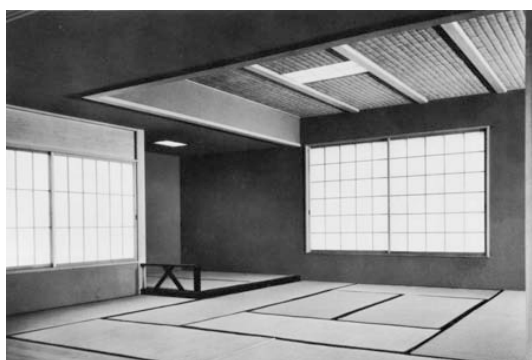


写真3 「松井田町役場」和風会議室(24／1956) 写真4 「奥田邸」客用座敷(28／1957)



写真5 「雲伴居」書斎(74／1984) 写真6 「昨雪軒」客室(64／1969)

3 天井形式の類型に対する考察

3-1 天井断面形状及び天井伏構成の類型と竣工年の関係

1節で得た類型について竣工年との関係を見て行こう。7つの断面形状(図1)のうち四方勾配天井を除く6つの形状が1953年の「^{ろうか} ^{んせき}琅玕席」までに出揃っており、その6形状

は白井の創作活動を通じて時期的な偏りなく見られることがわかる。四方勾配天井は、「さくせつけん昨雪軒」(1969) 1 階居間の例が代表的事例であり、白井の活動の比較的后半に見られる。

次にこれらの天井断面形状がいかに組み合わせられているかを示す天井伏の類型(図 2)についてであるが、1950 年代前半は、主として単独の断面形状による構成が続く。はじめての注目すべき複合の事例は「松井田町役場」和風会議室(写真 3 / 図 4-24 / 1956)と「奥田邸」客用座敷(写真 4 / 図 4-28 / 1957)である。前者では、床の間、大出入口、小出入口といった建築的要素と呼応するようにコの字状に落天井が設けられ、その天井面が継ぎ目なく同面に接合された例である。また後者に見られた L 下落型の構成は、まず床の間側の下り壁が間口一杯に設けられ、その下り壁に矩折の関係にある落天井がぶつかる構成となっている。

1960 年代前半までは、単独の断面形状による構成が多数を占めていたが、1965 年の「呉羽の舎」を境に、断面形状複合の構成を多用する傾向へと変化する。L 字型、ニの字型、コの字型といった位置関係で、各形状が複合する。最晩年に白井自身の自邸的建物として設計された「雲伴居」(写真 5 / 図 4-74 / 1984)では、書斎、寝室ともにそれ以前に例を見ない天井伏が示された。

以上のように、まず白井の和室における天井断面形状は、主として茶室に見られるような既存の形式を採用しており、そのパターンは早い段階で出揃っている。白井の独自性はむしろ、その組み合わせに表れており、天井伏は年を追って多元化し、最後の「雲伴居」では最も複雑化した姿を見せることとなった¹³⁾。

3-2 平面・天井間差異室天井伏構成の類型と竣工年の関係

32 例の平面・天井間差異室の類型については、1959 年「杉亭」(図 4-45)までに 9 種類(図 5)全てが出揃う。この類型は大きく分けると、床の間と出入口との関係から定義されたもの(コ型、入 L 型、窓 L 型、ニ型、床一型、入一型)と、そうでないもの(奥型、隣型、収型)に分けられる。前者のうち窓 L 型は、区分天井部に主要開口部をとる形式となっており、他と異なる性格を持つと言え、「奥田邸」の客用座敷(図 4-28)、客用次ノ間(図 4-29)の両室に見られるのみである。天井の仕上げ面を開口部高さに合わせた意匠であり、天井と開口部の関係が意識されていると言えよう¹⁴⁾。一方、後者のうち奥型と収型は、主要開口部付近の上部が高天井部となっている点で共通しているが、隣型についてはその限りではない。

上記の類型に基づきながら、各事例を時系列に見ていくと、構成の内容が、年を追うごとに「区分天井部に床の間・出入口を配置しながら、主要開口部回りを高天井とし、場合によって隣室の秩序を取り込む」といった傾向、すなわち、全形式を統合していくような傾向を見せるようになる。こうした傾向が顕著に見てとれる例として、まず「雲伴居」書斎（図4-74）が挙げられる。雁行の構成をとる上段・床の間に切り取られた広間部分に、上部から別の整然とした秩序を与えるかのように正方形の高天井部が設けられ、かつそれは主要開口部と明確に関連づけられている。

さらに、隣型の要素も取り入れた最も端的な例が、「昨雪軒」1階客室（写真6／図4-64／1969）である。和室内において床の間・出入口に呼応してL字に区分天井部を展開し、落天井の一部が隣の応接室に延長してコの字につながっていく。こうして二室を通じて形成された高天井部が擁する大容量の空間は、一番外側に天井までの内法をもつ大開口部に対応している。同様の構成は「尻別山寮」^{しりべつさんりょう}（図4-68／1972）和室主室にも見られる。

以上のように、白井の和室における平面・天井間差異室の構成は、床の間・出入口といった実際の生活に必要な具体的要素によって複雑化した室内の平面計画に対し、整然とした幾何形態によって抽象化され、屋外につながる主要開口部と密接に関連づけられた高天井部を上部から重ね合わせることで成立していると言えるだろう。

おわりに

本章の目的は白井晟一の和室について、特に平面と天井の構成の差異に着目して、その特徴を考察するものであった。

76例の白井の和室に見られる天井断面形状は7種に分類でき、それらと天井伏の組み合わせの類型は17種得られた。断面形状の種類が早い時期に出揃っているのに対し、組み合わせは年をおって複雑化する傾向が見てとれ、遺作「雲伴居」では最も複雑な天井伏となる。

このように様々な形状的变化が天井に見られる白井の和室において、平面・天井間差異を含む事例は特徴的なものであり、32例が該当した。区分天井部がどのような建築的要素と関連しているか等の観点から、平面・天井間差異室の天井伏の類型が9種得られた。

これを時系列に見て行くと、各形式の特徴を徐々に統合していくような方向で事例が展開する傾向が読み取れ、それは床の間・出入口部を区分天井部としながら、主要開口部付近を高天井とし、場合によって隣室の秩序を取り込む、という傾向であった。この傾向は、

特に「昨雪軒」1階客室や「雲伴居」書斎に見られ、白井の和室での取り組みにおいて最も発展した形として捉えることができよう。

白井晟一は和室の形状について語っていない為、以上のような結果に対する本人の意識無意識を判断することはできない。むしろここでの系統的分析を通して初めて、語られなかった建築家の制作傾向を顕在化させることができたという面で、本章の研究は有意義であると考ええる。

第2章 注記

- 1) [川添 1978b], や[水原 1979:201]等が該当する。
- 2) [横山(監修) 1976c] や[白井・神代 1978]等が該当する。
- 3) 「年譜」[平井 1985]によれば、白井はドイツのハイデルベルク大学に入学してカール・ヤスパースのゼミに通い、ゴシック建築を学んだという。近代建築を学んだ他の建築家とは対照をなす。
- 4) [伊藤 1974a]や[安原 2005:156]等が該当する。
- 5) [片木 1984], [富永 1981], [白井昱磨 1985b]等が該当する。
- 6) 本稿では、畳敷の室を和室の事例として取り上げている。
- 7) [白井晟一研究所 1987a～c および 1988a～f]が該当する。
- 8) 図1に示す天井断面形状は既存の伝統にみられる形式である。例えば北尾春道は茶室の天井について「手法形式としては平張、葺下、掛込、化粧屋根裏、落天井、鏡天井、張違、壁止り等があつて、また種々の好により、各種の形式を総合し組合せて様々な変化を見せてゐる。」[北尾 1935]と記しており、各々の形状とその組み合わせによる天井形式を理解している。前掲の[白井・神代 1978]によれば、白井は木造和風住宅の設計に際し北尾の編集した『数寄屋聚成』を学んでいたという。
- 9) 「松井田町役場」和風会議室等が該当する。本稿では下り壁として扱っているが、「親和銀行本店Ⅰ期」4階客室Bの落天井（下り天井）について次のような指摘もある。「広さは十三畳半、床の間はないが右の主室境の通い口の一本引がこの室では方立口になっていて、その上が二間通しの下り天井で落し掛けがあり、通い口に寄って台目寸法程のところで畳を貫くように栗の直面取柱が立つ。つまりこの下り天井下がそのまま床の間に見立てられる作りで、私が案内された時にもその壁正面に玉舟の墨蹟が掛けてあり、通い口の反対側の隅に風炉が置いてあった。」前掲注1), [水原 1979:256]。

- 10) 富永譲は白井の和風住宅について次のように指摘している。「丸柱が出てきたり、天井が切り換ったり、壁の明確な遮断に対して上部の天井が連続していったりするが、ほとんど過剰な修飾は無く、全体の住宅のなかで必要にして十分な抑制のきいたギリギリの厳しい表現であり、理性的に納得し得る。」前掲注 5), [富永 1981]。
- 11) 矢向敏郎は「呉羽の舎主屋」の平面図と天井伏図から読み取れる秩序の違いについて次のように触れている。「平面図と天井伏図の両方から、室の配置や連なり具合を分節の状態として捉えてみると、このへんの事情がよく理解できると思う。平面図からは、居間+老人室+客室・寝室・主婦室+サービス・動線。天井伏図からは居間・客室+寝室・主婦室+老人室+サービス・動線とそれぞれグルーピングでき、居間・客室回りの扱いで両者に若干相違がある。」[矢向 1969]
- 12) 『建築大辞典』[下出(編) 1974]によれば、落天井について、「天井が2段になっている場合、低い方の天井をいう。主として茶室で使われる。茶屋の小間では点前座の天井を落天井とする場合が多い。客座に対し亭主謙譲の気持を表すため。広間では付け書院や地袋の上を落天井とする場合が多い。」とあるが、本稿では、取り上げた和室事例における具体的な使用状況を把握しえない為、あくまでも物的な建築的要素との対応から考察を行っている。
- 13) 「雲伴居」の天井の構成については白井昱磨が次のように指摘している。「私には何よりも興味深かったのは、落とし掛けを縦横に巧みに駆使して、間仕切りや建具を用いずに空間を微妙に分節しながら連続させている空間構成だった」前掲注 5), [白井昱磨 1985b]。
- 14) 「奥田邸」の該当箇所について安原盛彦が次ように言及している。「また庭をよく見えるように、座敷の窓側の面をすべて開口部にするべく座敷庭側の天井をわざわざ落している。」前掲注 4), [安原 2005:33]。

第3章 白井晟一住宅作品における床の間の意匠について

はじめに

本章では、白井晟一の住宅作品¹⁾における床の間の意匠について、同時代の建築家による事例との比較を通じ、その特徴を考察する。

序章で触れたように、床の間について、近代の建築家はその現代的意義に関心をもった。住宅の近代化の中で日本文化の独自性を見出す格好のモチーフであったからである[藤岡2009:95]。

昭和期住宅史の文脈で言えば、吉田五十八、堀口捨己、谷口吉郎らとともに、白井は和風を手がけた代表的建築家と捉えられ、しかもその中では特異な存在として位置づけられてきた²⁾。

本章では、床の間の近代の意匠に着目しながら、白井の特異性の所在を明らかにしてみたい。

1 床の間の意匠

1-1 白井の住宅作品にみる床の間の形式

白井の住宅作品における床の間の用例は多数存在するが、落掛と床柱の関係や、段差のある床框を備えたものと踏込床の別等によって、図1と表1³⁾に示すように、およそ4つのタイプに分類することができる。

タイプAは、床框によってゆかに段差がつけられ、上部は落掛に対して「床柱が勝つ」⁴⁾納まりであり、座敷に対する床の間部分の独立性がもっとも高い。上段部ゆかは畳敷、框は塗框とし他の部材と差別化している場合が多い。「山花席」(1951)、「海山居」(1968)和室B、「雲伴居」(写真2/1984)書斎等の事例がこれに該当する。

タイプBは、床框によって段差がつけられているが、上部では床柱に対して「落掛が勝つ」納まりである。落掛は間口一杯に伸びるか、途中で座敷側にL字に折れ、座敷全体の天井構成につながっていく例が見られる。「北大塚近藤旧邸」(写真3/1938)、「呉羽の舎 書屋」(写真1/1965)、「昨雪軒」(1969)1F客室等がこれに該当する。「昨雪軒」1F客室では、落掛が床柱に勝ち、途中で座敷側にL字に折れ、座敷全体の構成へとつながっている。このような構成は、次のタイプCの「奥田邸」1F客用次の間(写真4)でも見られる。

表1 白井住宅作品における床の間リスト

作品名	年	室名	種類	全体面積	種別	形式	床框	床柱	落掛	備考
河村邸	1936	1F居間	住宅	197.90㎡	木造	A				
北大塚近藤旧邸	1938	1F客間	住宅	219.70㎡	木造	B'				間口一杯
山花席	1951		住宅茶室	—	木造	A				
土筆居 書屋	1953	1F西側	住宅離れ	52.10㎡	木造	D				
試作小住宅	1953	1F西側	住宅	46.60㎡	木造	D	61	121丸	30	落掛は押入下端
琅かん席	1953	(1室のみ)	住宅茶室	—	木造	C	0	136丸	9	
小平の家	1954	1F書斎	住宅	50.80㎡	木造	—				織部床風
永田邸	1956	1F書斎	住宅	72.60㎡	木造	D				
竹本邸	1956	1F老人室	住宅	131.67㎡	木造	D				
奥田邸	1957	1F客用座敷	住宅	454.10㎡	木造	C	0	136丸	45	火灯窓
奥田邸	1957	1F客用次ノ間	住宅	454.10㎡	木造	C	0	136丸	30/L型	
奥田邸	1957	2F若主人室寝室	住宅	454.10㎡	木造	D				
古川邸	1959	1F老人室	住宅	52.90㎡	木造	D				
浜野邸	1961	1F団欒室	住宅	58.30㎡	木造	D	0		91	落掛は押入下端
飯塚邸	1962	1F使用人室	住宅	125.40㎡	木造	D	0		91	落掛は押入下端
鹿子木邸(原案)	1965	1F客室	住宅	95.30㎡	木造	D	0		100	
呉羽の舎 主屋	1965	1F客室	住宅	152.00㎡	木造	A'	0	112角	55	飛梁風落掛
呉羽の舎 書屋	1965	1F畳座	住宅離れ	80.10㎡	木造	B	90	130角	120	
海山居	1968	1F和室B	住宅	103.40㎡	木造	A	76		48	床脇に書院
昨雪軒	1969	1F客室	住宅	419.60㎡	RC造	B	70	120角	45/L型	
高松邸計画		1F客室	住宅	127.02㎡	RC造	A	60	108角	39	
雲伴居	1984	1F書斎	住宅	165.04㎡	木造	A	106	106角	50	逝去後発表
雲伴居	1984	1F寝室	住宅	165.04㎡	木造	A				逝去後発表
(参考)										
松井田町役場	1956	2F和風会議室	公共	1289.40㎡	RC造	B			L型	
親和銀行本店1期	1967	4F客室	銀行	4101.20㎡	RC造	A	90	115角	45	床脇に洞床

※ 床框＝床框高さ，床柱＝床柱断面寸法，落掛＝落掛見付寸法。単位はmm。空欄は不明

※※「落掛」欄の「L字」は、落掛が途中で座敷側にL字に折れ、座敷全体の構成へとつながっている事例



写真1 白井「呉羽の舎 書屋」(1965)

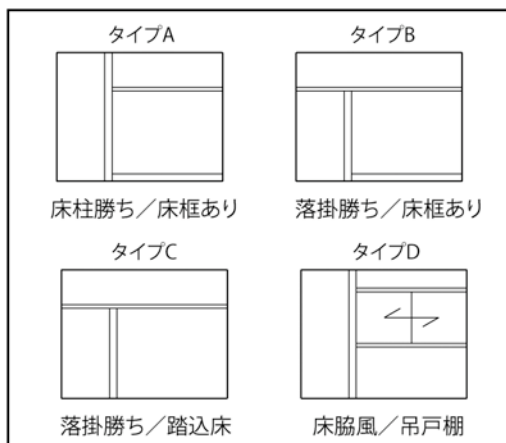


図1 床の間の分類図

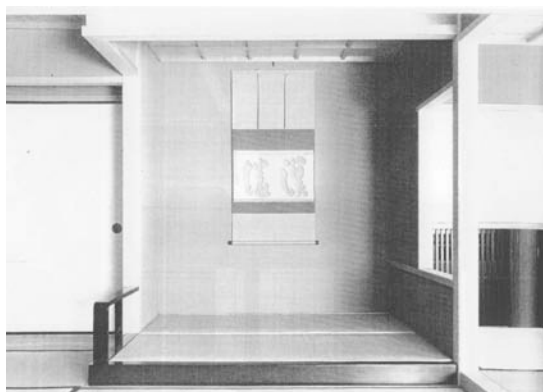


写真2 白井「雲伴居」書斎(1984)

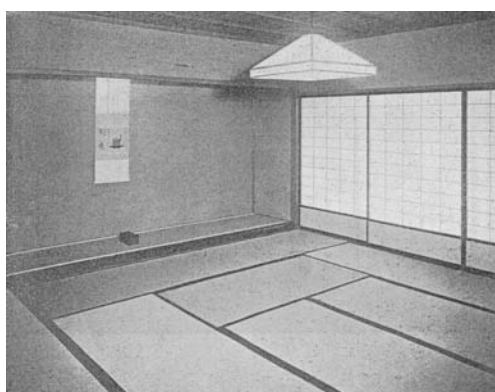


写真3 白井「北大塚近藤旧邸」客間(1938)



写真4 白井「奥田邸」次の間(1957)

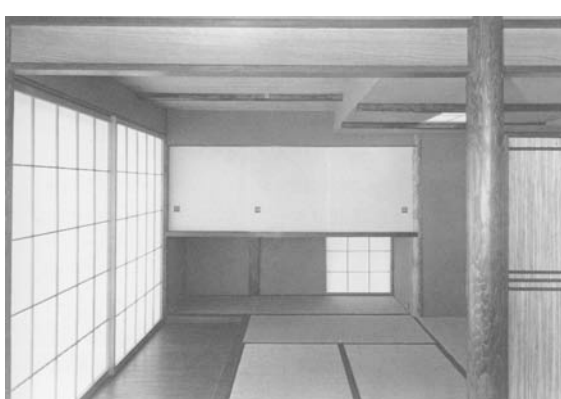


写真5 白井「試作小住宅」(1953)



写真6 白井「呉羽の舎 主屋」客室(1965)

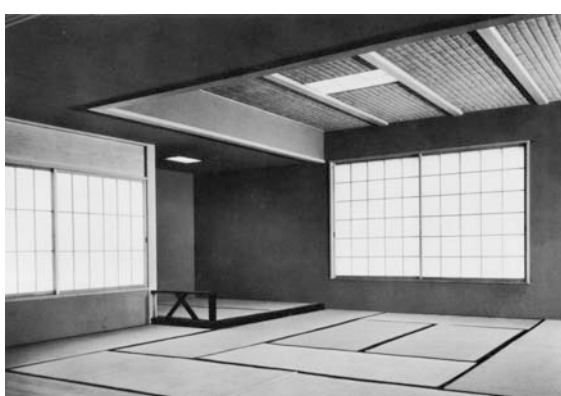


写真7 白井「松井田町役場」(1956)

タイプCは、ゆか部分では段差が無く、板張りまたは座敷からそのまま畳敷が続く踏込床となっている。上部は床柱に対して落掛が勝つ納まりとなっており、床柱と落掛が床の間を規定している。落掛はタイプBと同様に、間口一杯に伸びるか、途中で座敷側にL字に折れ、座敷全体の天井構成につながっていく例が見られる。また、正面奥の壁面には窓が設けられる例が多い。「^{ろうか んせき}琅玕席」(1953)、「奥田邸」(1957)の1F客用座敷と次の間(写

真4) 等に見られる。

タイプDは、どちらかと言えば床脇に類するもので、床柱に付随した吊戸棚の下を飾り棚風に使えるようにしたものである。化粧付柱や窓を備えた例が見られ、ゆかは段をつくらず、畳敷か板張りである。「土筆居 書屋」(1953)、「試作小住宅」(写真5/1953)の他、多くの小住宅の座敷に見られる。

この他、タイプAの形式に近いものの、例外的な珍しい例として挙げられるのが、「呉羽の舎 主屋」客室の床の間(写真6)であり、床の間正面奥の壁が上部吹き放しとされ、隣り合う部屋と繋がっている。落掛は通常のものではなく、下がり壁の無い、飛梁のようなつくりとなっており、段差のない踏込床である。

1-2 同時代の建築家による床の間の形式

白井と同時代、かつ和風建築を多く手がけた建築家として、前述の3人の建築家を取り上げ、彼らが創作した床の間の形式を概観してみよう。

表2に示す通り、各建築家の住宅作品または住宅に付属する施設(茶室等)で、専門誌や作品集で写真が掲載されたものを取り上げる⁵⁾。

吉田五十八は、4人の中で最も作例が多く、形式の種類も多い。前節の白井の床の間の分類に基づいて見てみると、タイプA:「猪股邸」和室(表2-76/1967)、タイプB:「北村邸」和室(表2-74/1963)、タイプC:「松岡邸」夫人室(表2-75/1965)等、同様の形式が見られる一方で、「山口蓬春邸」第二客間(表2-46/1940)や「加藤邸」1F茶室(表2-55/1940)、「山形邸」1F客間(写真8/表2-63/1956)では、床柱と落掛に「勝ち負けがない」例も見られる。また、床柱が勝つタイプAに近いものの、床框に段差が無い「吉田五十八邸」書斎(写真9/表2-59/1944)や「御器谷邸」1F夫人室(表2-79/1971)の例も見られる。さらに白井の作品には見られない要素として、写真9の作例等に見られる、「矩折床の間」⁶⁾の例が挙げられ、これは、谷口吉郎の「佐伯宗義邸」(1957)茶室にも見られる。

分類上は以上の特徴が指摘できるが、さらに詳細を見ていくと吉田の特徴が一層表れてくる。「北村邸」和室の床の間を見てみよう。まず、床柱であるが、ウルシ塗の67mm(0.22尺)角であり、写真10に示すように壁際ぎりぎりまで押し込まれている。壁との間には45mm(0.15尺)巾のスリット状の隙間が設けられ、真壁の柱型ではない床柱の存在感を表示している。また、落掛の下部は、床の間を正面から見た時、見付5mm(0.0175尺)程のラインが浮き出て通って見えるような特殊なディテールをデザインしている。床框の段差は

表2 同時代の建築家の住宅作品における床の間リスト

谷口吉郎

	作品名	年	室名	種類	形式	落掛	写真
1	自邸	1935	日本間	住宅	A/框段無/	無	合26
2	梶浦邸	1936	四畳半(日本間)	住宅	C	無	建65.8-65
3	志賀直哉邸	1955	和室	住宅	A/框段無/	無	著85
4	佐伯宗義邸	1957	茶室	住宅	B/角	無	新58.1-25
5	自邸増築	1964	和室九帖	住宅	C	無	合23

堀口捨己

	作品名	年	室名	種類	形式	落掛	写真
6	紫烟荘	1926	茶室	住宅	A/框段無/	無	藤54
7	岡田邸	1933	居間八畳	住宅	A	無	作④86
8	岡田邸	1933	四畳半	住宅	A/框段無/	無	作④90
9	永井邸	1934	2F八帖間	住宅	A	無	知36.1-22
10	中西邸	1936	2F八帖	住宅	A	無	住38.4-143
11	山川邸	1938	1F六畳間(寢室)	住宅	A	無	作④80
12	山川邸	1938	1F四畳半	住宅	A/框段無	無	世38.10-15
13	山川邸	1938	2F八畳	住宅	A	無	世38.10-12
14	大森の小住宅	1956	茶室	住宅	C	無	新56.6-20
15	茶室 居	1965	広間八畳	住宅付属茶室	A	無	作④98
16	茶室 居	1965	三畳大目	住宅付属茶室	A	無	作④102
17	大原山荘	1968	八畳間	住宅	B	無	作④109
18	大原山荘	1968	次の間	住宅	A/框段無	無	作④110
19	大原山荘	1968	茶室	住宅	A	無	作⑤39

吉田五十八

	作品名	年	室名		形式	落掛	写真
20	関谷弥兵衛邸	1931	茶室	住宅	A/框段無/角	無	作②15
21	関谷弥兵衛邸	1931	茶室	住宅	A	無	世34.4-79
22	関谷弥兵衛邸	1931	客間	住宅	A/角	無	世34.4-80
23	吉住小三蔵別邸	1932	客間	住宅	A/框段無/角	無	世34.4-106
24	吉住小三蔵邸	1933	2F次の間	住宅	十字交差型(Cに近い)/角	無	世34.4-85
25	吉住小三蔵邸	1933	2F客間	住宅	A/框段無/角	無	世34.4-86
26	吉住小三郎別邸(紫山荘)	1933	客間	住宅	B	無	世34.4-101
27	吉住小三郎別邸(紫山荘)	1933	茶の間	住宅	A/框段無	無	世34.4-102
28	杉本邸(稀音家六四郎邸)	1933	夫人室	住宅	A/框段無	無	世34.4-125
29	杉本邸(稀音家六四郎邸)	1933	書斎	住宅	A/框段無	無	世34.4-128
30	杉本邸(稀音家六四郎邸)	1933	客間	住宅	A	無	世34.4-130
31	杉本邸(稀音家六四郎邸)	1933	次の間	住宅	C	無	世34.4-130
32	参木邸	1933	客間	住宅	A	無	世34.7-11
33	参木邸	1933	居間	住宅	A	無	住36.12-375
34	小林古径邸・画室	1934	1F画室	住宅	B	無	作③188
35	小林古径邸	1934	1F客間	住宅	A/角	無	住建93.8-36
36	小林古径邸	1934	2F和室八帖	住宅	A	無	住建93.8-16
37	吟風荘	1935	1F番茶席	住宅	織部	無	詳39
38	吟風荘	1935	1F居間	住宅	C/角	無	世36.1-24
39	岡田邸	1935	隠居室	住宅	A/框段無	無	世35.5-20
40	倉田邸	1935	客間	住宅	A	無	住35.12-376

41	吉屋信子邸	1936	八畳(茶の間)	住宅	B	無	住36.5-326
42	川合玉堂邸	1936	客室	住宅	A	無	作③170
43	杵屋六左衛門別邸	1936	座式応接間	住宅	床柱勝/落掛無/框段無	無	詳40
44	杵屋六左衛門別邸	1936	居間	住宅	A	無	作①54
45	杵屋六左衛門別邸	1936	2F小座敷	住宅	C	無	作①58
46	山口蓬春邸	1940	第二客間	住宅	床柱落掛L字/框段無	無	詳42
47	山口蓬春邸	1940	茶の間兼居間	住宅	A/框段無/角	無	世41.1-13
48	山口蓬春邸	1940	画室	住宅	A/框段無	無	世41.1-14
49	山口蓬春邸	1940	第一客間	住宅	A	無	世41.1-10
50	大島邸 (M・O邸)	1940	2F客間	住宅	B	無	作①46
51	大島邸 (M・O邸)	1940	1F隠居兼客間	住宅	A	無	作①47
52	岡田邸	1940	2F客間	住宅	A	無	世42.1-7
53	青木邸	1940	1F座敷	住宅	A/角	無	作②72
54	青木邸	1940	2F客間	住宅	B	無	作①81
55	加藤邸	1940	1F茶室	住宅	床柱落掛L字/框段無	無	作②60
56	加藤邸	1940	1F茶の間	住宅	C/角	無	作①23
57	加藤邸	1940	2F客間	住宅	B/角	無	作①20
58	岩波茂雄別邸	1940	座敷(坐式居間)	住宅	C	無	新43.3-52
59	吉田五十八邸 (自邸)	1944	書斎	住宅	A/框段無/角	無	住建96.7-29
60	吉田五十八邸 (自邸)	1944	茶室	住宅	織部	無	詳15
61	吉住小三郎邸	1955	1F客室 (客間)	住宅	B	無	文56.1-42
62	真鍋邸	1955	和室客間	住宅	B	無	芸新55.10
63	山形邸	1956	1F客間	住宅	床柱落掛L字/框段有	無	詳53
64	山形邸	1956	1F寝室	住宅	C	無	国57.2-27
65	中村勘三郎邸	1957	2F稽古場	住宅	A	無	国57.5-29
66	鈴木邸	1957	2F客間	住宅	A	無	作③63
67	梅原龍三郎邸	1958	1F寝室 (座敷)	住宅	A	無	作②98
68	水谷八重子邸	1960	1F和室6帖	住宅	C落掛無	無	詳142
69	水谷八重子邸	1960	2F和室9帖	住宅	C	無	新60.4-66
70	佐々木邸	1960	2F客間	住宅	A	無	新60.11-70
71	坂西志保邸改造	1960	客間(十畳和室)	住宅	A	無	室63.1-11
72	坂西志保邸改造	1960	離れ	住宅	A	無	室63.1-13
73	吉屋信子邸	1962	客間六畳	住宅	B	無	室62.11-30
74	北村邸	1963	和室 (座敷)	住宅	B/床柱押込/角	無	詳67
75	松岡邸	1965	夫人室	住宅	C	無	詳71
76	猪股邸	1967	和室	住宅	A/框空調	無	詳135
77	猪股邸	1967	茶室	住宅	A	無	詳158
78	岸信介邸	1969	1F8帖	住宅	B/角	無	自分
79	御器谷邸	1971	1F夫人室	住宅	A/框段無	無	現数集41

※表の項目中「落掛」は、白井作品「昨雪軒」(1968)に見られるような床の間の落掛が室全体に直接つながる構成の有無

※※表の「形式」欄における「角」は床の間端部の入隅部を手前に折り返して連続的に床の間空間を形成している例

[略号] 建: 建築/知: 建築知識/文: 建築文化/世: 建築世界/国: 国際建築/新: 新建築/室: 室内/住: 住宅/

住建: 住宅建築/芸新: 芸術新潮/詳: 数寄屋造りの詳細(1985建築資料研究社)/合: 合目的性を越えた意匠の世界(1997新建築社)

現数集: 現代数寄屋住宅集(1974叢文社)/作①: 吉田五十八建築作品集(1949目黒書店)/

作②: 吉田五十八作品集(1980新建築社)/作③: 現代日本建築家全集3(1974三一書房)/

作④: 家と庭の空間構成(1978鹿島研究所出版会)/作⑤: 現代日本建築家全集4(1971三一書房)/

著: 谷口吉郎著作集IV(1981淡交社)/藤: 表現者・堀口捨己一総合芸術の探求一(2009中央公論美術出版)

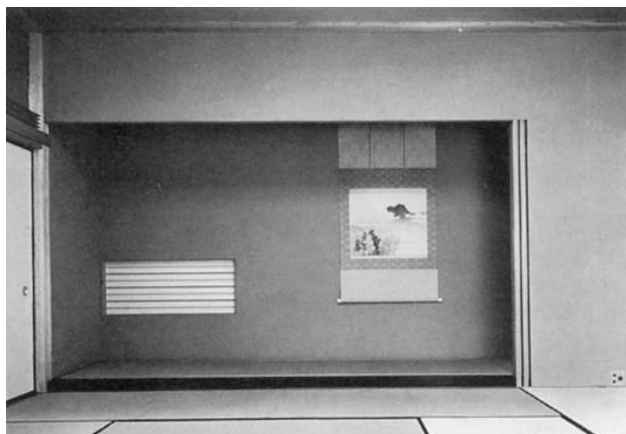


写真 8 吉田「山形邸」1F 客間(1956) 写真 9 「吉田五十八邸」書斎(1944)

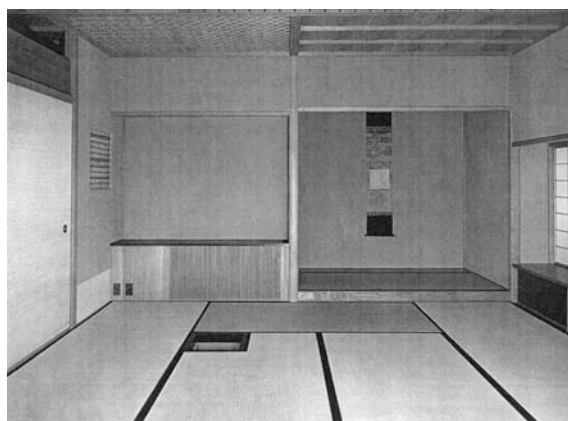
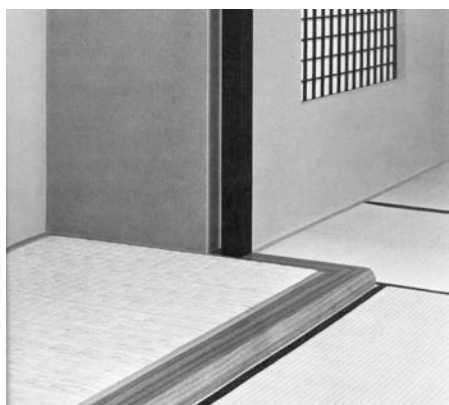


写真 10 吉田「北村邸」床柱(1963) 写真 11 堀口「茶室礪居」広間八畳(1965)

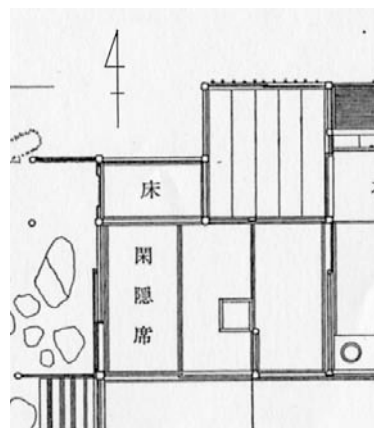
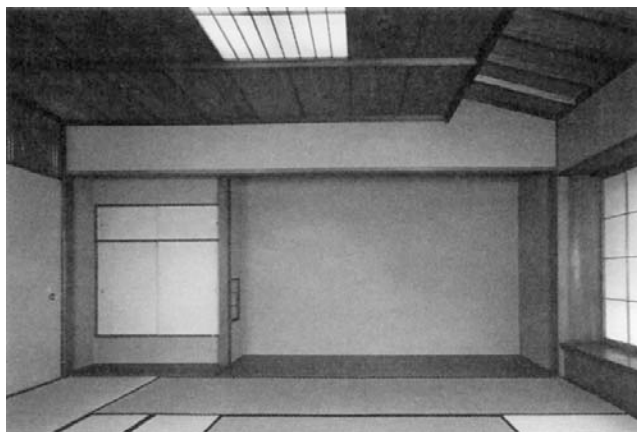


写真 12 谷口「自邸増築」和室九帖(1964)

図 2 閑隠席平面図

52mm(0.17 尺)と小さいが、これに面取りを施し⁷⁾，さらに細く座敷のゆかと連続するように見せている。また、「猪股邸」和室では，床框に空調吸込口を仕込む例等，設備との融合

の例も見られる。

このように、吉田の意匠の特徴は、座敷飾りの細部デザインを変革しようとしていた（2-2 後述）姿勢からもわかるように、伝統的細部形式にとらわれない工夫が多彩に試みられているが、空間形式としては座敷飾りの構成を残している点にあると言える。

堀口捨己については、吉田に比べると事例が少ない。住宅作品に占める座敷を持たない住宅の割合の多さがその一つの要因となっていると言えよう。床の間の事例の中では、A タイプの事例がその大半を占め、「岡田邸」居間八畳（表 2-7／1933）や「茶室^{ちやしつか}礪居^{んきよ}」（1965）広間八畳（写真 11／表 2-15）・三畳大目（表 2-16）等がそれに該当する。また、タイプ A に近いが床框による段差のない踏込床となっているものに「岡田邸」四畳半（表 2-8）等がある。さらにタイプ B に属するものとして「大原山荘」八畳間（表 2-17／1968）、タイプ C に属するものとして「大森の小住宅」茶室（表 2-14／1956）が挙げられる。

堀口は、茶室の研究の中で、床の間を含む建築の内部空間と庭との関係に関心を示していた。「岡田邸」居間八畳床の間の説明文では、床の間よりむしろ庭へつながる隣の障子を重視している⁸⁾。「茶室礪居」広間八畳では、空調設備等との融合に言及し、「大原山荘」次の間床の間（表 2-18）については、左脇書院窓からの眺めについて言及している⁹⁾。

その他全般的に、白井の例と比べると、床柱については、丸柱の事例が多く、框については塗框としている例が少ない。さらに、設備機器や照明器具を組み込んだづくりは、特徴的なものであり、藤岡洋保はこれを「堀口好み」の特徴的モチーフとしている¹⁰⁾。

谷口吉郎の作例はさらに少ない。その中で先の分類に当てはめれば、タイプ B:「佐伯宗義邸」茶室（表 2-4／1957）、タイプ C:「自邸増築」和室九帖（写真 12／表 2-5／1964）等が挙げられる。「自邸」日本間（表 2-1／1935）や志賀直哉邸和室（表 2-3／1955）の事例は、タイプ A に近いが床框による段差が無い形式となっている。

谷口は、「線」によってつくられる構成に注目し、プロポーションを重視したデザインを行ったと言われる[藤岡 1998]。「自邸増築」和室九帖では、畳と床上端が面一になっていることや、西側壁棚板まわりの水平要素（棚板）や開口（障子）によって、空間の広がりを感じられる意匠となっており、窓の位置や障子の棧などプロポーションにかかわる検討がなされたことを、藤岡洋保は指摘している¹¹⁾。

以上の床の間の形式的比較によって、白井独自の形式として指摘できるのが、タイプ B やタイプ C に見られる、床の間を形成している落掛が、途中で座敷側に L 字に折れ、座敷全体の天井構成につながっていく形式である。他 3 人の建築家による床の間の落掛は、ほ

とんどの場合座敷と床の間の空間を仕切る境界に止まっているから、白井の意匠の特異さは、この落掛の扱いによっているものと言えよう。吉田・谷口に見られた矩折床の間（写真9）は天井構成では落掛が伝統的位置に止まっているのに対し、白井の落掛は天井において部屋全体に参画していたのである。こうした事例は、住宅作品ではないが、「松井田町役場」2F和風会議室（写真7／1956）にも見てとれる。

2 床の間論

2-1 白井の床の間論

白井は床の間についてどのような考えを持っていたのか。白井の講演記録に該当する証言を探索してみよう。

「建築の壁面や入込は、その様な特定の場合を豫想することなしに、最も自由な空間や面をつくり、繪畫といはず彫刻といはず華道といはずあらゆる藝術を受容できなければならないのであります。御承知の様に床の間の起源は祭壇であり、華道のための、特別の装置ではありませんでした。（中略）高雅な一行書も結構ですし、可憐な野菊の莖も、たとへ簍、笠や農具の類と雖も悉く受容して藝術的生活を満足させてゐるのであります。然もあのづから深い美しさをたたへた建物は一つ飾りものがなくとも、それ丈で既に幽玄な藝術世界をつくり、同時に最も自由廣潤な、あらゆる藝術品の受容の場所となつてゐるのであります。物掛や生花をおかなければ美しい雰圍氣をつくれぬという様な床の間は建築として既に本能的にまちがつてゐるのであります。」〔白井 1952〕¹²⁾

床の間は特定の用途を想定するものではなく、あらゆる芸術等を受容できなければならず、また飾るものがなくても、それだけで幽玄な芸術世界をつくるものと白井は考えている。高雅な一行書と同じように、笠や農具をも捉えようとしているところに、民衆のための健全な生活空間をめざす¹³⁾ 1950年代当時の白井の和風建築論の特徴が見える。後に、住宅のめざすべき空間が話題になった際、「貧しさこそ誇りであるというようなところから出発して、官能を克服して、本当に人間が生きてゆく性根、理性、そういうところに根ざした空間を作らねば。」〔白井・栗田 1980〕とも白井は述べている。

白井は、床の間の起源について祭壇であると述べているが、建築史学¹⁴⁾の見地からは床の間の起源について、一つは藤原義一、堀口捨己、太田博太郎らによる上段起源説、二つに、それより以前に主張された江戸時代からの仏壇起源説、さらに三つ目には、太田静六による中国源流説等が挙げられるが、どれもが定説となるには至っていない。

先に引用した白井の 1952 年の講演記録は、上段起源説が仮説として優勢となる以前のことになる。よって白井の主張は、床の間について、仏壇起源説を論敵に捉えていたと推測される。また同記録の別個所では、「いくつもの室を通つてやがてほのぼのとした閑隠席(図 2)へ案内されたのでありますが、お茶の支度に案内者が去り一人で室の中央に坐つて居る間、そのうすぐらい壁から天井から入込の影から何か非凡な強力なものが犇々と迫ってくる様な鬼氣を感じて膝を正したことを想ひ出します」と述べており、「入込」を床の間と捉えるならば、その「影」に鬼氣を感じたとしていることから、白井は、床の間の陰影に対し、恐ろしさにも通じる神聖さを感じることもあったことが読み取れる。

実作家白井にとって、床の間は飾りものではなく、あらゆる芸術の受容場所であると同時に、そこに何も無くともそれだけで芸術世界をつくる「入込」(アルコーブ)であり、場合によっては、そこに神聖さを感じ取ることもあった、内部空間を構成する重要な焦点のひとつであったと言えよう。

2-2 同時代の建築家による床の間論

同時代の和風建築を手がけた建築家たちは、床の間についてどう考えていたのであろうか。

堀口捨己は、建物と庭を一体的に捉え「空間構成」という言葉を用い[横山 1996]、建築は絵画や彫刻から独立して存在しうるものだとし¹⁵⁾、その芸術作品を生活の中に受容するのが床の間であるという。床の間について彼は、「それは絵画に額縁があるごとく室に対しての特殊な空間で、そしてその内に入れる芸術品の自由なる世界を室から及ぼす影響から緩和させ独立せしめると同時に、その絵画から室に波及する空気を、その特殊な空間で限るのである。ただその空間を越えてその余薫のみが室に及ぼしてくる」[堀口捨己 1927b]と書いている。この言葉は、床の間内の芸術品等が部屋全体に影響しないような構成を堀口が意図したことを示唆するものであり、前章でみた独立性の高いタイプ A の形式を多く採用したこととも整合する。

吉田五十八は、「新興数寄屋」を創案し、座敷飾りを変革しようとした。「私は、書院、床の間、違ひ棚を昔のままにしておくといふこの観念をやめなければ、日本建築は進歩も発展もないと思ふ」[吉田 1936]や、「新しい数寄屋のもたらした影響は、非常に大きなものだったと思います。たとえば、床の間の構想の変革」[吉田 1965]と述べている。これらの発言は、吉田の破天荒な床の間のデザインに対応するものである(写真 8～10)。

谷口吉郎は、床の間について「日本人の美術鑑賞の方法は、西洋人が多数の美術品を、あたかも展覧会のように棚や壁面に陳列するのに対して、日本人はトコノマにわずか一点の絵、それに花を数本添える程度にすぎません。それも博物館のように長期間放置されるのではなく、季節に応じ、客によって、最も好ましい品が精選されます。ですから、このような美術品の鑑賞方法は、詩のように純潔で、印象的です。トコノマは日本人の住生活における美的焦点というべきでしょう」[谷口 1956b]述べている。

また、「資生堂会館」(1962)の設計では、公共空間の中に床の間的な場所を計画しており、これについて「日本の個人住宅の一軒一軒にあった「とこのま」も、浮世の小さい安息所だったといい得るだろう。それは美と詩の飢餓を静かに癒す家庭内のささやかな空間であった。しかし、現代の都市はそんな小空間のゆとりをも許さず「とこのま」は庶民の住宅からしだいに追放されつつある。そのような社会の現象に対して、共有の「とこのま」を街の一角に実現してみることを思いたち、こころみに資生堂の店頭をそれにあててみたのであった」[谷口 1962]と述べ、安息所としての床の間の消えゆくことを憂い、1階ファサードを街の一角の共有の床の間に見立てている。

谷口は、床の間の存在意義を認めつつも、これを公共の空間に求めたことは、彼の住宅作品の少なさと連動しているようにみえる。住宅における床の間を計画する際は、床の間を介した美術品や花の鑑賞法を「純潔」と称したように、素直な構成をこころがけ、デザインの行き過ぎを戒めたものと考えられる¹⁶⁾。

2-3 床の間論と近代住宅

建築家によるこれらの床の間論は同時代の近代住宅論の中でどのような位置にあったのであろうか。

太田博太郎は『日本住宅史の研究 日本建築史論集Ⅱ』で、大正年代には、坪数を儉約しようとする床の間無用論と、すべてを自然科学的な合理性で割り切ってはいけないという論拠に立った床の間存置論とがあったが、どちらも床の間の起源や性格の変遷に触れていないのが問題点であるとしている。これに対し、格段の進展を示したのが、戦後の濱口ミホ(1915-1988)による床の間無用論であるという[太田 1984:85]。

彼女は、『日本住宅の封建性』において、床の間には、身分の上下に関連する格式的要素と、芸術鑑賞のための場所という、二重の性格があるとしている。この二つの性格のうち格式的要素が温存されることを批判し、床の間の追放を訴えた。また、芸術鑑賞の場所

が必要であることは認めつつも、これが客間ではなく、家族の日常生活に近い居間にあるべきだとした[浜口 1949:113]。

一方、床の間を含んだ「座敷の喪失」を憂いた論者に稲垣栄三(1926-2001)がいる。彼は「座敷」を、家ごとの様々な行事が行われる、地域に開かれた場であったとし、この消滅は、住居から、日常の必要から独立したゆとりの空間、人間関係を律してきたルールや配慮や情感、手造りの創造的な儀礼や祝宴の機会を失わせたという[稲垣 1986]。さらに床、棚、書院について、これが一つの様式として確立することにより、日本の住宅に安定した空間秩序を与えたとし、それが「奥」を指示することによって、空間に明快な秩序と方向性を与えたという[稲垣 1984]。

こうした近代以降の床の間論を扱った、田中宏幸・鈴木義弘の論考[田中・鈴木 2010]では、太田論[太田 1978]を受け、床の間の役割を①「装飾の場」、②「接客の場」、③「権威の象徴」、④「室内の中心」、⑤「格式の象徴」、⑥「その他」に分類し、昭和期以降、室の中心、美的象徴といった④「室内の中心」としての意味合いが顕著に見受けられるようになったとしている。

さらに、近代建築家の床の間への関心を扱った藤岡洋保の論考[藤岡 2001]は、伝統的要素と考えられる床の間を近代建築家たちは否定せず、むしろそこに現代的意義を見出して「日本文化」の独自性・優越性と普遍性をともに示そうとした傾向を指摘している。

以上のような近代以降の床の間論を考慮に入れ、白井を含む前述の四人の建築家の床の間論を見渡してみると、濱口論登場前の堀口捨己は、床の間の、芸術受容の場所としての性格に専ら興味を示していることが読み取れ、それ故、床の間に対する批判的な態度は感じられず、むしろ、その衰退を憂いている¹⁷⁾。

吉田五十八は、これも濱口論登場の前であるが、現代の生活に即した実用性を重視し、床の間を「見て呉れの形式美」¹⁸⁾に類するものと批判した。実作を見れば分かる通り、形態的改造に乗り出していた。

谷口吉郎の床の間論は、濱口論を受ける形で「トコノマは今や再考されねばならない問題」¹⁹⁾とし、新しいあり方として「公共のトコノマ」なる考えを示しており、その場所を住居の外に求めようとしている。

他方、白井晟一の床の間論は、堀口のそれに近く、しかも堀口の本に学んだ[白井・村松 1969]影響が認められる。芸術品と笠や農具を同等に扱おうとする点や、飾るものがなくてもいいとする点に、格式的性格に対する批判が垣間見えるが、祭壇が起源だとする等、精

神的な意味での神聖さについて言及している点が他の3人とは異なる。

3 白井による床の間の意匠の意味

3-1 白井建築における祭壇

白井の建築作品において祭壇またはそれに類するものが計画された事例の空間構成を見ておこう。該当作品は、「半僧坊計画」(1955)^{はんそうぼう}、「善照寺」(1958)^{ぜんしょうじ}、「サンタ・キアラ館」(1974)であり、ここでは実際に建設された「善照寺」と「サンタ・キアラ館」を取り上げる。

「善照寺」では、図3に示す内陣奥に飾壇²⁰⁾を配置する計画で、入口から、外陣、内陣へと、俗から聖へと至る空間構成をとっている。内陣手前部には、畳座が計画されており、床の間を想起させる。内部空間全体は、2列の柱によって中央の主要のスペースと両側の側廊的スペースとに区分されている。妻入形式の仏堂建築は稀であることを白井は承知していた筈であるから、「善照寺」の平面の前提に長堂式教会建築の平面形式を想定できる²¹⁾。

一方、「サンタ・キアラ館」の礼拝場では、図4に示す通り、整形のメインスペースに対し、後方から片側に続くL字型のサブスペースが設けられ、それらを区分する位置に象徴的な柱が1本設けられている。シンメトリーの構成は崩されているが、壇上に向かうメインスペースとこれに付随するサブスペースによる構成が見られる。

以上のように、「祭壇」を含む白井の建築作品では、祭壇を空間秩序の焦点とし、身廊的空間と側廊的空間（サブスペース）を備えた、長堂（バジリカ）式教会堂建築に類する構成が見られる。

3-2 「石水館」のマントルピースと空間構成

さらに別の角度から白井建築にみる床の間に準ずる空間設定の事例を見てみよう。

片木篤によれば、「石水館」展示室D(1981)^{せきすいかん}のマントルピース状のアルコーブ²²⁾について、白井はこれを床の間に見立てていたという²³⁾。図5と写真13に示す展示室Dの空間構成を見てみよう。

入口を入ると正面中央にマントルピースが設けられ、左側には垂れ壁とそれを受ける一本の象徴的な柱によって区分された側廊的空間が設けられている。美術館の展示室ではあるが、祭壇（ここではマントルピース）へと至る階調的な構成と、身廊と側廊にスペースを区分する構成をとる点において、前節で見た祭壇のある空間と同様の構成が見られる。

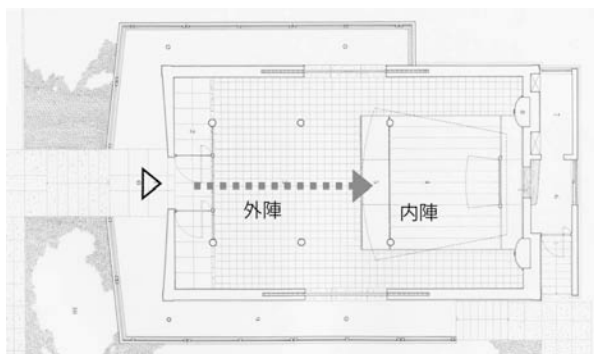


図3 「善照寺」平面図

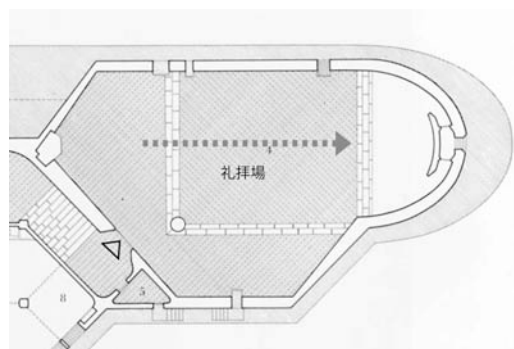


図4 「サンタ・キアラ館」礼拝場平面図

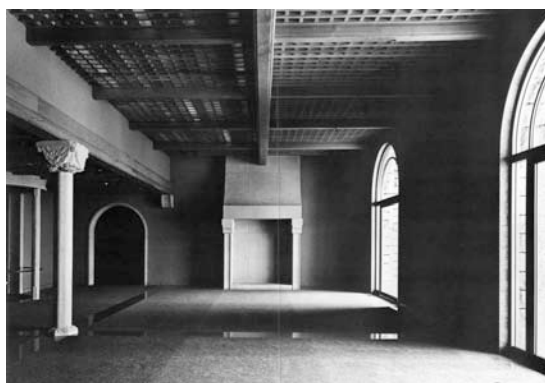
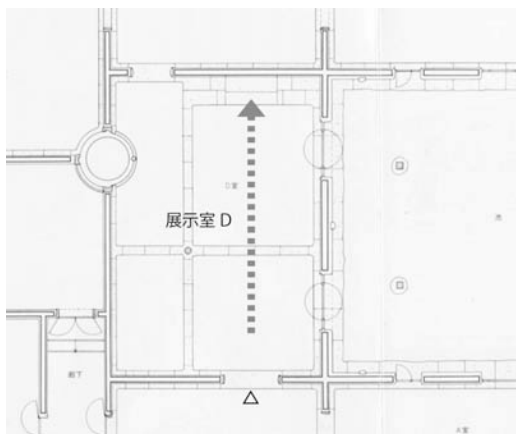


図5 「石水館」展示室Dまわり平面図 写真13 「石水館」展示室D(1981)



写真14 「雲伴居」書斎天井(1984)



写真15 「昨雪軒」客室(1969)

3-3 白井の住宅作品にみる床の間と空間構成

図6に示すように、あらためて白井の住宅作品における床の間のある座敷の空間について見直してみると、3-1，3-2で読み取った空間構成が読み取れる。すなわち身廊的空間（床の間に向う軸線）の正面に構成秩序の焦点としての床の間を置き，側面には落掛や柱等によって区分された側廊的空間を配す構成である。

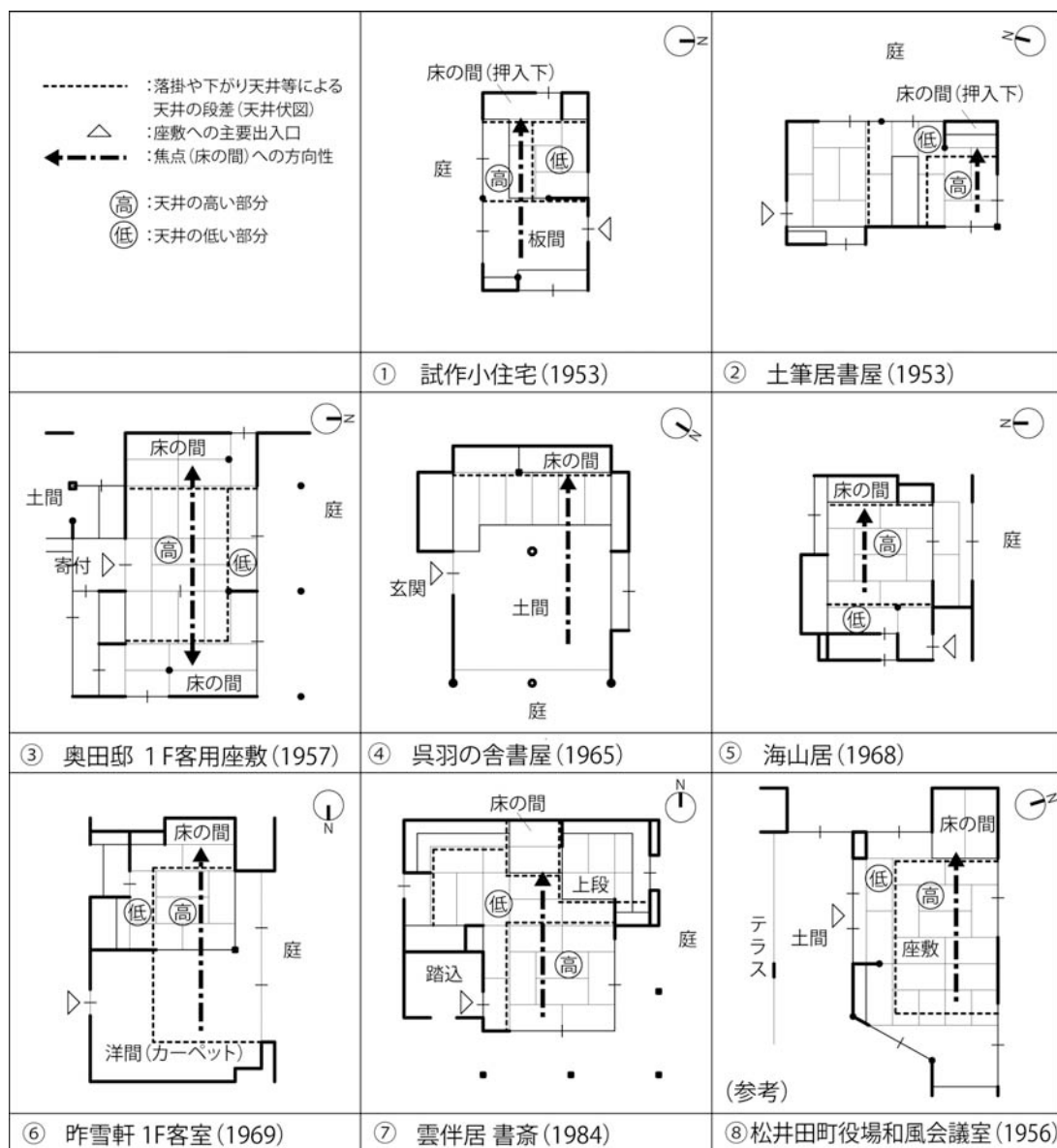


図6 白井住宅作品における座敷の空間構成

この構成において重要な役割を果たしているのが、座敷内における天井の構成である。白井の設計する座敷には、平面図上の空間区分を落掛等天井の構成がずらしていく手法が認められる。これは平面図と天井伏図を重ね合わせてみると歴然とする(図6)。

「雲伴居」を例にとってみると、「雲伴居」書斎の座敷は18.5帖程の広間であり、北側に上段と床の間が設けられている(写真14)。しかしながら図6-⑦の破線で示したように、天井の構成は、ゆかの構成とは大いに異なっており、雁行の構成をとる上段・床の間に切り取られた広間部分に、上部から別の秩序を与えるかのように、落掛や天井高の違いを用

いて正方形の天井高の比較的高い部分を設け、正面の床の間と対峙させている。この高天井部が身廊的空間に、残された天井高の低い部分が踏込から続く側廊的空間に相当し、石水館（写真 13／図 5）の空間構成との相同性が指摘できる。

また、「昨雪軒」（写真 15／図 6-⑥）でも、ゆかの構成とは異なる秩序が天井から重ね合わせられ、天井高の高い身廊的空間（正面に床の間）と天井高の低い側廊的空間の区分を構成している。その構成は床の間のある部屋から隣室にまで及び身廊の軸線を強調している。「雲伴居」と異なるのは、室全体に広がる落掛がそのまま床の間の落掛を形成している点であり、まさしくこれは第 1 節で得た白井の独自の形式に該当する。

おわりに

白井晟一の住宅作品における床の間の形式は、1-1 で示したように、4 つのタイプに分類することができた。中でも特徴的なものは、タイプ B やタイプ C における、落掛が床の間部分にとどまらず、座敷全体の空間構成につながっていく構成をとっている例である。白井の座敷では、落掛によって天井の高い部分と低い部分をつくり、空間を分節する傾向が指摘でき、その落掛と床の間の落掛が、連続して接続した事例がこの形式と言えよう。これと似たことを吉田五十八や谷口吉郎は矩折床の間で行っているが、その意匠は部屋全体には及ばない。堀口捨己には全く認められない意匠である。

また、床の間の設計の背景となる床の間論について、白井の特異な点とは、そこに人間の祈りの対象となる祭壇の痕跡を認め、伝統的な床の間の利用を越えて「芸術的生活を満足させ」るために必須の「入込」(アルコーブ)と見ている点である。同時代の他の建築家達は、従来の床の間の使用を継承する（堀口）か、床の間のデザインを改革する（吉田）か、または現代的意義（谷口）の転用を探索することに意義を見出している。それに対し、白井はむしろ、西欧の建築において同様にアルコーブに神聖さを感じる精神的基盤に通底する空間装置として床の間を見ていると言えよう。

白井は自身の床の間の意匠を詳しく語る文献を残していないので、2-1 に引いた 1952 年の講演記録を考慮しつつ、私たちは白井のデザインの変遷の中に、その思索の深まりを確認するしかない。和室と非和室の作品に共通して祭壇形式のアルコーブをめぐる空間構成が認められることは、その精神的な重要性が、和室においては、床の間とその部屋にいる人間との関係を空間的に組立て直すこととして、絶えず自覚され模索されていたことを示していると考えられる。それが、同時代の建築家とは異なる、^{アルコーブ}「入込」としての床の間に

対する白井の根源的なこだわりであったと考えられる。

その精神的なものの空間構成は、白井の座敷においては、正面に配置された床の間と天井高の違いによる空間区分と落掛けの構成の複合として、最後まで模索されていたものと考えられる。その最終的形態である「雲伴居」について、その成立経過を次章で考察してみよう。

第3章 注記

- 1) SZBH, pp110-115 のリストに掲載された作品を対象とした。
- 2) 村野藤吾の床の間意匠については、その著作に床の間論が見当たらないことと、長谷川堯が詳しく考察するように、名席茶室の「本歌取り」という、床の間の近代化とは異なる意識を示しているので、行論の錯綜を避けるため、本章では扱わない。[長谷川堯 1998]。因みに、村野の和室には、白井のような落掛けが部屋全体の天井構成につながる事例を管見では見出せない。
- 3) 表1の部材寸法は、[白井晟一研究所 1987a～c, 1988a～f, 1993], [彰国社(編) 1969]による。
- 4) 「勝つ」という表現は、納まり上の勝ち負けという意味で使用する。例えば「落掛けに対して床柱が勝つ」とは、天井まで床柱が伸び、落掛けは床柱にぶつかった地点で終わっている状況を指す。
- 5) リスト作成にあたっては、主に[彰国社(編) 1997], [彰国社(編) 1998], [吉田五十八 建築展実行委員会ほか 1993]を参考にした。
- 6) 床柱の反対側で床の間入込が矩折に続く意匠を「矩折床の間」と呼ぶことにする。ゆかや落掛けも矩折に曲がるか棚が入る。部屋の天井構成には影響を与えない点が、白井の落掛けによる構成とは異なる。表2の形式欄に「角」と表記した。
- 7) [建築思潮研究所(編) 1985:136]による。
- 8) 「左に床の間、右に見える障子を開けると池が見え、その右、障子向うに草庭が見えてくる」[堀口 1978c:86]
- 9) 「次の間の床の左脇書院窓を開けると、北の方修学院村を坐っていて眺められるように作られている」同前 [堀口 1978c:111]
- 10) 「完成期の堀口の和室は、棹縁や落掛け、床柱などの「線」と、聚落壁や裂地を張った襖、小壁いっぱい切られた欄間障子などの「面」によるダイナミックな「構成」を特

徴とする。この「堀口好み」の和室には、近代的な設備も積極的にとり入れられ、空調と照明設備を組み込んだ掛込天井はその特徴的なモチーフである」[藤岡 2009:176]

- 11) 「畳と床上端が面一になるために、空間の広がりを感じられるのである」、「このときの増改築の設計図には何度も変更した跡が残っているが、その変更がもっとも多く加えられているのは、窓の位置や障子の棧などである。(中略) 谷口はそれをめぐって検討に検討を重ねていたわけだが、そのことは、谷口にとってプロポーションというテーマが非常に重要だったことを示している」[藤岡 1997b:25]が該当する。
- 12) 引用文中「その様な特定の場合」とは、引用箇所直前にある「ピカソのミュウゼとかマイヨオルの美術館といふ様に(中略)一人の個性のために特別の建物が要求される」等の文脈を受けている。
- 13) 「都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず、殆んど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚楽色のリシン壁で、いわゆる近代数寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあつては、當然、充分な考慮を拂わなければならないインシュレーションや壁体内の通気には甚だ冷淡である。この様式は花柳狭巷にはよろしい。しかし健全なるべき階級の住宅までこの様式を逐うのは問題である」[白井 1952c]等、同種の主張が、白井の著作に見られる。
- 14) [藤原 1946], [堀口 1978b], [太田 1978], [太田 1987], [前 1988], [稲垣 2006]等を参考にした。
- 15) 「建築は絵画や彫刻の助けなしに充分にその用途に応ずる立体あるいは平面の容量や質量や面や線や色や光で、その比例や布局や節奏で、空間的構成の美を表現し独立して存在し得るものである。」[堀口 1927b]
- 16) 「日本間は、できるだけ素直にして、床柱も杉の角杉、ひじ掛け窓の障子を引き分けにしたため、棚板がトコ脇に突き込んでしまったが、それもそのままにした。(中略) 住い手の透徹した「好み」に応ずるため、設計者は、仕事の親切さを隅々まで行き届かせ、デザインの行き過ぎを自ら戒めたいと心がけた。」[谷口 1956a]
- 17) 「現代の美術が純粹美術と称し、時には工芸美術と称するものまでも美術館芸術、展覧会芸術になって、われわれの地上的な家と関連して生活から離れてしまっている上に、床の間を捨てたいす式の現代の住宅が、現今のこの傾向に気を付けず、無分別に、それらの芸術品を家庭に入れるために、室と絵が、家と彫刻がその様式において没交渉で、時には矛盾し、その表現において時には相反発し、互に争うている蕪雜にして粗野な調

和なき家庭をいかに多く見ることであろうか」前掲注 15) [堀口 1927b]

- 18) 「それに茶の間はやつぱり茶の間ですから客間式に一間の床をつけるよりも、果物なり到来物なりを乗せる棚とか、小物を入れる整理棚を設ける方が合理的です。要するに見て呉れの形式美よりも、実用的で便利であることが生命なのですからこの点出入口の三尺（一間の引違ひ）は狭いです」[吉田 1936]
- 19) 「日本人自身にとっても、トコノマは今や再考されねばならない問題となっています。旧式のトコノマは、もはや現代生活には適しません。（中略）それは今までのような、個人本位の観賞ではありません。古い形式のトコノマは、そのような個人住宅内の美的観賞の場でしたが、新しいトコノマは現代人の要求に応じて、公共のトコノマとならねばなりません。そのために、伝統的トコノマの展示方法が、もっと現代の新しい公衆生活の中に美しく生かされて、社会の美的観賞の広場にまで、発展する必要があります」[谷口 1956b]
- 20) 前掲注 3) [白井 1988c]の詳細図では、内陣奥の壁を「飾壇後壁スクリーン」と表記しており、内陣板張りの間に飾壇を設置することを想定した計画であることがわかる。
- 21) 川添登は、「半僧坊計画」について「善照寺」の原型だとし、これを「堂内に二列の列柱をもつキリスト教会の形を採り入れ、様式によって様式を否定し、そこに普遍的造形を創造しようとする氏一流の方法を大胆にみせたのである」[川添 1978c]と指摘している。平井俊晴による「年譜」[平井 1985]によれば、白井は、1928 年 23 歳の時に京都高等工芸学校(現・京都工芸繊維大学)を卒業後、ドイツのハイデルベルク大学に留学し、哲学を中心に学んだが、建築についてはゴシック建築を勉強したという。
- 22) 前掲注 3) [白井 1988c]の詳細図では、マントルピース部分を「化粧暖炉」と表記しており、暖炉の機能は無かったことがわかる。
- 23) 「事実、白井晟一はこのマントルピースを床の間に見立てていたと言う」[片木 1984]。この証言の典拠は不明。なお、管見では、白井の文章や対談記事のなかに該当する記述は発見できない。

第4章 「雲伴居」にみる白井晟一の伝統的様式の意匠

はじめに

本章では、白井晟一の遺作であり本人が使用する目的で計画された和風住宅「雲伴居」(1984)を取り上げ、桂離宮の影響¹⁾に着目して、その意匠的特徴と、その背景となった白井の建築観を考察する。

白井は多数の住宅作品を遺しているが、中でも「雲伴居」は、書齋に床の間・上段・付書院を備え、日本の伝統的書院座敷の様式に近い構成が顕著に見られる特異な事例である。

他方、桂離宮は日本の近代建築家達にとって最も重要な日本の古典の一つであったことは言うまでもないが、「雲伴居」にも桂離宮の座敷に近い要素が見られる。本章では、白井の桂離宮観を検証した上で、付書院の扱い方について、「雲伴居」計画における白井の古典に対する姿勢を明らかにする。その際、同時代の和風を手がけた建築家、すなわち、村野藤吾と堀口捨己の作品で、同じ様に桂離宮に影響を受けた事例との比較を行い²⁾、その姿勢の相違を考察する。

先行研究については、近年、白井晟一の業績を見直す展覧会が連続して開催され³⁾、それに伴っていくつかの「雲伴居」に言及した批評が発表された。しかし、名称や計画の経緯に関する記述が見られるのみで、建築自体の構成に論及するものではない。

また、本研究が利用する資料についてであるが、「雲伴居」については、竣工当時の建築専門誌の記事を中心とし⁴⁾、和風建築観を探索する白井の著作は、序章で言及したものを利用する。その他、著者が「雲伴居」関係者に対し行ったインタビューについても資料に加える。

1 「雲伴居」概要

「雲伴居」は、白井が設計した自身のための書堂⁵⁾である。計画概要は表1に示す。白井は1983年11月19日この現場で倒れ、22日に亡くなったのだが、「雲伴居」は遺された者の手により白井の言い遺した細密な指示に従って1984年の9月に完成したという[白井昱磨 1985b]。建物内部は、図1の平面図に示す通り、大きく分けて2つの座敷から成り、東側に書齋が、西側に寝室が配されている。書齋に設けられた上段(写真2)は、白井自身が書を書くためのスペースである。書机と書院窓を備え、床の間が隣接していることから所謂書院造の付書院の形式に近いと言える。異なっているのは、書机の下部が堀炬燵



写真1 「雲伴居」外観

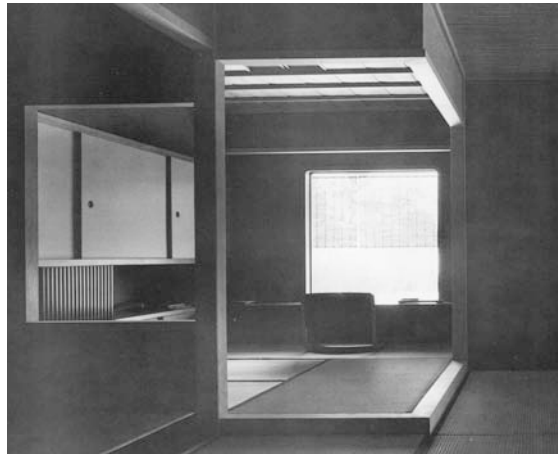


写真2 「雲伴居」書斎上段

表1 「雲伴居」計画概要

敷地	京都市右京区嵯峨	主要用途	書堂
設計	白井晟一	外部仕上げ	
基本設計	1982.10～1983.6	屋根	瓦一文字葺き(寄棟で緩やかな起り)
実施設計	1983.6～1983.8	外壁	ジョリバット吹き付け(曼殊院の壁に似せたという淡い紅殻色)
工事	1983.9～1984.9	書斎仕上げ	
現場担当	柿沼守利(白井晟一研究所所員)	床	畳
敷地面積	1,254.00㎡	壁	草色がかかったジュラク
建築面積	190.67㎡	天井	上段と広間:杉中杣棹米松／下り天井部:蒲貼／床の間:桐根目板棹杉材
延床面積	165.40㎡	上段の框	栗
主体構造	木造	作り付け書机の甲板	パリスアンダー
規模	平屋	それ以外の木部	米松(ビーラー)
平面形状	桁行(東西方向)19,800mm、梁行(南北方向)9,240mmのほぼ矩形		

※新建築1985年2月号、建築文化1985年2月号より作成

となっている点であり、嵯峨野の冷え込みを考慮してヒーターが組み込まれている⁶⁾。

2 白井晟一の和風建築観と桂離宮観

2-1 白井晟一の和風建築観

対談「建築と書」[白井・栗田 1980]において、栗田勇が「いまでも禅寺などに行くと、書院風の骨格のはっきりした、精神性のあるものがあるんでしょう」と問いかけたのに対し、白井は「書院」に対する考えを次のように語っている。

もっと的確に言えば、書院の前身の健全な生活空間ということですね。書院になると、いくらかそこには禅宗とか、外国からきた思想の影響があります。その前身が精神性のあるものなんだ。しかし、書院建築はその精神をちゃんと持って花と咲いたものですから、ひとつのサンプルにしなきゃならんでしょうね。貧しさこそ誇りであるというようなところから出発して、官能を克服して、本当に人間が生きてゆく性根、理性、

そういうところに根ざした空間を作らねば。

白井が書院の欠点として挙げている「禅宗とか、外国からきた思想の影響」とは、対談中、引用部分に至る直前で、「数寄屋」を「官能に媚びて情緒に目覚めさせてゆく」ようなものとして否定していることから、書院の、構造に即した建築構成の原理を離れ、装飾と

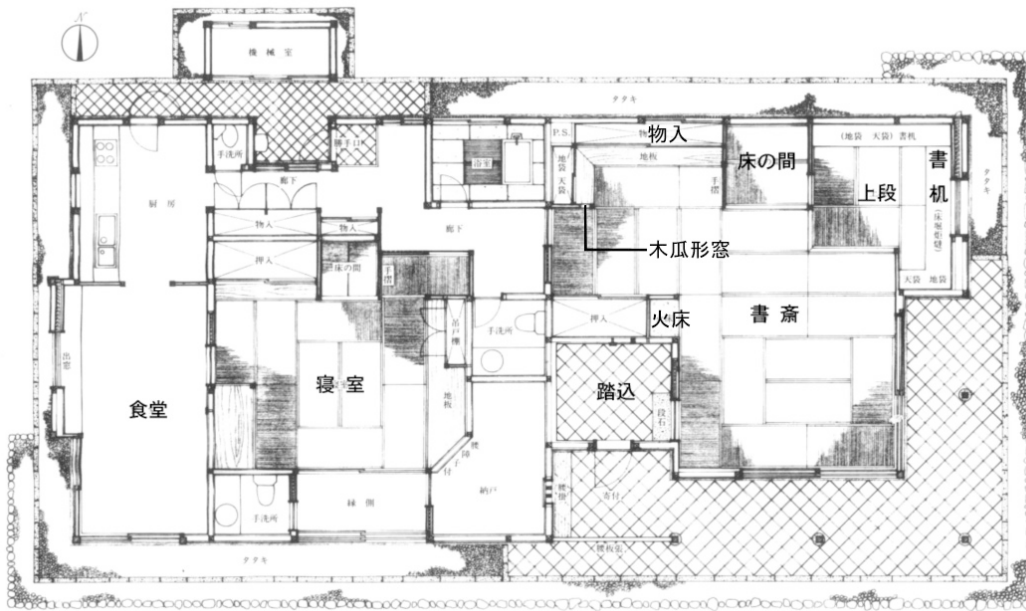


図1 「雲伴居」平面図

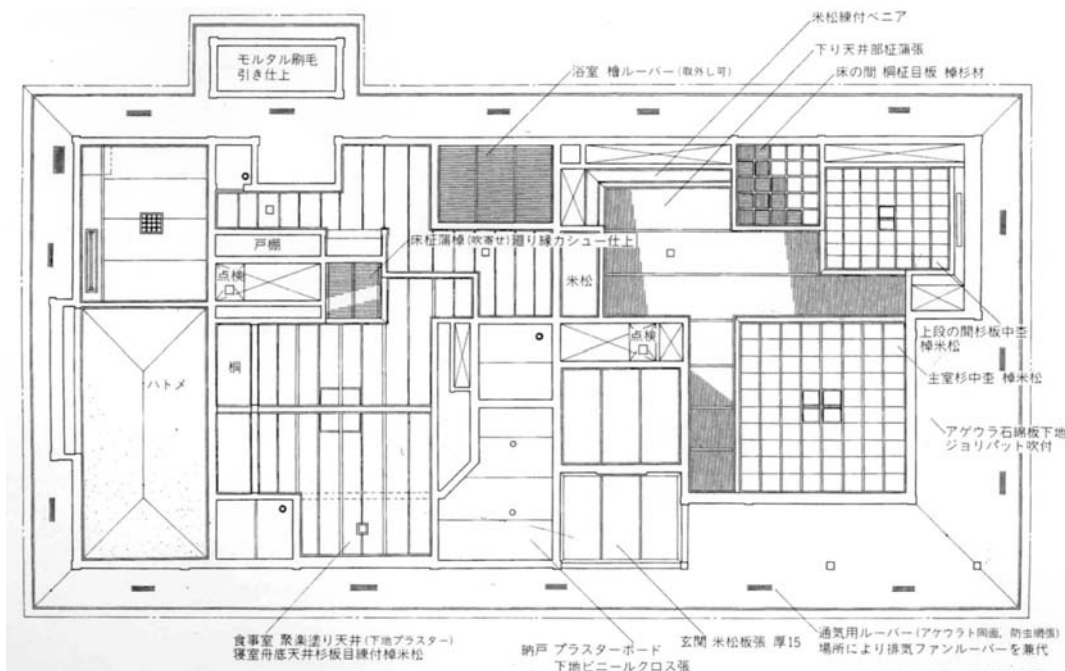


図2 「雲伴居」天井伏図

いう官能に媚びた形式へ展開していった側面を指して述べていることがわかる。

また、白井は1982年の対談で「禅宗は宋文化の橋渡しはしているが、日本で民衆まで徹する直接的な文化を創ったとはいえないと思う」[白井・栗田1982]と述べている。書院の発展の過程において、それが、一部の階層のみに享受することが許された文化であり、そこに「民衆」の存在が見当たらなかったという点について難色を示しているのである。

こういった考えのもと、めざすべきものとして、白井は「書院の前身」を挙げている。この「書院の前身」とは、「武家造」あるいは「主殿造」と呼ばれたような⁷⁾、鎌倉時代における武家の住居に見られる形式を指していると考えられる。武家造は、北尾春道⁸⁾が「書院造の発生は武家造を母体として禅院の風趣を邸宅化して起り」[北尾1956:3]というように、書院造の前身と考えられていた様式であり、さらに北尾は武家造を「生活に即した実際的必要から生じた邸宅」と評している。このように、白井の言う「書院の前身」なるものとは、鎌倉時代の武家の住居に見られるような、簡素で実用的なもの、そして、「民衆」の「生活」そのものに根ざした健全な空間を指すものと考えられる。

白井の数寄屋批判の考え方は、住宅作品「試作小住宅」の説明文でも見られる。冒頭で計画の経緯や、構法や材料について説明し、これに続けて次のように書いている。

都市の木造小住宅も此の頃は防火地帯と否とにかかわらず、殆んど構造材はモルタルで塗りつぶされることが多い。そして日本瓦の屋根と聚樂色のリシン壁で、いわゆる近代数寄屋という様式が氾濫している。これらの建物にあつては、當然、充分な考慮を拂わなければならないインシュレーションや壁体内の通気には甚だ冷淡である。この様式は花柳狹巷にはよろしい。しかし健全なるべき階級の住宅までこの様式を逐うのは問題である。[白井1952c]

当時流行していた近代数寄屋の様式が健全な民衆の住居にまで流布することを非難し、自身が用いた二重壁のシステムをそれと差別化して、立場を明確にしている。

その他、白井が和風建築について語った資料として対談「木のはなし」[白井・神代1978]が挙げられる。ここでも白井は「試作小住宅」説明文と同じように、近代数寄屋に対する同様の批判を述べている。20年以上の年月を跨いで、ほぼ同じ内容が語られており、1950年代以降、和風建築に対し、白井が一貫して持ち続けた考えであることが分かる⁹⁾。

2-2 白井晟一の桂離宮観

前節で述べたように、白井は一貫して数寄屋を否定しており、対談「建築と書」[白井・

栗田 1980]でも「僕は数寄屋は廃して[ママ排] います」とはっきり述べている。よって当然桂離宮も、白井の批判の対象となりうるだろうと考えられる。事実、1978年の対談で次のように述べている。

旧聚楽第移築の三溪園の諸建物、桂や修学院、京都御所などたくさんありますが、どちらにせよ特権者のための建物以外でないということは一様にわれわれの文化遺産といてもいろいろ考えさせられるものがあります。イデオロギーではなく造形のガイスト（精神）の問題です[白井・神代1978]

ここでも前述の数寄屋批判と同様の主張を見て取ることができる。しかしながら一方で、川添登が「白井晟一は、桂離宮・修学院離宮を見学し学ぶところが多かった」[川添1978a]というように、白井にとって桂離宮は良質な木造建築の手本であったことは否定できず、存在経緯は否定するものの、物的な実例としては肯定するという両義性が見てとれる。

さらに1983年のエッセーでは、次のように書いている。

「桂」の空間は語りつくされている。ここでわたしが新鮮を加えられるものではない。ただ、その卓絶にひそむ日本的感性の凝縮した構成の純粹さと自由。その迫体験の厚薄こそ、これからの日本文化の質に深く関わらねばならぬことを重ねて銘記するにとどめよう。[白井1983b]

「日本的感性の凝縮した構成の純粹さ」とは、白井が以前から日本建築の特徴として肯定してきた木造架構の特徴¹⁰を指すものと考えられるが、「自由」というところに桂離宮における数寄屋的要素、すなわち装飾的要素をある程度認める態度が見られ、最晩年における態度の軟化が見てとれる。

3 「雲伴居素描」スケッチにみる「雲伴居」の構想過程

3-1 「雲伴居」書斎にみる桂離宮との近似性

「雲伴居」構想過程の考察において重要な資料となるのが『写真集「雲伴居」』[白井晟一研究所1993]であり、「雲伴居素描」と題された白井本人が描いたスケッチが収録されている。この中には、フリーハンドで描かれた平面図、内部の展開図、内観パースのスケッチが含まれている。まず桂離宮との意匠的類似が見られる内観パースを描いたスケッチについて見ていこう。

図3のスケッチは、上段や床の間が描かれていることから、完成した書斎にあたる空間のスケッチであることがわかる。しかしながら、これを書斎の完成形と比較してみると、

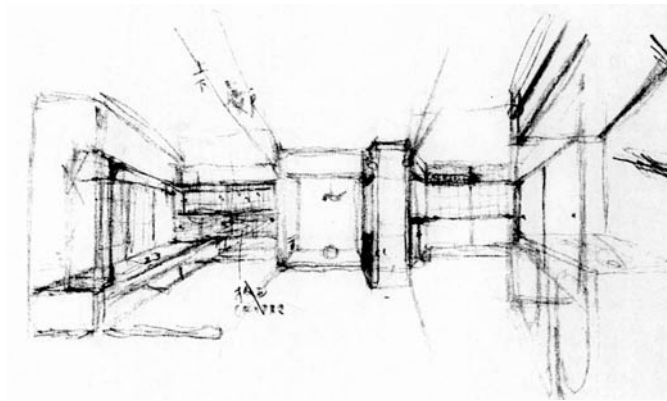


図3 「雲伴居」書斎スケッチ

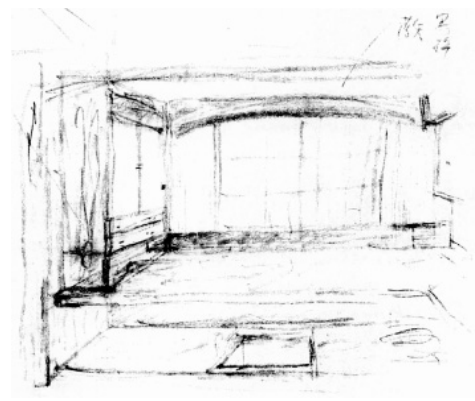


図4 「雲伴居」書斎上段スケッチ



図5 桂離宮新御殿平面図 写真3 桂離宮新御殿一の間上段 写真4 「雲伴居」木瓜形窓

上段と床の間の位置関係が反転していることがわかる。

この理由について、ひとつの仮説であるが、初期の計画段階において、白井は写真3・図5に示す桂離宮新御殿一の間座敷構成を意識していたのではないかと考えられる。木村二氏によると、白井は「雲伴居」計画期に数回にわたって桂離宮に足を運んでいたという¹¹⁾。

上段における付書院まわりを白井がどのように構想していたかについては、図4のスケッチが存在する。書院窓の上部に見られる円弧形の意匠からは、同様に桂離宮新御殿一の間上段の楕形窓の印象を受ける。また、「雲伴居」書斎の北西部には、写真4に示す半分に割った木瓜形の吹抜半窓が設けられている。これは「雲伴居素描」スケッチの当該箇所に一貫して見られることから、計画期間を通じて意図されていたと考えられる。これは桂離宮新御殿二の間床の間の木瓜形窓と近い意匠を示しており、一の間上段との配置関係も近い。さらに後述する図6のスケッチには「桂ダナ」という表記も見える。

よって、「雲伴居」書斎構想段階における桂離宮新御殿の意匠的影響は、充分指摘することができるであろう。

3-2 火床まわりの意匠について

桂離宮以外の古典との関連についても見て行こう。「雲伴居」書斎西面展開図を描いた図6のスケッチの火床まわりの観音開きの扉部分には、左右異なる意匠の扉が描かれ、右に「A」、左に「B」と記号ふられ、その上方に「A 又ハ B」と表記されている。さらに「A」の扉から引出し線が引かれ、その先に「桂ダナ 参考 院Ⅱ167」という表記が見える。「桂ダナ」については、桂棚の写真7上部に示す部分の意匠を指しているのであろう。完成形(写真5)は、これに近い意匠となっている。また「院Ⅱ167」についてであるが、これは『書院Ⅱ』[藤岡・恒成 1969b]¹²⁾の167頁を指すものと見て間違いのないであろう。この頁には三溪園臨春閣第一屋台子の間水屋(写真6)が掲載されており、「B」扉と近い意匠の扉が見られるほか、火床まわり全体の立面の意匠が非常に近いものとなっている。また、図6のスケッチの「院Ⅱ167」表記のすぐ下には、薄く「119 曼」と読める表記が見える。前掲の『書院Ⅱ』の119頁を見てみると曼殊院黄昏の間違い棚の写真が掲載されており、先の「A」扉に近い意匠の戸袋が見られる。

以上から白井の実際の設計の現場における古典の取り込み方が見てとれる。白井は桂離



写真5 「雲伴居」書斎火床

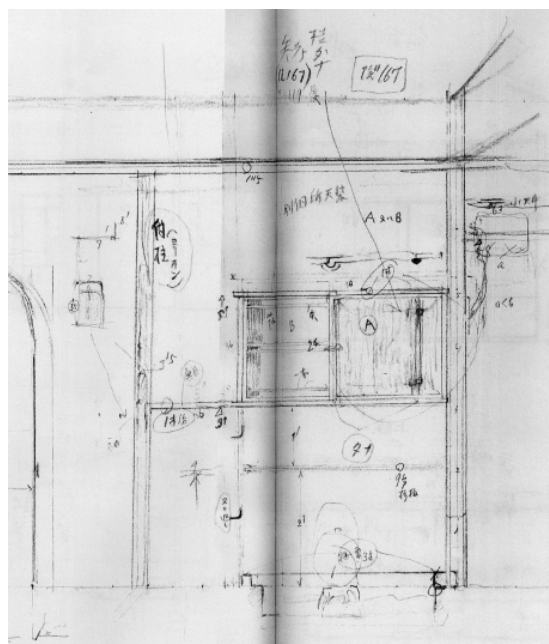


図6 「雲伴居」書斎西面詳細スケッチ

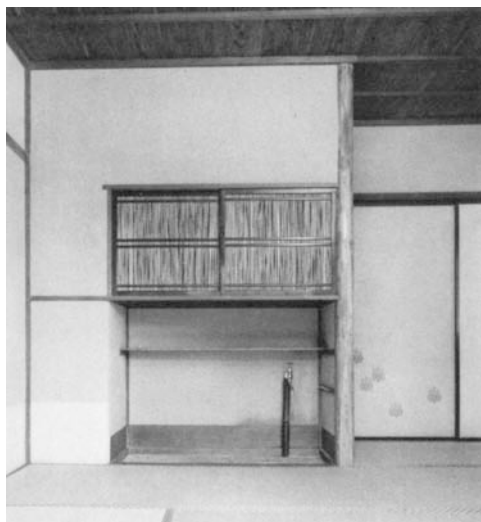


写真6 三溪園臨春閣第一屋台子の間水屋

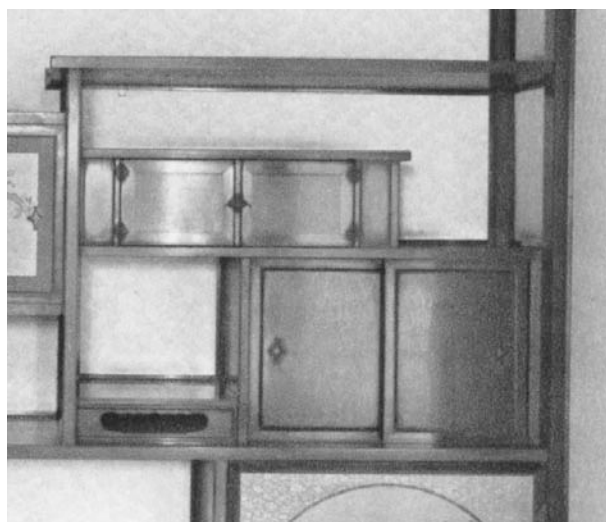


写真7 桂棚部分

宮に限らず、様々な古典から気に入った意匠を抽出し、自身の設計に取り入れていたのである。1969年には磯崎新による白井論[磯崎1968]を自ら肯定しつつ、「洋の東西とか故事来歴など超越して美をどこまでもとことんまで追求しているという伝統が、利休に限らずあるんですよ」[白井・村松1969]と述べ、また1978年には木造和風住宅の設計にあたり『数寄屋建築聚成』とか『書院建築類聚』など離すことがないくらい没頭しました。」「白井・神代1978]と語っている。

4 同時代の建築家の事例との比較

4-1 堀口捨己の「八勝館八事店」について

白井と同時代の和風を手がけた代表的建築家の作品において、桂離宮が意識された事例を見てみよう。その際、「雲伴居」書斎において特徴的な場所であった付書院を含む上段のあり方について注目する。該当する事例が見られた堀口捨己と村野藤吾の事例を見てみよう。

堀口については、写真8に示す「八勝館八事店」(1950)が挙げられる。堀口は外観について、「桂離宮のごとくになってきた」[堀口1978c:119]と書いている。また、堀口の著書『桂離宮』における桂離宮新御殿一の間上段の間に対する説明について見てみよう。全体としては、材質や仕上げ等の物的事実の説明が多い。堀口の意図が感じられるのは、「附書院の窓形は、いずれ唐様の花頭窓からきているであろうが、その形を崩して既に日本らしい姿となっている。」[堀口1978a:483]と楕形窓に関心している点や、桂棚について「打ち見た

ところ珍しい板を集めたことは直に見とれるが、そのために特に美しいとは思えない。」[堀口 1978a:484]として、素材の珍しさには価値を見出さない姿勢である。

続いて「八勝館八事店」についてであるが、「みゆきの間」に桂離宮新御殿一の間上段を想起させる付書院を含む座敷が見られる。藤岡洋保はみゆきの間の構成の特徴について「全体的に非常にダイナミックな空間構成を持つ和室で、「線」と「面」の構成という考え方でつくられていることがよくわかる。南側に張り出すことによって空間の奥行きを感じさせる、変化に富んだ床の構成や、広間南側の長押が床の途中にある床柱までつながっているあたりにそれが見られる。」[藤岡 2009:178]としている。

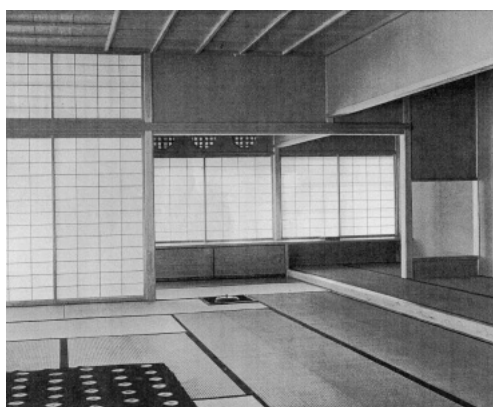


写真8 「八勝館八事店」みゆきの間(1950) 写真9 「三養荘」雄峰床の間(1989)

付書院について見ていこう。配置については、落掛と床框によって明確にくの字に広間に張り出す桂離宮新御殿一の間例とは異なり、付書院が南側に張り出しており、座敷の形状は矩形に保たれている。床の間の上段部分がそのまま延長されて付書院のゆか部分を形成する一方、下り壁や柱、鴨居といった水平垂直の要素が、直角に互いに交差することによって、付書院の空間を隣接するスペースから区分している。また実際の使い勝手について、藤岡が「床脇南側の出っ張った部分は茶を点てる場所としても使えるようになっている。」[藤岡 2009:180]と言及している。

4-2 村野藤吾の「三養荘」について

村野については、写真9に示す「三養荘」(1989)が挙げられる。中村昌生によれば「村野先生は、三養荘の計画にあたり「桂離宮」のようにという基本的な構想を抱かれていた

という」[中村 1991]としている。続けて「桂のすべてが優れているとは思いませんね。あの時代の物で他にももっとよいところを持っている建物があるんじゃないでしょうか。」という村野の言葉を紹介し、さらに村野は、桂離宮の一番賞賛するところとして「やはり古書院の正面から舟着場へかけてのアプローチでしょうか、あそこは素晴らしい」と絶賛したという。

西和夫は、桂離宮の形態だけを論じることを批判し、「桂離宮の大きな特色は、それが洛外に設置された別荘だという点にある。教養に裏付けられた遊びの施設であり、宿泊施設であった。(中略)ここに後水尾院のような賓客を招いたから、賓客を接待するための施設でもあった」としている。村野はそうしたことを理解し、念頭に「総体としての桂離宮」があったとしている¹³⁾。

次に付書院について見てみよう。「三養荘」の建築群の中に、桂離宮新御殿一の間上段に類する場所を探索してみると大広間「雄峰」上段が挙げられる。写真9からわかるように床の間内に設けられた上段には、付書院の楕形の意匠等明らかな類似が見られる。しかしながら、配置については大いに異なっており、床の間の中にさらに入れ子状に、付書院を含む上段部を設けている。この場所は雑誌発表の際、花を飾った写真が掲載されており¹⁴⁾、そのような使用を想定してデザインされたものと考えられる。写真キャプションには「残月床」とあり、残月風と見ることもできる。残月床は、村野が一貫して取り組んできたテーマであり¹⁵⁾、自邸の例をはじめ様々なアレンジが試みられた。そのような残月写しと桂離宮のモチーフが融合したものとも考えられよう。

4-3 二者との比較にみる「雲伴居」

桂離宮の影響が見られた堀口の「八勝館八事店」みゆきの間、村野の「三養荘」雄峰について、付書院を含む上段の構成に着目し、白井の「雲伴居」書斎と比較してみよう。

堀口の例では、「八勝館八事店」という建築自体が天皇の行幸を前提に計画されている点が注目されるほか、付書院まわりに茶を点てるという機能が付加され、茶室研究の第一人者たる堀口なりの解釈が垣間見える。しかし書院は、実用目的の場所ではなく、床の間同様美的観照の場所以外のものではない。

村野の例では、施設全体を大きく「遊宴の舞台」と捉え、付書院を含む上段はその一部として、花等を飾る飾り棚としての役割を果たしている。書院と床が一並びに観照の場所となっている点で堀口同様であり、L型に配置される伝統的座敷飾りと比較しても平板化

している印象が否めない。

他方、白井についてであるが、付書院を書く場所と捉えており、この点に数寄屋批判とも重なる、白井の付書院批評が見て取れる。2節で述べたように白井は、数寄屋を批判した上で、「書院の前身」なるものをめざすべきものとして挙げている。これは一部の人間だけが享受する、官能に媚びた装飾化した形式を否定し、民衆の生活の実用に即した空間をよしとするものである。この構図を、付書院についても考えてみると、「書院の前身」に相当する「出付机」という段階が指摘できる。なぜなら、付書院は、完成した書院造において装飾的な場所になったものの、その起源は書を読み、物を書く、生活の実用に即した机であったからである。その様子は『法然上人絵伝』[小松 1990]に見ることができる。

桂離宮新御殿一の間上段付書院の使い勝手については、西和夫は「押板の下は、ここに坐って書き物などをする際に膝が入るようにつくられ、しかも外側の入側縁との間に入れた板をはずせるようにしてあって、夏に風を通すための工夫となっている。」[西 2010]と解説している。すなわち桂離宮新御殿一の間上段付書院は、実用が考慮された場所であるという解釈が存在する。

白井がこの事実を知っていたか否かは不明だが、以上から、白井は付書院を書くという行為の場所として解釈することによって、その装飾的要素を批判し、伝統的様式に対する批評的意匠を完成させたと考えられる。その際、桂離宮は新御殿一の間上段付書院における実用的側面において、白井を触発した可能性があると言えよう。

5 白井和室作品における「雲伴居」書斎

最後に、第2章・第3章で考察した天井構成や床の間の意匠の特徴を踏まえ、白井和室における「雲伴居」書斎の位置を確認したい。

天井の構成について、第2章の結論として得た「床の間・出入口部を区分天井部としながら、主要開口部付近を高天井とする」傾向は、「雲伴居」書斎でも見られた。早い段階で出揃った断面形状のパターンは既存の形式を採用していたのに対し、白井和室の特異性は、その組み合わせとしての天井伏の構成に表れており、年を追って多元化したその構成は、最後の「雲伴居」で最も複雑化した姿を見せたのである。図2の天井伏図からもわかるように、上段・床の間・物入部分の雁行する平面計画に対応して、天井では下り壁が同様に雁行して設けられ、入り組んだつくりとなっている。ここではさらにもう一重、広間側に天井面の段差が設けられ、広間部分を整然とした矩形の高天井空間としている。

こうした物的な構成に対し、第3章における白井の床の間に対する考察から、次のような解釈を与えることができた。白井は床の間の原型に祭壇を見ており、これを含む和室全体を、身廊的空間と側廊的空間による長堂式教会堂建築の空間構成に相同するものと理解しうるのである。実際に和室における広間は、祭壇としての床の間に正対し、その脇には天井を一段低くすることによって区分された側廊的空間が展開している。

他の白井和室作品と「雲伴居」書斎が異なっているのは、付書院を含む上段の存在と言えよう。床の間を焦点とした和室空間を多数計画してきた白井にとって、自身が書を書くスペースとしての上段をどう空間内に挿入し、全体の構成をつくるかが、この「雲伴居」書斎における設計のテーマになったのではないだろうか。図7・8に示すスケッチは、いずれも書斎東面展開図（付書院書院窓をみる方向）をスケッチしたものであり、上段と床の間の位置関係を検討していた様子が伺えるほか、関係者の証言においてもそのことが言及されている¹⁶⁾。

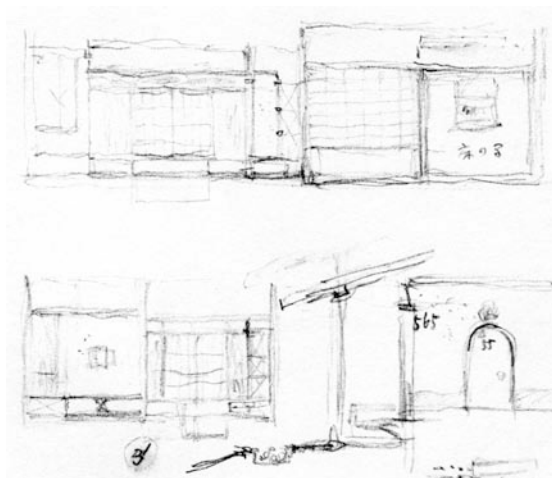


図7 「雲伴居」書斎東面スケッチ

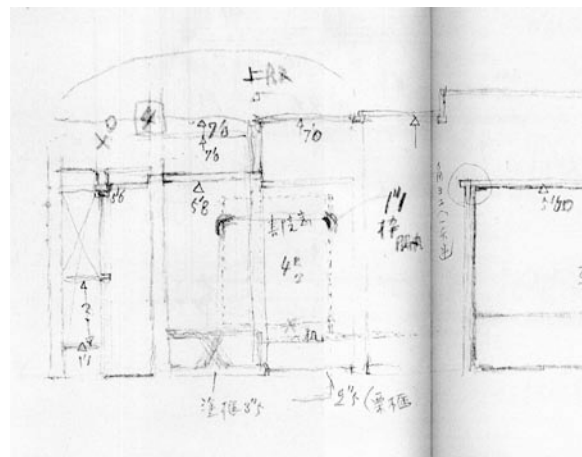


図8 「雲伴居」書斎東面詳細スケッチ

そこで白井が最終的に出した答えは、雁行の構成であった。桂離宮新御殿一の間に見られるような上段が広間に張り出す構成を基に、付書院を含む上段に床の間を隣接させ、くの字の張り出しを連続させながら一定の秩序にまとめている。付書院を含む上段は、先の長堂式教会堂建築の空間構成に関連させて言えば、内陣奥に周歩廊を介して設けられた放射状祭室のような存在と言えるかも知れない。座敷全体の空間構成において、より個人的な活動の場が設けられたのである。

「雲伴居」書齋において、座敷全体の焦点としての床の間の存在と、自身にとって重要な「書く」という行為の場所の併存は、天井の構成を含む座敷構成をより複雑なものとしているが、前述の通り、広間には主要開口部に対応した矩形の高天井空間が設けられている。具体的要因から生まれた複雑性と純粋な秩序を与える抽象性が統合された構成に、白井和室における最も深化した姿を見て取ることができよう。

おわりに

白井の和風建築観の特徴は、一貫して数寄屋形式成立の社会状況を批判している点であり、一部の人間だけが享受する、官能に媚び、装飾化した形式を否定し、「書院の前身」なるもの、すなわち、民衆の生活に根ざした健全な空間をよしとするものであった。従って桂離宮についても当然、批判の対象となるのだが、見学して学ぶところが多かったという事実も伝えられており、造形の背景の社会状況は否定しながらも、良質な和風建築の物的手本としては参考にするという特徴を指摘することができる。

『写真集「雲伴居」』に収録された「雲伴居素描」スケッチからは、「雲伴居」書齋への桂離宮新御殿一の間の影響が読み取れ、他の古典についても自在に自身の意匠に取り込んでいる様子を見てとることができた。

また、桂離宮の影響が見られる堀口捨己や村野藤吾の事例と「雲伴居」の例を比較すると、付書院の現代的有用性の求め方において、特徴的な差異が見られ、二人の事例が、茶を点てる場所や花を飾る場所として計画されているのに対し、「雲伴居」では、書を書く場所として計画されていた。数寄屋を批判して「書院の前身」をよしとする白井自身の和風建築観と同調するように、付書院を、それが装飾的な要素となる以前の「書く」という行為の場所として、改めて捉え直し、伝統的様式に対する批評的意匠を完成させたのである。その際、桂離宮は数寄屋でありながら、付書院のあり方において肯定的な参考材料となった可能性がある。

さらに前章までの考察を踏まえると、他の白井和室作品における「雲伴居」書齋の特徴的な点は、床の間を焦点とした和室空間に、自身にとって重要な上記のような付書院を備えた上段を付加している点であり、白井は雁行の構成でこれらに関連づけ、それにより複雑化した広間に対し、上部から正方形の高天井を重ね合わせることによって、全体の構成に秩序を与え、白井和室群の中で最も深化した空間を構想した。

以上の点で、「雲伴居」は白井の和室建築における伝統的様式への姿勢を示す重要な作品

として位置づけることができよう。

第4章 注記

- 1) 本章では、「雲伴居」に見られる桂離宮との意匠的類似や白井晟一の設計意図とその桂離宮観との関連等を一括して「桂離宮の影響」と捉えている。
- 2) 比較対象として取り上げた2つの事例は、「雲伴居」とは用途や規模等異なる点も多いが、本章では桂離宮の影響と付書院を含む上段のあり方を主要な論点として扱っている為、前者が設計者の認識として確実に認められ、かつ後者に類する空間を含んでいることに重点を置き、事例を選定した。なお、管見では他の4名の建築家（村野、吉田、堀口、谷口）の作品において、上記の条件に適合する事例は、他に見当たらない。
- 3) 「SIRAI, いま 白井晟一の造形」展（会期：2010.7.5～7.30, 会場：東京造形大学附属横山記念マンズー美術館）, 「建築家 白井晟一 精神と空間建築家 白井晟一 精神と空間」展（会期：2010.9.11～11.3, 会場：群馬県立近代美術館 / 会期：2011.1.6～3.6, 会場：パナソニック電工ミュージアム / 会期：2011.5.23～8.11, 会場：京都工芸繊維大学美術工芸資料館）
- 4) 『新建築』 1985年2月号, 新建築社, pp157-172, p253 ; 『建築文化』 1985年2月号, 彰国社, pp31-46 ; 『日経アーキテクチュア』1985年1月28日号, 日経BP社, pp178-183 ; [塩屋(編) 1984]pp16-28 ; [白井晟一研究所 1993]が該当する。尚, 「雲伴居」は現在, 所有者の都合で変更が加えられている。
- 5) 「書堂」という表現は, [白井昱磨 1985b]等の白井昱磨の文章で使われたのがきっかけとなり定着した。白井本人が使った表現であるかどうかは定かではない。白井は建築家でありながら「この十数年, 一日の半分を習書でうずめることができたのは大きな恵みであった」[白井 1977m]と語っているように, 1960年代中頃からその生を閉じる1983年までの間, 書を書くことに大きな時間を割いてきた。1970年以降には, 白井の書の展覧会が行われ, 書の作品集（『顧之居書帖』）も刊行されるようになり, 白井の書が社会に広く知られるようになった。いずれにせよ, 「雲伴居」は白井晟一がそこで書三昧の生活を送るために造った住居であることに間違いは無い。因みにそれ以前の自邸（「虚白庵」(1970)）には座敷が存在しない。
- 6) 「ここに座している時間が長いので冬など嵯峨野の冷え込みを考慮して足下にヒーターを組み込んだのです。飽くまで形式的な書院に利便性の上からの椅子機能の採用に加

え現代のテクノロジーを加味したのです。」柿沼守利氏（当時、白井晟一研究所所員で「雲伴居」の現場を担当）の証言。2003. 9. 12～17 筆者とのインタビュー。

- 7) [川上 2002]を参考にした。また日本建築史研究の分野では、このような様式を定義する必要がないのではないかという議論がなされており[太田 1966, 堀口 1978b], このような状況を踏まえて、白井が「書院の前身」という表現を使用したのではないかと考えられる。
- 8) 白井は北尾の著作を勉強していた。これは著者が2003. 9. 19に行ったインタビューにおいて白井昱磨氏が証言した。
- 9) 白井が否定する「数寄屋」とは、本文中で「近代数寄屋」と記述している通り、主として白井と同時代の建築家が展開した数寄屋を指すものと考えられるが、3-2で引用している白井の発言を踏まえると、その批判の対象は近世の遺構にも及ぶものと考えられる。
- 10) 「日本の優れた遺構は例外なく、構造そのものに仕上がった建物の美の性格を約束してゐるのであります。このことは勿論、室内の構成に於ても同様でありまして、美しい空間をつくつてゐる用材の大きさ、窓や天井の高さ、比例などがみんな構造そのものに關係してゐるのであつて「装飾」による付け加への効果をまつまでもないのであります。」[白井 1952a]
- 11) 著者が2004. 1. 7に行ったインタビュー。木村氏は材木店の店主として「雲伴居」計画に関わっており、「雲伴居」計画期においてしばしば白井と行動をともにしていた。「白井は、雲伴居計画の時期、桂離宮へは何度も行つたらしい。そのほか曼殊院、石水院、にも行った。」
- 12) この本を白井は「雲伴居」計画期に自身の傍に置いていた。「著者が慥か藤岡通夫（前東京工大教授）の『書院』（創元社刊）上下2巻を傍に置いていました」前掲注6) 柿沼守利 2003 による。
- 13) 「桂離宮の大きな特色は、それが洛外に設置された別荘だという点にある。教養に裏付けられた遊びの施設であり、宿泊施設であつた。御殿群は宿泊用のものである。ここに後水尾院のような賓客を招いたから、賓客を接待するための施設でもあつた。庭に散りばめられた茶屋も、その目的のためにある。庭に船を浮かべ、船で料理や酒を味わいつつ漢詩や和歌を作つて楽しむ。茶屋でもやはり、茶事を中心に四季折々に遊ぶ。御殿、茶屋、そして庭、その総体が遊宴の舞台となるべくデザインされている。

これが桂離宮である。村野はこの点を十分に知っていただろう。(中略)村野の念頭には「総体としての桂離宮」があったはずである。」[西 1994]

14) 『新建築』1989年5月号, 新建築社, p295

15) 村野藤吾は, 中山悦治邸(1934), 自邸(1942), 今橋なだ万(1961)等, 多くの計画において残月写しの床の間を構想し, 様々に本歌をアレンジしたデザインを多数生み出した[長谷川1998]。

16) 「広間に少し入り込んだ書院と方一間の床の間、そして長い板床が半間ずつ後退して雁行する。父のスケッチにはこの面が何度も何度も書き替えられていた。もっとも力を注いだところだったのだろう。」[白井昱磨 1985b]

終章

1 研究のまとめ

ここで、本研究のまとめとして各章を振り返り、結論を導く準備とする。

序章では、和風を手がけた昭和期の建築家たちの最初期の活動において、共通して民家や民家論の影響があることを確認した。白井は、戦前から戦後にかけての住宅作品の解説の際、民家との関係について言及し、「試作小住宅」解説文では民衆の視座への共感が見られた。またエッセー「縄文的なるもの」で取り上げた江川邸への評価も民家論に通ずるものであった。

第1章では、白井の伝統論について、白井の著作や対談記事を網羅的に見直すことにより、その全貌を明らかにした。エッセー「縄文的なるもの」は、縄文文化を賞賛するものではなく、その真意は、創造の主体が、表面的な形象に惑わされずに、いかに内的な潜在力を掘むかという主旨であった。数ヶ月後のエッセー「めし」では、弥生文化の象徴である「めし」をモチーフに、白井独自の「用」の概念が、日本文化の独自性として説明され、神への祈りと生きることを一つにした共同性であるという見方が示された。その後、白井の伝統論は「伝統拡大」論へと変化していく。日本という限られた地域に限定して伝統を語ることの否定し、世界共通に、普遍的に求めていけるものだと主張するようになる。こうした主張は、やがて「ユーラシア的」という形で具体性を持つようになった。1950年代伝統論争において白井が主張したかったのは、創造の主体としての伝統に臨むあり方であり、それは、対象の地域的由来や形象によらずに、普遍的な古典の潜在力を捉える態度であった。伝統論において、創造の契機と批判精神とは、白井にとって同義であり、当時の伝統認識における批判精神の欠如に対する抗議であった。

第2章では、白井の和室について、特に天井の形状に着目して、その空間構成上の特徴を考察した。断面形状の種類が早い時期に出揃ったのに対し、それらの組み合わせとしての天井伏構成は年を追って複雑化する傾向が見てとれ、遺作「雲伴居」では最も複雑な天井伏が見られた。このように様々な形状的变化が天井に見られる白井の和室において、平面・天井間差異を含む事例は特徴的なものであり、区分天井部がどのような建築的要素と関連しているか等の観点から、平面・天井間差異室の天井伏の類型を得た。これを時系列に見て行くと、各形式の特徴を徐々に統合していくような方向で事例が展開する傾向が読

み取れ、それは床の間・出入口部を区分天井部としながら、主要開口部付近を高天井とし、場合によって隣室の秩序を取り込む、という傾向であった。

第3章では、白井の住宅作品における床の間の意匠について、同時代の建築家による事例との比較を通じ、その変遷と意義を考察した。白井の床の間の意匠形式は、およそ4つのタイプに分類することができ、中でも特徴的なものは、床の間の落掛が座敷全体の空間構成につながっていく例であった。これは、室内に天井の高い部分と低い部分をつくり、空間を分節する落掛と、床の間の落掛が融合したものと考えられる。白井は床の間の原形を、西欧・日本の建築双方においてその場に神聖さを与える祭壇の形式に見ており、アルコーブが醸し出す精神的な重要性が、和室においては、床の間とその部屋にいる人間との関係を空間的に組立て直すこととして、絶えず自覚され模索されていたことを示していた。これらの内容からは、特定の文化にこだわらない白井の考え方の特徴が読み取れ、第1章で述べた白井の建築の古典に対する見解の変化にも相当する。

第4章では、白井の遺作であり本人が使用する目的で計画された和風住宅「雲伴居」(1984)を事例に取り上げ、桂離宮の影響に着目して、その意匠的特徴と、その背景となった白井の建築観を考察した。白井は和風建築について一貫して数寄屋の成立背景を否定する立場をとったが、「雲伴居」の構想では桂離宮については物的手本として認める姿勢も見せ、意匠を自身の設計に取り込む様子が確認できた。書斎上段の計画は、桂離宮新御殿上段を参考としながら、付書院を「書く」という行為の場所として捉え直すことによってその装飾的様態を批判する批評的意匠と考えられるのである。前章までの考察を踏まえると、「雲伴居」書斎の特徴的な点は、床の間を焦点とした和室空間に、自身にとって重要な上記のような付書院を備えた上段を付加している点であり、複雑化した座敷要素が接続する広間に対し、上部から正方形の高天井を重ね合わせることによって、全体の構成に秩序を与え、白井和室群の中で最も深化した空間を実現した。

2 結論

本論文では、昭和期建築家による和室の内部の可能性について、特に白井晟一の事例を中心に考察を行ってきた。本論を通じて明らかとなった内容は、以下の3点に集約されよう。

- ・ 白井の和室意匠の背景となる白井の伝統論によれば、伝統とは日本という限られた地域だけのものではなく、世界共通に人間社会が求める拠り所である。対象の地域的由来や形象によらずに、普遍的な古典の潜在力を捉える態度を白井は重視していた。実作では、床の間を含む空間構成において、西欧・日本の建築双方においてその場に神聖さを与える祭壇を焦点とした、長堂式教会堂建築の形式と共通する空間形式が見られた。
- ・ 白井による床の間の意匠の中で特徴的なものは、落掛が座敷全体の空間構成につながっていく例であった。様々な形状的变化が天井に見られる白井の和室において、天井面の段差を形成する落掛と、床の間の落掛が融合したものと考えられる。その室内には身廊的空間と側廊的空間による構成が読み取れ、床の間はその精神的焦点として存在した。
- ・ 白井の和風建築観の特徴は、一貫して数寄屋の成立背景を否定している点であったが、桂離宮新御殿上段については、意匠の手本としては参考にするという特徴が見られた。遺作「雲伴居」では、新御殿上段を参考としながら、装飾的な要素であった付書院を、生活行為の「書く」ための場所として捉え直し、伝統的様式に対する批評的意匠を完成させた。

白井和室の床の間

白井の和室において、床の間は重要な要素であった。これは白井和室に特徴的な天井構成の基点となっていたことから読み取れる。しかしながら、その床の間に見ていた意義は、同時代の建築家とは異なっていた。床の間を積極的に肯定した堀口捨己は、生活の中に芸術を取り込む装置としての側面に注目し、谷口吉郎も床の間の封建的性格に問題意識を持ちながらも、着眼点は堀口に近い。他方、吉田五十八は、床の間を改革すべき対象と見なしていた。そうした中、白井にとっての床の間は、西欧・日本を問わず、そこに神聖さを感じる祭壇に起源をもつと考え、和洋ともに室全体の空間的・精神的焦点となるべき入込である点に注目していたと考えられる。これが意匠として端的に表出したのが、床の間の落掛が、室全体につながっていく例であり、落掛は天井の高低差を形成しながら、座敷の空間に身廊的空間と側廊的空間の対比に相似する構成を導入した。

白井和室の付書院

床の間と並んで座敷飾りの主要な要素であった付書院は、白井最後の作品「雲伴居」で、批評的意匠の形をとる。白井が一貫して持ち続けた、数寄屋の成立背景を批判し、民衆の生活に根ざした健全な空間をめざす姿勢と同調するように、付書院が座敷飾りとして装飾的な要素となる前の、「書く」という行為に即した場所として、書斎の上段が計画されたのである。付書院を含む上段を、花を飾る場所として計画した事例のある村野藤吾や、茶を点てる場所としても使用できるように計画した堀口捨己とは対照をなす。

以上のような、座敷飾りに対する解釈は、現代の和室に対し多くの示唆を含むものと考えられる。白井は、公平な視野で古典を捉えながら、現代の生活空間にも残存する伝統的様式に対し、これが形成されてきた歴史に対する洞察のもと、形式化されてしまった意匠の内的な可能性を問いただし、そこに見出し得る原形的な意義を再構築して、現代の生活空間における重要な要素として提示しているのである。

本研究では、座敷飾りを近現代の和室の主要なテーマとして取り上げてきたが、他の構成要素である違い棚や帳台構えについては扱っていない。棚は、現代的な視点で見た時、より日常的な装置的あり方へと溶解し、また帳台構えは建築家達の言説や実作の中にその事例がほとんど見られないように、近現代に姿を消した要素である。この点は、昭和期の和室の特徴として指摘することができるが、その詳細な検討は将来の課題である。

和風の代表的建築家達の中での白井

堀口捨己の和風は、「近代主義のフィルターを通した伝統理解」に基づくものであり、照明や空調といった現代的な設備等を取り込みながら、水平垂直の線や面による構成で伝統的様式をアレンジし発展させたものであった。建築史家として茶室を研究した影響も見られる。

堀口が空間の構成という次元に関心したのは対象的に、村野藤吾はむしろ建築の各要素における具体的形状に興味を示した。古典モチーフのアレンジの事例が多数見られ、そのアレンジの仕方は非常に自由なものであり、独創的であると言える。

吉田五十八の和風は、村野と同様、その表現の自由さに特徴があるが、吉田

の場合、既存のものにはとらわれず、改革的精神に基づいたデザインを行っている。その様子は生活に根ざした発想から、特に細部の工夫に多々見られた。

谷口吉郎の和風は、判断が難しいが、建築家の姿勢としては、早くから教職に就いた者としての、実証的で、問題に応えようとする態度が見られる。残月写しを行った際には、本歌を実測して正確に写したという[谷口 1981e:188]。

上記のような建築家達の中で、歴史に正面から対峙した白井の位置は堀口に近いと言えるかも知れない。だが、立場が全く異なっていた。堀口は、近代主義を背景にしているが、白井の作品は、民衆の視座への共感という立場を表明しつつ、日本という文化範囲に限定せず世界に共通して求めうる古典と理解し、建築家からは縁遠い民家という建築の伝統に古典の基盤をみたのである。そうした立場から生み出されたものが、本論文で見てきた白井の和室に対する制作傾向であると言えよう。

建築家と和室

最後に、和室のデザインにおける建築家の果たしうる役割について考えてみたい。建築家は和室については、その構成要素を新しく作り出すことは難しいと言えるかも知れない。それらは一人の建築家の生きた時間に比して非常に長い時間をかけて形成されてきたものであり、それが文化であり、歴史であるからである。また本稿は和室を、座敷飾りを含む畳敷の室と捉えているが、そうした定義からも既に既存のボキャブラリーを使用することが前提とされている。建築家ができることは、これらの既存のボキャブラリーに改変や新たな意匠を加えたり、それら同士の組み合わせを組み替えることによって、そこに新たな価値や、意味を創出し、伝統的なものに対する視野を確保して、その現代的な意義やあり方を模索することである。

昭和期、特に 1960 年代までの時期は、この新たな改変や意味付けの作業が劇的に行われた時期であった。これは、日本における古典主義の実践と捉えることが可能であり、故に多くの建築家達が、自身にとっての積極的な制作活動として和室に取り組んだのである。

結果として、和風建築及び和室は、建築家の関与によって既存の形式を繰り返すだけの状況から、一定の発展を遂げることができた。吉田五十八や堀口捨己の功績については、これまでも多く語られてきたが、本論考では、和室を手がけた建築家の中でも特異な存在といわれながら、その理由が明らかにされて

来なかった白井晟一による和室が示す異質さの理由の一端を指し示すことができたのではないかと考えている。

今後に向けて

白井晟一の作品に見られる制作傾向は、白井がそれについて直接語っていない以上、白井本人が意識的であったかどうかはわからない。そもそも建築家が、自身のイメージ的思考のすべてを言語的に認識しているとは思えないのである。むしろ、建築家が意識しきれなかった制作傾向を、本研究は浮き彫りにし、かつ、これを歴史的様式への現代的批評として読み取ることが、本研究が得た成果と考えられる。

本研究は、白井晟一の事例を中心に行った近代和室の考察であるから、白井以外の建築家の事例が示唆する和室の可能性の考察については、今後さらなる研究が必要とされるところである。また、本文で一部扱った白井の非和室作品における意匠の特徴についても同様に今後の課題と言える。さらに和室住居が前提とする環境の市街化が顕著な今日、和室の存在理由が一室内部に極限化される傾向に対し、本研究は考察の眼を向けられなかった。これも次の課題として、引き継ぐつもりである。

引用・参考文献一覧

I 白井晟一の作品集・全集

本文献一覧は、年代順に配列した。

彰国社(編) 1969『木造の詳細3住宅設計編』彰国社

栗田勇(編) 1970『現代日本建築家全集9・白井晟一』三一書房

白井晟一 1974『白井晟一の建築』中央公論社

川添登(解説) 1978『白井晟一 建築とその世界』世界文化社

SD 編集部(編) 1978『《現代の建築家》白井晟一』鹿島研究所出版会

白井晟一 1981g『石水館 建築を謳う』かなえ書房

白井晟一研究所 1987a『白井晟一全集 図集Ⅳ 商業施設』同朋舎出版

白井晟一研究所 1987b『白井晟一全集 図集Ⅴ 親和銀行本店』同朋舎出版

白井晟一研究所 1987c『白井晟一全集 図集Ⅵ 計画案』同朋舎出版

白井晟一研究所 1988a『白井晟一全集 図集Ⅰ 住宅Ⅰ』同朋舎出版

白井晟一研究所 1988b『白井晟一全集 図集Ⅱ 住宅Ⅱ』同朋舎出版

白井晟一研究所 1988c『白井晟一全集 図集Ⅲ 公共建築』同朋舎出版

白井晟一研究所 1988d『白井晟一全集 別巻Ⅰ 白井晟一の眼Ⅰ』同朋舎出版 (SZBⅠと表記)

白井晟一研究所 1988e『白井晟一全集 別巻Ⅱ 白井晟一の眼Ⅱ』同朋舎出版 (SZBⅡと表記)

白井晟一研究所 1988f『白井晟一全集 補遺』同朋舎出版 (SZBHと表記)

白井晟一研究所 1992『白井晟一スケッチ集』同朋舎出版

白井晟一研究所 1993『写真集「雲伴居」』筑摩書房

東京造形大学 白井晟一展実行委員会(編) 2010『SIRAI, いま 白井晟一の造形』学校法人桑沢
学園 東京造形大学

白井晟一 2010『白井晟一 精神と空間』青幻舎

白井原多(編) 2011『白井晟一の手と目』鹿島出版会

II 白井晟一のエッセー

本文献一覧は、年代順に配列した。

白井晟一 1937「伊豆歡歸荘」SZBⅠ

白井晟一 1941「河村邸」SZBⅠ

白井晟一 1952a「華道と建築—日本の傳統」SZBⅠ

白井晟一 1952b「秋の宮村役場」SZBⅠ

白井晟一 1952c「試作小住宅」SZBⅠ

白井晟一 1953a 「地方の建築」 SZB I
白井晟一 1953b 「書評「リチャード・ノイトラ」」 SZB I
白井晟一 1953c 「住宅思言」 SZB I
白井晟一 1954a 「K 氏邸とその書屋について」 SZB I
白井晟一 1954b 「煥乎堂について」 SZB I
白井晟一 1954c 「おもひで」 SZB I
白井晟一 1955a 「原爆堂について」 SZB I
白井晟一 1955b 「天壇」 SZB I
白井晟一 1955c 「中國の石佛」 SZB I
白井晟一 1956a 「縄文的なるもの—江川氏舊葦山館について」 SZB I
白井晟一 1956b 「豆腐」 SZB I
白井晟一 1956c 「めし」 SZB I
白井晟一 1957 「待庵の二疊」 SZB I
白井晟一 1958 「傳統の新しい危険 われわれの國立劇場建設」 SZB I
白井晟一 1960 「佛教と建築」 SZB I
白井晟一 1961a 「ララミー牧場」 SZB I
白井晟一 1961b 「善照寺本堂」 SZB I
白井晟一 1961c 「松井田町役場」 SZB I
白井晟一 1962 「建築家は二の足を踏む—國立劇場設計の公募にさいして」 SZB I
白井晟一 1965 「タバコのうらみ」 SZB I
白井晟一 1966 「漢字を書く」『芸術新潮』7月号, 新潮社
白井晟一 1968 「笹原貞彦と私」 SZB I
白井晟一 1969 「親和銀行本店」 SZB I
白井晟一 1973 「聞書「創造の鼎」」 SZB I
白井晟一 1975a 「サンタ・キアラ館」 SZB I
白井晟一 1975b 「聞書「歴史へのオマージュ」」 SZB I
白井晟一 1975c 「親和銀行本店懷霄館」 SZB I
白井晟一 1975d 「幻の花」 SZB I
白井晟一 1975e 「發心」 SZB I
白井晟一 1976 「聞書「教材コレクション」」 SZB I
白井晟一 1977a 「白磁の壺」 SZB I
白井晟一 1977b 「硯」 SZB I
白井晟一 1977c 「東洋のパルテノン」 SZB I

白井晟一 1977d 「めがね」 SZB I
白井晟一 1977e 「土の造形」 SZB I
白井晟一 1977f 「思索の空間」 SZB I
白井晟一 1977g 「箸」 SZB I
白井晟一 1977h 「京都」 SZB I
白井晟一 1977i 「藝」 SZB I
白井晟一 1977j 「建築は誰のものか」 SZB I
白井晟一 1977k 「無窓無塵」 SZB I
白井晟一 1977l 「カルロ・スカルパ特輯によせて」 SZB I
白井晟一 1977m 「明窓淨机」 SZB I
白井晟一 1978a 「高田博厚」 SZB I
白井晟一 1978b 「画蟲齋回顧」 SZB I
白井晟一 1978c 「日本にいた私の知らないブルーノ・タウトについて」 SZB I
白井晟一 1978d 「伊都内親王願文」 SZB I
白井晟一 1978e 「虚白庵随聞Ⅰ」 SZB I
白井晟一 1978f 「虚白庵随聞Ⅱ」 SZB I
白井晟一 1978g 「骨董について」 SZB I
白井晟一 1978h 「緒」 SZB I
白井晟一 1979a 「古くなった言葉」 SZB I
白井晟一 1979b 「ガウディの聖堂」 SZB I
白井晟一 1980 「懷霄館あとがき」 SZB I
白井晟一 1981a 「書」 SZB I
白井晟一 1981b 「心筆一如」 SZB I
白井晟一 1981c 「聞書「松濤美術館」」 SZB I
白井晟一 1981d 「聞書「石水館」」 SZB I
白井晟一 1981e 「『畫帖桂離宮』覆刻に寄せて」 SZB I
白井晟一 1981f 「私の家具觀」 SZB I
白井晟一 1983a 「花の砦」 SZB I
白井晟一 1983b 「私感」 SZB I
白井晟一 1984a 「すきな色」 SZB I
白井晟一 1984b 「アントニオ・ガウディ讃」 SZB I

Ⅲ 白井晟一の対談記事

本文献一覧は、年代順に配列した。

大高正人・白井晟一・丹下健三・徳永正三・林昌二・浜口隆一 1957「作家の側からみた建築家
と建築の諸問題について」〔白井晟一研究所 1988e〕所収(SZBⅡと表記)

白井晟一・神代雄一郎 1957『『ギリシアの柱と日本の民衆』を読んで』SZBⅡ

白井晟一・原廣司 1967「人間、物質、建築—現代のデザインについて語る」SZBⅡ

白井晟一・村松貞次郎 1969『『西洋の壁』を突き破ろうとした建築家の哲学と作品』SZBⅡ

白井晟一・草野心平・栗田勇 1970「詩と建築の原質」〔栗田勇(編)1970〕所収

白井晟一・白川静 1971「書と字」SZBⅡ

白井晟一・勝美勝・有泉峽夫・井上昇・大平恵一・坂野長美・竹岡リョウ一・浜口隆一 1975「NOA
ビルを語る—白井晟一、勝美勝両氏を囲んで」SZBⅡ

白井晟一・神代雄一郎 1976「石と日本建築」SZBⅡ

白井晟一・神代雄一郎 1978「木のはなし」SZBⅡ

白井晟一・原廣司・宮内康 1978「創造の倫理—精神の荒廃のなかで」SZBⅡ

白井晟一・磯崎新 1978「コンフリクトの発見」SZBⅡ

白井晟一・草野心平 1979「書について」SZBⅡ

白井晟一・金兩基 1979「白磁の壺」SZBⅡ

白井晟一・前川國男・大江宏 1979「花に秘す」SZBⅡ

白井晟一・栗田勇 1980「建築と書」『くりま』創刊号, 文芸春秋

白井晟一・磯崎新 1981「普遍のアニマ」SZBⅡ

白井晟一・桑原武夫 1981「東西文明論」SZBⅡ

白井晟一・宮嶋罔夫 1982「建築におもう」SZBⅡ

白井晟一・栗田勇 1982「現代建築と聖なるもの」SZBⅡ

白井晟一・谷川俊太郎 1982「詩と建築」SZBⅡ

IV 白井晟一に関する研究・評論

本文献一覧は、和風関連のものを中心に持ち上げ、年代順に配列した。

平尾敏也 1936「画家近藤浩一路氏の家」『建築知識』5月号, 建築知識社

平良敬一 1954「白井晟一氏の和風建築」『近代建築』10月号, 近代建築社

岩田知夫(川添登) 1955「原爆時代に抗するもの」『新建築』4月号, 新建築社

吉中道夫・吉島一夫・川添智利 1955「白井晟一論」『新建築』10月号, 新建築社

岩田知夫(川添登) 1956「伝統と民衆の発見をめざして」『新建築』7月号, 新建築社

吉中道夫 1957「日本的創造」『建築文化』1月号, 彰国社

神代雄一郎 1957「ギリシャの柱と日本の民衆」『建築文化』7月号, 彰国社

- 川添登 1960a 「建築家・人と作品⑦ 考える人・白井晟一①」『木工界』68号, 工作社
- 川添登 1960b 「建築家・人と作品⑧ 考える人・白井晟一②」『木工界』69号, 工作社
- 宮嶋罔夫(編) 1961 「白井晟一 特集」『建築』12月号, 中外出版
- 矢向敏郎 1966 「柿腸舎・呉羽の舎について」『建築』1月号, 中外出版
- 鬼頭梓 1966 「建築家のデビュー作品」『国際建築』10月号, 国際建築協会事務所
- 磯崎新 1968 「親和銀行をみて 凍結した時間のさなかに裸形の観念とむかい合いながら一瞬の
選択に全存在を賭けることによって組立てられた<晟一好み>の成立と現代建築のな
かでのマネエリスト的発想の意味」『新建築』2月号, 新建築社
- 川添登 1968 「白井晟一の世界」『建築文化』2月号, 彰国社
- 矢向敏郎 1969 「主屋」[彰国社(編) 1969]所収
- 長谷川堯 1972 「呼びたてる<父>の城砦」『建築』1月号, 中外出版
- 伊藤ていじ 1974b 「白井晟一の数寄屋普請一富山・呉羽の舎, 秋田・昨雪軒一」『数寄屋聚成第
15・16 巻特輯号 現代数寄屋住宅聚』叢文社
- 「白井晟一研究」企画編集室(編) 1978 『白井晟一研究Ⅰ』南洋堂出版
- 水原徳言 1978 「白井作品の和風」『木』142号, 篠田銘木店
- 岩本博行 1978 「さながらの心」『木』142号, 篠田銘木店
- 川添登 1978a 「白堊の山荘」[川添登(解説) 1978] 所収
- 川添登 1978b 「こころのすまい」[川添登(解説) 1978] 所収
- 川添登 1978c 「祈りの造形」[川添登(解説) 1978] 所収
- 「白井晟一研究」企画編集室(編) 1979 『白井晟一研究Ⅱ』南洋堂出版
- 水原徳言 1979 『縄文的なるもの 白井晟一の建築と人』相模書房
- 「白井晟一研究」企画編集室(編) 1981 『白井晟一研究Ⅲ』南洋堂出版
- 富永譲 1981 「様式の真空へ 秋の宮村役場から懷霄館へ」[「白井晟一研究」企画編集室(編) 1981]
所収
- 塩屋宋六(編) 1982 『白井晟一研究Ⅳ』南洋堂出版
- 川添登 1982 「滴々居と虚白庵のあいだ」[塩屋(編) 1982]所収
- 塩屋宋六(編) 1984 『白井晟一研究Ⅴ』南洋堂出版
- 片木篤 1984 「形への意志 白井晟一試論」[塩屋(編) 1984]所収
- 白井昱磨 1985a 「「無伴」の建築家が生を見つめようとした空間」『日経アーキテクチュア』1月
28日号, 日経BP社
- 白井昱磨 1985b 「虚白庵にて一父のこと 建築のこと 雲伴居のこと一」『新建築』2月号, 新建築
社
- 田尻裕彦(編) 1985 「特集=白井晟一 近代との相剋の軌跡」『建築文化』2月号, 彰国社

- 柿沼守利 1985 「雲伴居」解説文『建築文化』2月号, 彰国社
- 平井俊晴 1985 「年譜」『建築文化』2月号, 彰国社
- 白井昱磨 1993 「「雲伴居」付記」『写真集「雲伴居」』筑摩書房
- 岡田依子・浅野捷郎 1998a 「白井晟一の建築と核となるものについて」『日本建築学会近畿支部研究報告集』38 計画系, 日本建築学会
- 岡田依子・浅野捷郎 1998b 「白井晟一の建築と核となるものの展開について」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- トーベン=バーンズ 2000 「白井晟一 伝統のパラドックス コスモポリタニズム, そして認知可能な文化的独自性への夢想」『建築文化』1月号, 彰国社
- 安原盛彦 2004 「白井晟一と近代和風建築」『出羽路』135, 秋田県文化財保護協会
- 安原盛彦 2005 『白井晟一空間読解 形式への違犯』学芸出版社
- 小林貴哉・市原出 2005 「白井晟一の建築作品における特徴的要素と比例構成の関係」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- 川添登 2007a 「白井晟一論ノート(1)」『近代建築』3月号, 近代建築社
- 川添登 2007b 「白井晟一論ノート(2)」『近代建築』4月号, 近代建築社
- 長町美和子 2008 「白井晟一設計「試作小住宅」を秋田へ」『コンフォルト』8月号, 建築資料研究社
- 平良敬一(編) 2010 「特集 白井晟一を探して constellation」『住宅建築』1月号, 建築資料研究社
- 布野修司 2010 「虚白庵の暗闇—白井晟一と日本の近代建築」[白井 2010]所収
- 松山巖 2010 「白井晟一の初心と鍛錬」『無窓』昌文社
- 岡崎乾二郎 2011a 「芸術の条件 白井晟一という問題群(前篇)」『美術手帖』2月号, 美術出版社
- 岡崎乾二郎 2011b 「芸術の条件 白井晟一という問題群(後篇)」『美術手帖』3月号, 美術出版社
- 柿沼守利・松隈洋 2011 「建築家白井晟一 濃密なる純粹」『コンフォルト』8月号, 建築資料研究社
- 小林佐絵子・山名善之 2011 「白井晟一を通して見た伝統論争の実相とその同時代的評価に関する研究」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- 白河瑞帆・岡河貢 2011 「白井晟一に対する評論における建築家像と作品に関する研究」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会

V その他の文献

本文献一覧は、執筆者・編者を50音順に配列した。

池辺陽 1955a 「『日本的デザイン』といかに取りくむか」『新建築』2月号, 新建築社

池辺陽 1955b 「和風建築と現代のデザイン」『新建築』6月号, 新建築社

伊藤ていじ・二川幸夫 1971 『現代の数寄屋』淡交社

伊藤ていじ 1974a 「数寄屋普請の歴史」『数寄屋聚成第15・16巻特輯号 現代数寄屋住宅聚』叢文社

伊藤ていじ 1978 「和風住宅論」[馬場(編) 1978] 所収

稲垣栄三 1984 「和風に何が可能か」『住宅建築』6月号, 建築資料研究社

稲垣栄三 1986 「座敷の喪失」『朝日新聞』1月16日夕刊, 朝日新聞社

稲垣栄三 2006 『稲垣栄三著作集4 茶室・数寄屋研究』中央公論美術出版

臼田哲男(編) 1995 『新建築12月臨時増刊 創刊70周年記念号 現代建築の軌跡 1925-1995 「新建築」に見る建築と日本の近代』新建築社

内田青蔵・大川三雄・藤谷陽悦 2008 『図説・近代日本住宅史』鹿島出版会

内田青蔵 1992 『日本の近代住宅』鹿島出版会

太田静六 1987 『寝殿造の研究』吉川弘文館

太田博太郎 1966 『書院造』東京大学出版会

太田博太郎 1978 『床の間—日本住宅の象徴』岩波書店

太田博太郎 1984 『日本住宅史の研究 日本建築史論集Ⅱ』岩波書店

太田博太郎・中村昌夫(編) 1974 『日本建築史基礎資料集成 二十 茶室』中央公論美術出版

門脇稔・田路貴浩 2008 「丹下健三の伝統論 その2」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会

川上貢 2002 『日本中世住宅の研究 [新訂]』中央公論美術出版

川添登 1959 「伝統論の出発と終結—伊勢神宮の造形について—」『文学27』岩波書店

川添登 1976 『建築Ⅰ 川添登評論集第一巻』産業能率短期大学出版部

川添登 1978c 「伝統論の意図したもの」『新建築』11月号, 新建築社

川添登・同時代建築研究会 1978 「伝統論からメタボリズムへ」『建築文化』11月号, 彰国社

川添登・長谷川堯 1995 「伝統論やメタボリズムの周辺」『建築雑誌』8月号, 日本建築学会

北尾春道 1935 『数寄屋聚成19 数寄屋建築構造聚 室内構成』叢文社

北尾春道 1956 『書院建築詳細図譜』彰国社

北尾春道 1974 『数寄屋聚成第15・16巻特輯号 現代数寄屋住宅聚』叢文社

桐浴邦夫 2004 『近代の茶室と数寄屋 茶の湯空間の伝承と展開』淡交社

栗田勇(編) 1970 『現代日本建築家全集6・谷口吉郎』三一書房

- 栗田勇(編) 1971『現代日本建築家全集 4・堀口捨己』三一書房
- 栗田勇(編) 1972『現代日本建築家全集 2・村野藤吾』三一書房
- 栗田勇(編) 1974『現代日本建築家全集 3・吉田五十八』三一書房
- 建築思潮研究所(編) 1985『数寄屋造りの詳細 吉田五十八研究』建築資料研究社
- 小松茂美(編) 1990『続日本の絵巻 1 法然上人絵伝 上』中央公論社
- 今和次郎 1954『日本の民家』相模書房
- 近藤正志 1989「三養荘新館」解説文『新建築』5月号, 新建築社
- 下出源七(編) 1974『建築大辞典』彰国社
- 彰国社(編) 1997『堀口捨己の「日本」—空間構成による美の世界』彰国社
- 彰国社(編) 1998『谷口吉郎の世界 モダニズム相対化がひらいた地平』彰国社
- 平良敬一(編) 1983『住宅建築設計例集・8 床の間廻り詳細』建築資料研究社
- 高平茂樹・今掛壽大・岡河貢 2010「丹下健三 堀口捨己 ブルーノ・タウトにおける「桂離宮」の捉え方に関する研究」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- 田路貴浩・門脇稔 2008「丹下健三の伝統論 その1」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- 田中宏幸・鈴木義弘 2010「床の間の存在基盤に関する研究 —明治・大正・昭和初期における史的考察—」『学術講演梗概集』E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 日本建築学会
- 谷口吉郎 1956a「露路のある家」[谷口 1981d]所収
- 谷口吉郎 1956b「みんなの住い」[谷口 1981b]所収
- 谷口吉郎 1962「店の身だしなみ」[谷口 1981d]所収
- 谷口吉郎 1981a『谷口吉郎著作集 第一巻』淡交社
- 谷口吉郎 1981b『谷口吉郎著作集 第二巻』淡交社
- 谷口吉郎 1981c『谷口吉郎著作集 第三巻』淡交社
- 谷口吉郎 1981d『谷口吉郎著作集 第四巻』淡交社
- 谷口吉郎 1981e『谷口吉郎著作集 第五巻』淡交社
- 谷口吉郎 1981f『谷口吉郎作品集』淡交社
- 丹下健三 1955「現在日本において近代建築をいかに理解するか—伝統の創造のために—」『新建築』1月号, 新建築社
- 丹下健三 1956「現代建築の創造と日本建築の伝統」『新建築』6月号, 新建築社
- 丹下健三・池辺陽・横山不学・大高正人・吉村順三・コンラド=ワックスマン 1956「伝統をどう克服するか? シンポジウム: 日本の建築の進路」『新建築』3月号, 新建築社
- 丹下健三 1960「日本建築における伝統と創造—桂」[グロピウス・石元・丹下 1960]所収

- 長尾重武 1972「近代日本建築における伝統認識の諸問題：1 戦後の伝統論争」『学術講演梗概集』
計画系 47, 日本建築学会
- 中村昌生 1991「「きれいさび」の意匠」[吉田龍彦(編) 1991] 所収
- 西和夫 1994「村野藤吾と桂離宮」『村野藤吾の造形意匠 第1巻 伝統のかたち』京都書院
- 西和夫 2010「解説」[三好 2010]所収
- 長谷川堯 1975『都市廻廊』相模書房
- 長谷川堯 1994『田園都市 近代におけるカントリー・コテージの系譜』学芸出版社
- 長谷川堯 1998「残月と洞の床をめぐる思惟 村野藤吾による床の間のデザイン考」[和風建築社
(編)1998] 所収
- 長谷川堯 2011『村野藤吾の建築 昭和・戦前』鹿島出版会
- 八田利也 1959「伝統論の系譜と哲学」『文学』7月号, 岩波書店
- 馬場璋造(編)1976『新建築 11月臨時増刊 昭和住宅史』新建築社
- 馬場璋造(編)1978『新建築 6月臨時増刊 和風住宅の手法』新建築社
- 浜口ミホ 1949『日本住宅の封建性』相模書房
- 浜口隆一 1955「数寄屋建築—ある建築評論家の告白—」『新建築』6月号, 新建築社
- 浜口隆一 1956「内部の問題としての数寄屋—建築表現にみられる人間像についての覚書」『新建築』8月号, 新建築社
- ハンス=ユルゲン=ハンセン(編)白井晟一研究所(訳) 1975『西洋木造建築』形象社
- 藤岡洋保 1991「伝統論争の歴史」『建築 20世紀 PART2』新建築社
- 藤岡洋保 1997a「「日本的なもの」をめぐる思索 ロマンと緊張を内包する伝統理解」[彰国社
(編)1997]所収
- 藤岡洋保 1997b『合目的性を越えた意匠の世界 谷口吉郎自邸』新建築社
- 藤岡洋保 1998「意匠への傾倒—“プロポーションの世界”の可能性—」[彰国社(編)1998]所収
- 藤岡洋保 2001「昭和初期の近代建築家による「床」への関心」『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・
意匠, 日本建築学会
- 藤岡洋保 2009『表現者・堀口捨己—総合芸術の探求—』中央公論美術出版
- 藤岡通夫・恒成一訓 1969a『書院Ⅰ』創元社
- 藤岡通夫・恒成一訓 1969b『書院Ⅱ』創元社
- 藤原義一 1946『書院造の研究』高桐書院
- 藤田治彦 2010「序論「民芸運動と建築」」『民芸運動と建築』淡交社
- 藤森照信 1995「伝統論争」[臼田(編) 1995] 所収
- 二川由夫(編) 2007『GA HOUSES 100 JAPANVI』A. D. A EDITA Tokyo
- ブルーノ=タウト 1981『画帖 桂離宮』岩波書店

- 堀口捨己 1927a『紫烟荘図集』洪洋社
- 堀口捨己 1927b「建築の非都市的なものについて」[堀口 1927a]所収
- 堀口捨己 1932「現代建築に表はれたる日本趣味について」『思想』1月号, 岩波書店
- 堀口捨己 1974『堀口捨己著作集 利休の茶室』鹿島出版会
- 堀口捨己 1976『堀口捨己著作集 利休の茶』鹿島出版会
- 堀口捨己 1977『堀口捨己著作集 庭と空間構成の伝統』鹿島出版会
- 堀口捨己 1978a『堀口捨己著作集 建築論叢』鹿島出版会
- 堀口捨己 1978b『堀口捨己著作集 書院造りと数寄屋造りの研究』鹿島出版会
- 堀口捨己 1978c『堀口捨己著作集 堀口捨己作品・家と庭の空間構成』鹿島出版会
- 堀口捨己 1990『堀口捨己著作集 茶室研究』鹿島出版会
- 前久夫 1988『物語ものの建築史 床の間のはなし』鹿島出版会
- 前野堯 1993「新しい日本建築を求めて」[吉田五十八建築展実行委員会ほか(編)1993]所収
- 宮田和明・今掛壽大・岡河貢 2007「「伝統論争」における参加建築家の伝統表現に関する研究」
『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠, 日本建築学会
- 三好和義 2010『京都の御所と離宮-③ 桂離宮』朝日新聞出版
- 村野藤吾 1972「読後感」『建築と社会』2月号, 日本建築協会
- 村野藤吾 1978『村野藤吾和風建築集』新建築社
- 村野藤吾 1983『村野藤吾作品集 1 1928-1963』新建築社
- 村野藤吾 1984『村野藤吾作品集 2 1964-1974』新建築社
- 村野藤吾 1991『村野藤吾作品集 3 1975-1988』新建築社
- 村野藤吾 2008『村野藤吾著作集 全一卷』鹿島出版会
- 横山正 1976「住宅の50年」[馬場(編)1976]所収
- 横山正(監修)1976a「状況Ⅰ1925-1935 近代住宅の模索と創造」[馬場(編)1976]所収
- 横山正(監修)1976b「状況Ⅱ1935-1945 「白い」家と日本的なるもの」[馬場(編)1976]所収
- 横山正(監修)1976c「状況Ⅲ1945-1960 小住宅における理論と実践」[馬場(編)1976]所収
- 横山正(監修)1976d「状況Ⅳ1960-1976 「都市」の時代と内部への視覚」[馬場(編)1976]所収
- 横山正 1996「空間への眼差し 堀口捨己における茶室と庭」[彰国社(編)1997]所収
- 吉田五十八 1935「近代数寄屋と明朗性」『建築と社会』10月号, 日本建築協会
- 吉田五十八 1936「続々饒舌抄」[吉田 1980]所収
- 吉田五十八 1936「家族中心の新提唱」[吉田 1980]所収
- 吉田五十八 1965「数寄屋十話」[吉田 1980]所収
- 吉田五十八 1980『饒舌抄』新建築社
- 吉田五十八建築展実行委員会・東京藝術大学美術学部建築科(編)1993『吉田五十八建築展』新

建築社

吉田五十八作品集編集委員会(編)1980『吉田五十八作品集』新建築社

吉田龍彦(編)1991『三養荘』同朋舎出版

ルイス=マンフォード 1954「日本建築から学ぶ—ニューヨークに展示された書院造—」『新建築』
11月号, 新建築社

和風建築社(編) 1986a『住宅建築別冊 25 村野藤吾 和風建築作品詳細図集 1 住宅編』建築資料
研究社

和風建築社(編)1986b『住宅建築別冊 27 村野藤吾 和風建築作品詳細図集 2 ホテルの和風建築』
建築資料研究社

和風建築社(編)1994『和風建築秀粹 村野藤吾の住宅建築撰集』京都書院

和風建築社(編)1998『和風建築シリーズ 床の間』建築資料研究社

和風建築社(編)2000『村野藤吾のデザイン・エッセンス 1 伝統の昇華 本歌取りの手法』建築資
料研究社

ワルター=グロピウス・丹下健三・石元泰博 1960『桂・日本建築における伝統と創造』造型社

図版出典一覧

序章

写真 1 : [和風建築社(編)1986a]／写真 2 : [長谷川 2011]／写真 3 : [建築思潮研究所(編)1985]
／写真 4 : [彰国社(編)1997]／写真 5, 6 : 建築知識社(編)1936『建築知識』5月号／写真 7 : 建
築世界社(編)1938『建築世界』6月号／写真 8 : [田尻(編)1985]

第2章

写真 1, 3, 4 : [川添(解説)1978]／写真 2 : [水原 1979]／写真 5 : 彰国社(編)1985『建築文化』
2月号／写真 6 : [平良(編)1983]

第3章

写真 1, 4, 6, 7, 図 3, 4 : [川添(解説)1978]／写真 2, 5, 14 : 彰国社(編)1985『建築文化』2月号／
写真 3 : 建築世界社(編)1941『建築世界』8月号／写真 8, 10 : [建築思潮研究所(編)1985]／写
真 9 : 建築資料研究社(編)1996『住宅建築』7月号／写真 11 : [堀口 1978c]／写真 12 : [藤岡 1997b]
／写真 13, 図 5 : [白井 1981g]／写真 15 : [平良(編)1983]／図 2 : [太田・中村(編)1974]

第4章

図1・3・4・6～8, 写真1・4・5 : [白井晟一研究所 1993] / 図2 : 彰国社(編)1985『建築文化』2月号 / 写真2 : 新建築社(編)1985『新建築』2月号 / 写真3, 図5 : [藤岡・恒成 1969a] / 写真6, 7 : [藤岡・恒成 1969b] / 写真8 : [堀口 1978c] / 写真9 : 新建築社(編) 1989『新建築』5月号

第2部 資料

白井晟一 略年譜

- | | | | |
|------|---|------|------------------------------|
| 1905 | 京都三条大宮で生まれる。 | 1957 | 「奥田邸」，対談『『ギリシャの柱と日本の民衆』を読んで』 |
| 1927 | 堀口捨己「建築の非都市的なものについて」 | 1958 | 「善照寺」 |
| 1928 | 京都高等工芸学校を卒業，ハイデルベルク大学に留学，ヤスパースに師事，ゴシック建築を学ぶ。 | 1959 | 「古川邸」，「四同舎」，「漣亭」，村野藤吾「北川邸」 |
| 1930 | ベルリン大学へ移る。左翼新聞「ベルリン通信」の編集発行に関わる。 | 1960 | この頃から書の手習いに没頭するようになる。 |
| 1934 | 新しき村と禅の道場とマルクス主義運動の拠点づくりをかねたような共同生活を始めたが自然解散。 | 1962 | 「飯塚邸」 |
| 1935 | 吉田五十八「近代数寄屋と明朗性」 | 1963 | 吉田五十八「北村邸」 |
| 1936 | 「河村邸」で，施主の代弁者として設計に関わる。 | 1965 | 「呉羽の舎」，「鹿子木邸」，堀口捨己「茶室 礪居」 |
| 1937 | 「歓婦荘」 | 1967 | 「親和銀行本店Ⅰ期」（翌年，建築学会賞受賞） |
| 1938 | 「北大塚近藤浩一路旧邸」 | 1969 | 「昨雪軒」，『木造の詳細』出版 |
| 1941 | 「嶋中山荘」，「清澤冽山荘」 | 1968 | 「海山居」 |
| 1951 | 「山花席」，「山月席」 | 1970 | 「虚白庵」，「顧之書展」開催，『顧之居書帖』第1巻を出版 |
| 1950 | 堀口捨己「八勝館八事店」 | 1972 | 「尻別山寮」 |
| 1952 | 「浮雲」，講演記録「華道と建築 日本建築の伝統」 | 1980 | 「親和銀行本店」で日本藝術院賞受賞，対談「建築と書」 |
| 1953 | 「土筆居 書屋」，「アトリエ No. 5」，「試作小住宅」，「半澤邸」，「琅玕席」 | 1981 | 「石水館」 |
| 1954 | 「小平の家」，「知宵亭」，「半宵亭」 | 1983 | 「雲伴居」現場で倒れ，逝去 |
| 1956 | 「松井田町役場」，エッセー「縄文的なるもの」，エッセー「豆腐」，エッセー「めし」 | 1984 | 「雲伴居」，「桂花の舎」 |

白井晟一和風関連作品 参考資料

- 河村邸(1936)

種別：住宅

所在地：東京都久留米市

床面積：197.9 m²

構造：木造

- 歛婦荘(1937)

種別：住宅

所在地：静岡県田方郡伊豆長岡町

床面積：219.7 m²

構造：木造

- 北大塚近藤浩一路旧邸(1938)

種別：住宅

所在地：東京都豊島区北大塚

床面積：232.0 m²

構造：木造三州瓦葺

- 嶋中山荘(1941)

種別：住宅

所在地：長野県北佐久郡軽井沢町

床面積：109.7 m²

構造：木造茅葺

- 清澤冽山荘(1941)

種別：住宅

所在地：長野県北佐久郡軽井沢町

床面積：94.5 m²

構造：木造

- 山花席(1951)

種別：住宅内茶室

所在地：秋田県湯沢市

- 山月席(1951)

種別：旅館茶室

所在地：秋田県湯沢市

- 浮雲(1952)

種別：旅館

所在地：秋田県雄勝町秋の宮

床面積：405.6 m²

構造：木造

- 土筆居 書屋(1953)

種別：住宅離れ

所在地：東京都豊島区豊玉北

床面積：52.1 m²

構造：木造

- アトリエ No. 5(1953)

種別：住宅

所在地：東京都中野区江原町

床面積：107.3 m²

構造：木造

・ 試作小住宅 (1953)

種別：住宅

所在地：東京都世田谷区中町

床面積：46.6 m²

構造：木造

・ 半宵亭 (1954)

種別：旅館

所在地：秋田県雄勝町秋の宮

床面積：461.0 m²

構造：木造

・ 半澤邸 (1953)

種別：住宅

所在地：東京都練馬区小竹町

床面積：126.8 m²

構造：木造

・ 松井田町役場 (1956)

種別：庁舎

所在地：群馬県松井田町

床面積：1289.4 m²

構造：RC 造

・ 琅かん席 (1953)

種別：住宅内座敷

所在地：秋田県湯沢町

床面積：13.4 m²

構造：木造

・ 奥田邸 (1957)

種別：住宅

所在地：秋田県仙北郡協和町

床面積：454.1 m²

構造：木造

・ 小平の家 (1954)

種別：住宅

所在地：東京都東村山市

床面積：50.8 m²

構造：木造

・ 古川邸 (1959)

種別：住宅

所在地：埼玉県所沢市緑町

床面積：52.9 m²

構造：木造

・ 知宵亭 (1954)

種別：旅館

所在地：群馬県高崎市

床面積：409.9 m²

構造：木造高床式

・ 四同舎 (1959)

種別：酒造会館

所在地：秋田県湯沢市

床面積：493.9 m²

構造：RC 造

・ 漣亭 (1959)

種別：旅館離れ

所在地：秋田県雄勝町秋の宮

床面積：76.0 m²

構造：木造

・ 嵐亭

種別：旅館離れ

所在地：秋田県雄勝町秋の宮

床面積：69.2 m²

構造：木造

・ 杉亭

種別：旅館離れ

所在地：秋田県雄勝町秋の宮

床面積：88.7 m²

構造：木造

・ 飯塚邸 (1962)

種別：住宅

所在地：長野県長野市篠の井

床面積：125.4 m²

構造：木造

・ 呉羽の舎 主屋 (1965)

種別：住宅

所在地：富山県富山市呉羽山

床面積：80.1 m²

構造：木造

・ 呉羽の舎 書屋 (1965)

種別：住宅離れ

所在地：富山県富山市呉羽山

床面積：152.0 m²

構造：木造

・ 鹿子木邸 (1965)

種別：住宅

所在地：千葉県流山市江戸川台

床面積：95.3 m²

構造：木造

・ 親和銀行本店Ⅰ期 (1967)

種別：銀行本店

所在地：佐世保市島瀬町

床面積：4101.2 m²

構造：RC造

・ 海山居 (1968)

種別：住宅

所在地：千葉県富津市金谷

床面積：103.4 m²

構造：木造

・ 昨雪軒 (1969)

種別：住宅

所在地：秋田県横手市根岸町

床面積：419.6 m²

構造：RC造一文字瓦葺

- 尻別山寮(1972)

種別：厚生施設

所在地：北海道虻田郡留寿都

床面積：1047.6 m²

構造：S 造一部 RC 造

- 雲伴居(1984)

種別：住宅

所在地：京都市右京区嵯峨野

床面積：165.04 m²

構造：木造

- 桂花の舎(1984)

種別：住宅

所在地：神奈川県大和市中央林間

床面積：170.19 m²

構造：木造

河村邸 1936



写真1 北西外観

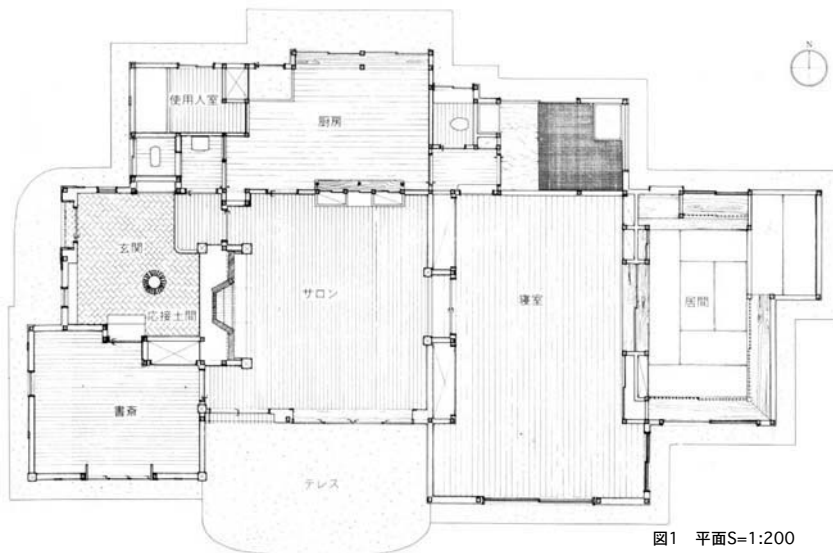


図1 平面S=1:200

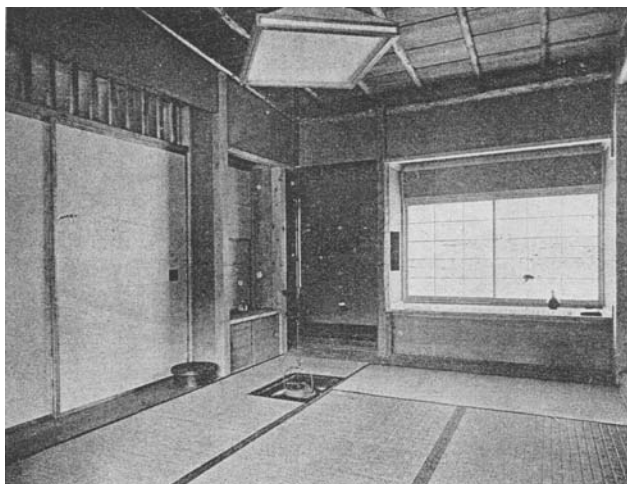


写真2 居間

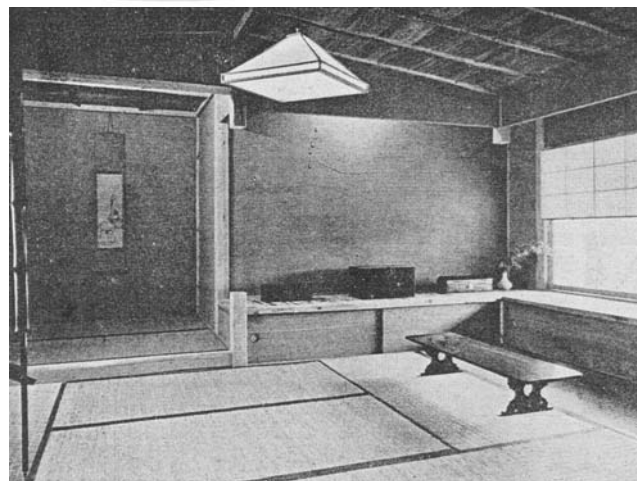


写真3 居間

歓帰荘 1937

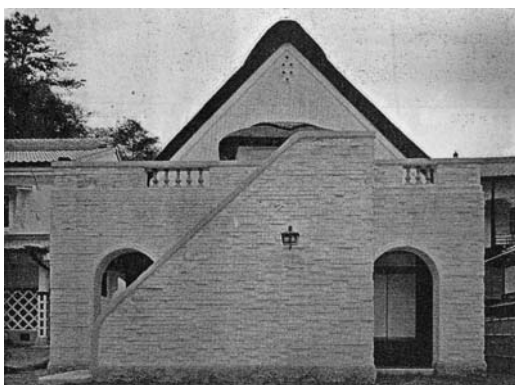


写真4 東外観

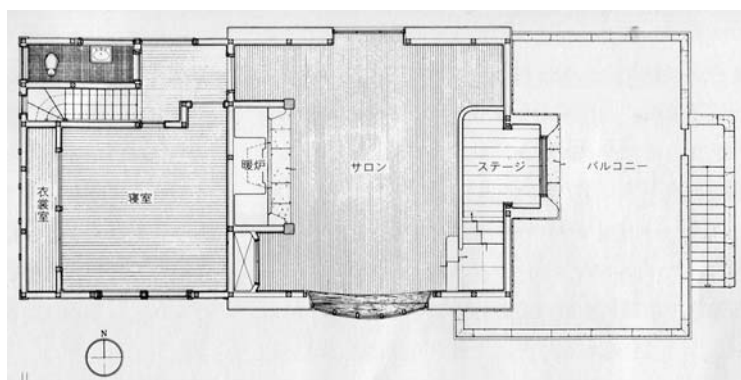


図2 2F平面S=1:200



写真5 サロン



写真6 サロン東側を見る

北大塚近藤浩一路旧邸 1938



写真7 南西部外観



図3 平面S=1:200

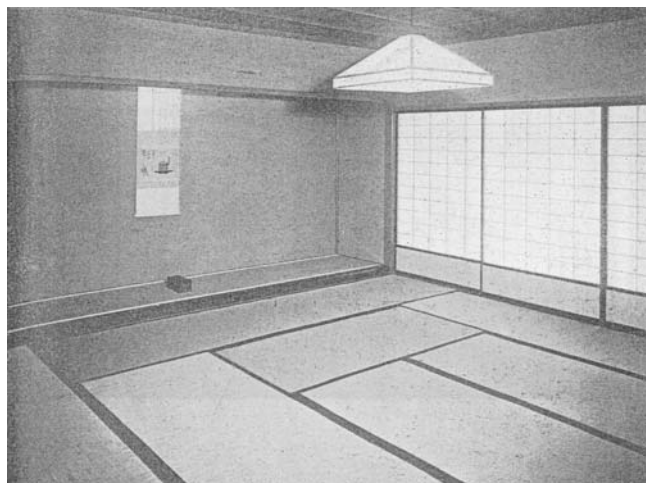


写真8 居間

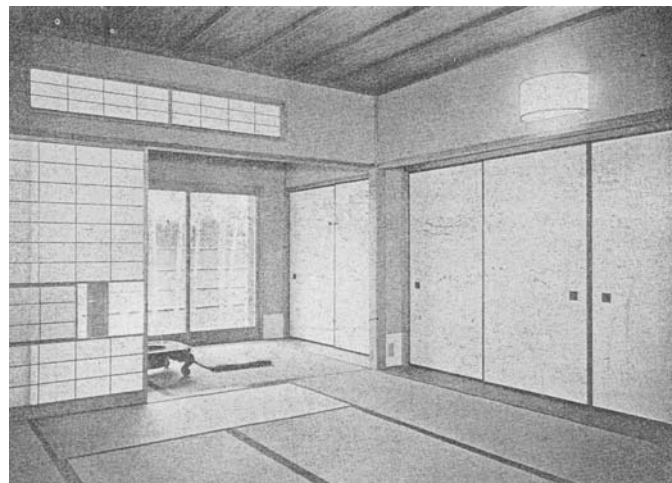


写真9 寝室

嶋中山荘 1941



写真10 南東外観

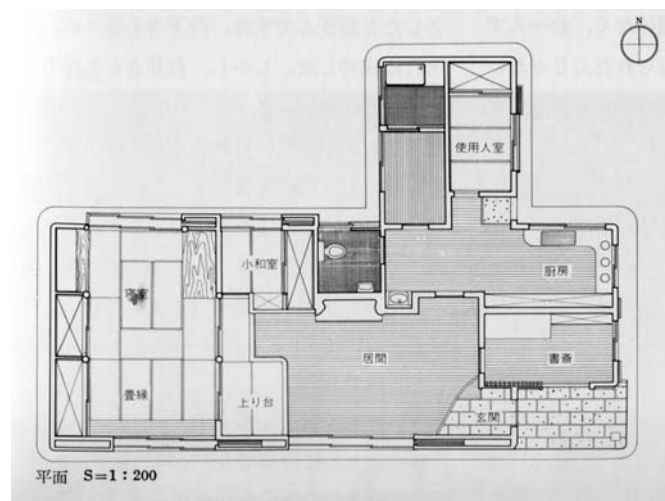


図4 平面S=1:200



写真11 居間

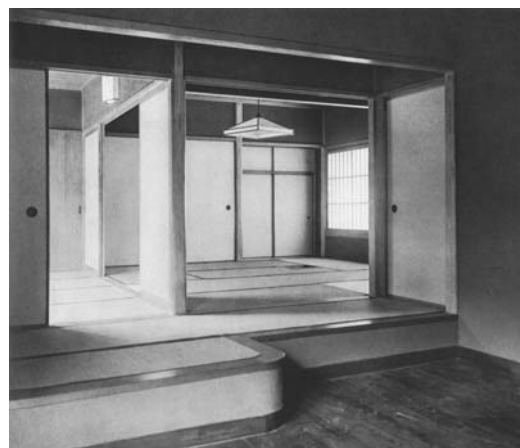


写真12 居間から寝室を見る

清澤冽山莊 1941



写真13 南東部外観

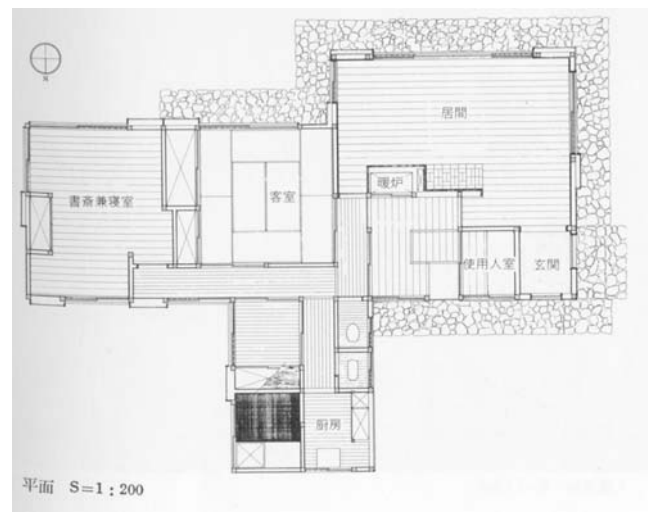


図5 平面S=1:200



写真14 北東部外観



写真15 南外観

山花席 1951

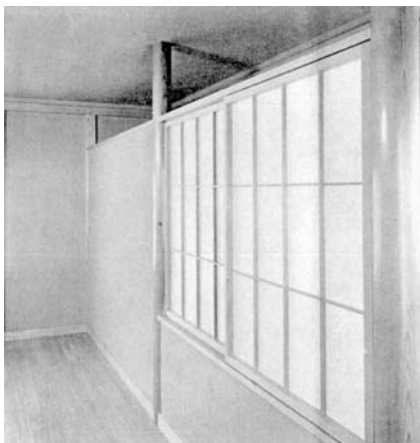


写真16 階段前

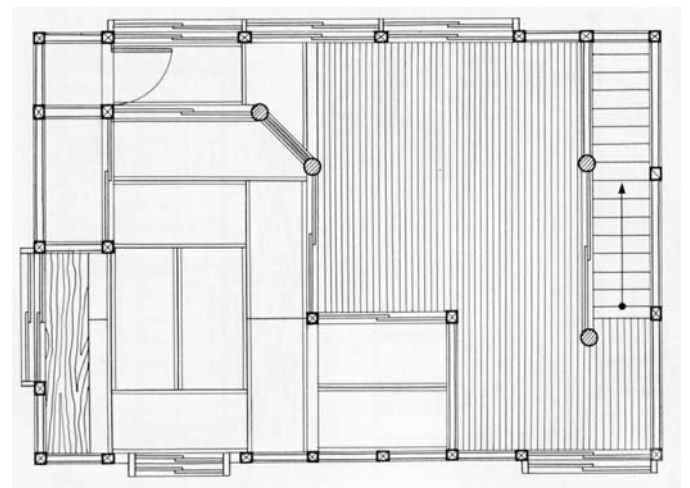


図6 平面S=1:100



写真17 板間部分

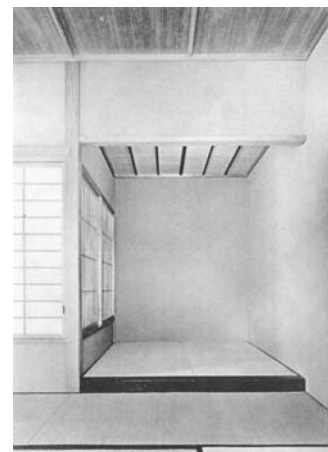


写真18 床の間

山月席 1951

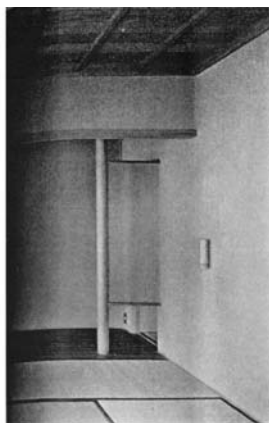
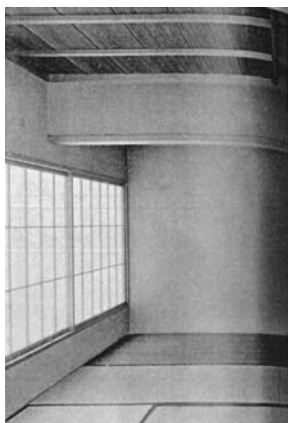


写真19 床の間

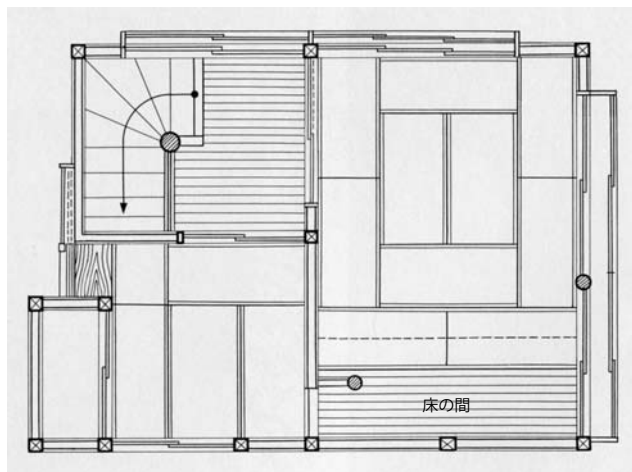


図7 平面S=1:100

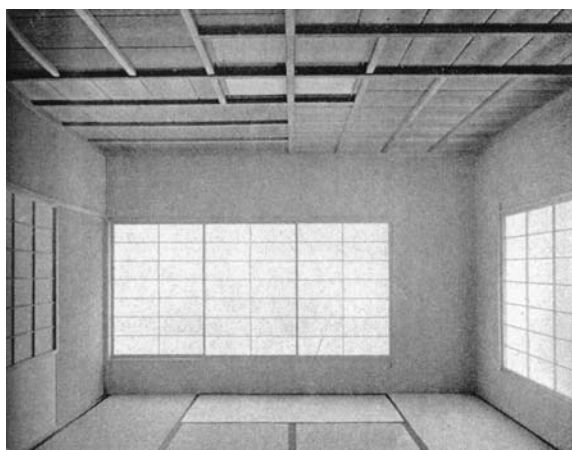


写真20 床の間から反対側開口を見る

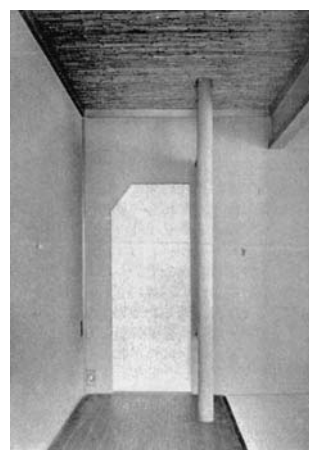


写真21 床の間側部

浮雲 1952



写真22 南西部外観

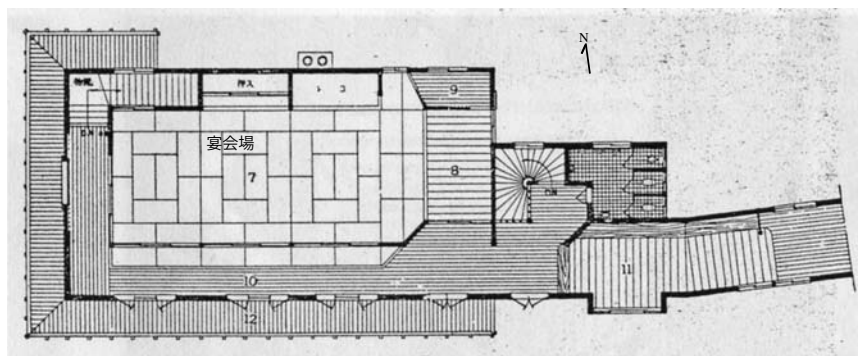


図8 平面S=1:400

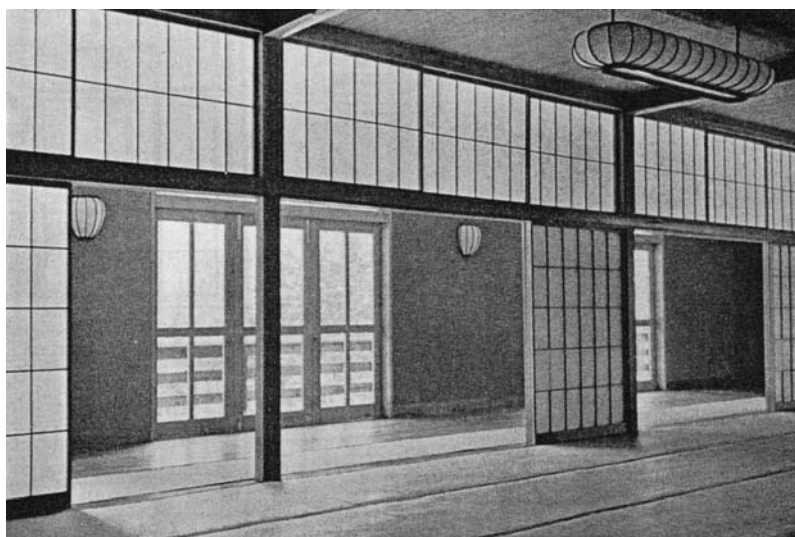


写真23 宴会場から南を見る

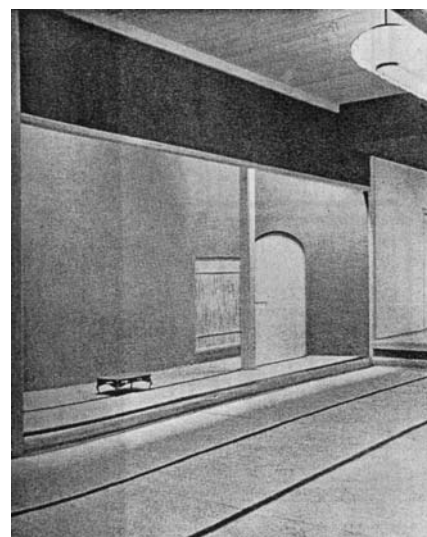


写真24 宴会場トコ

土筆居 書屋 1953

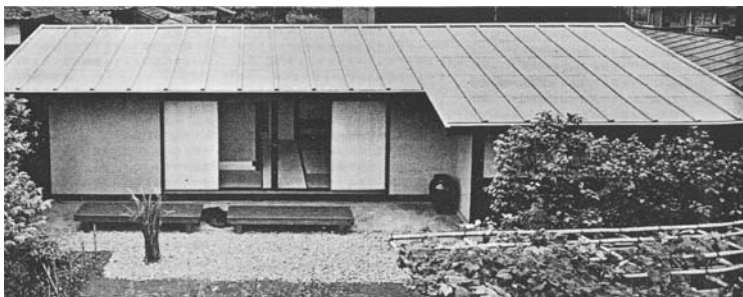


写真25 東外観

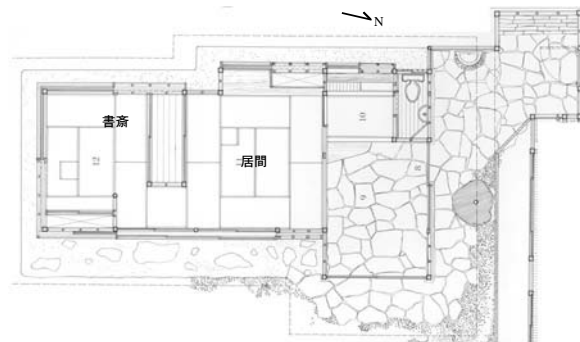


図9 平面S=1:200

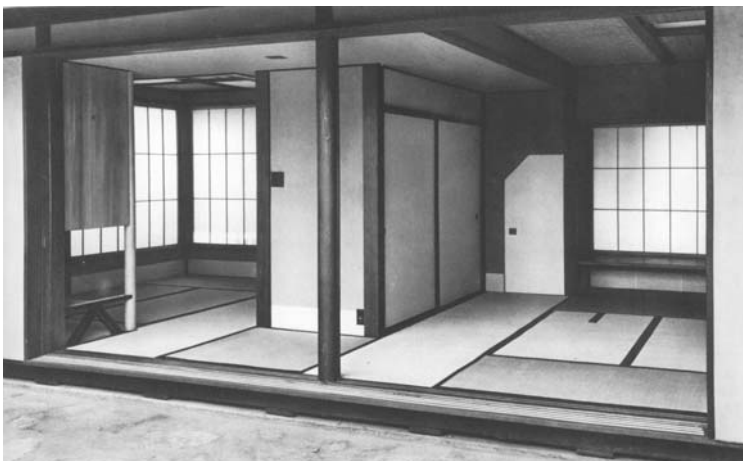


写真26 東から居間と書斎を見る

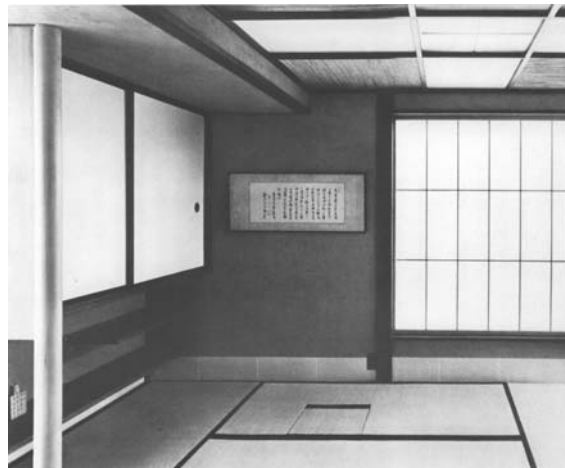


写真27 書斎

アトリエNo.5 1953



写真28 南外観

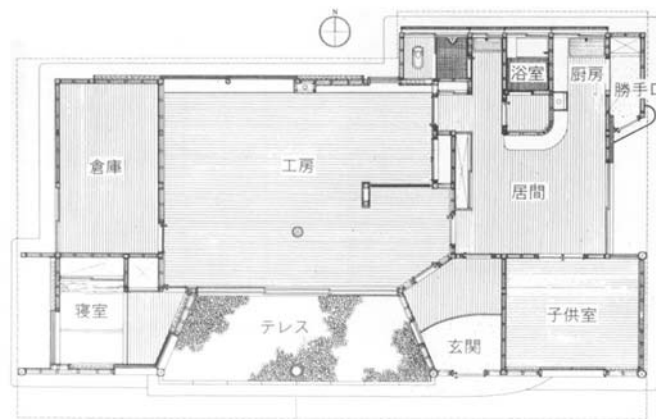


図10 平面S=1:200

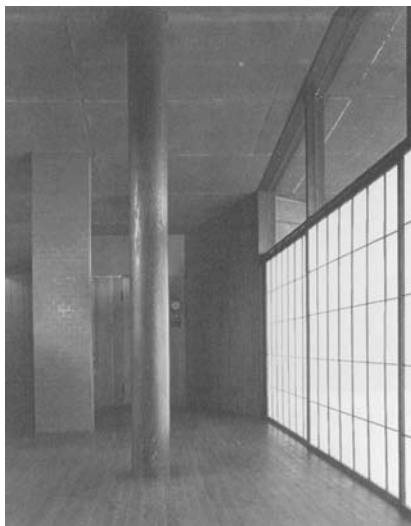


写真29 工房南部分



写真30 工房北部分

試作小住宅 1953



写真31 西側外観



図11 平面S=1:200

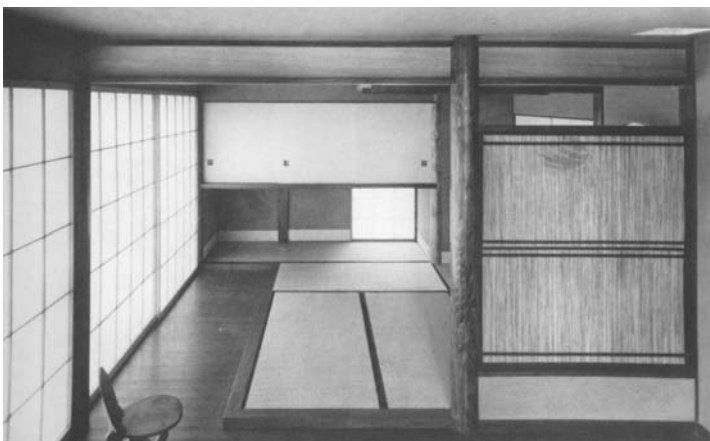


写真32 居間

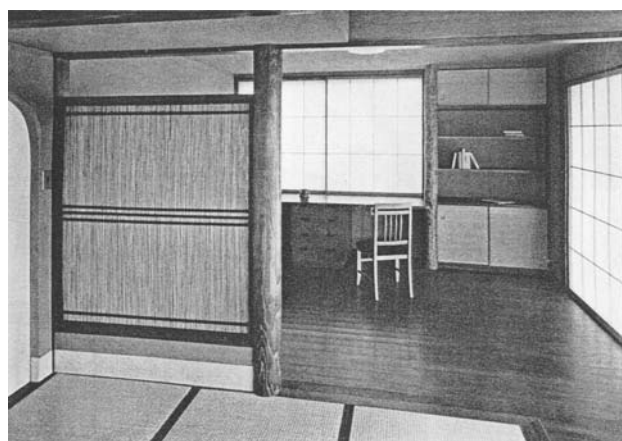


写真33 勉強室

半澤邸 1953

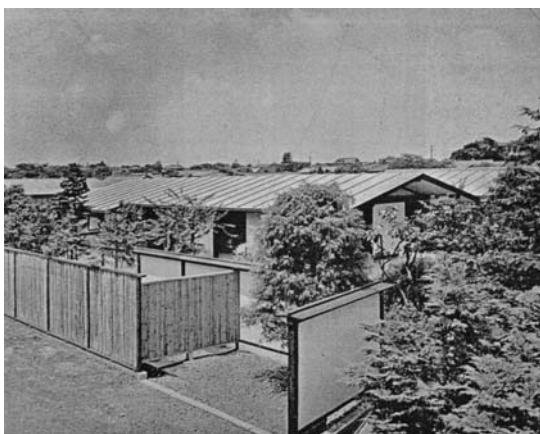


写真34 南東外観

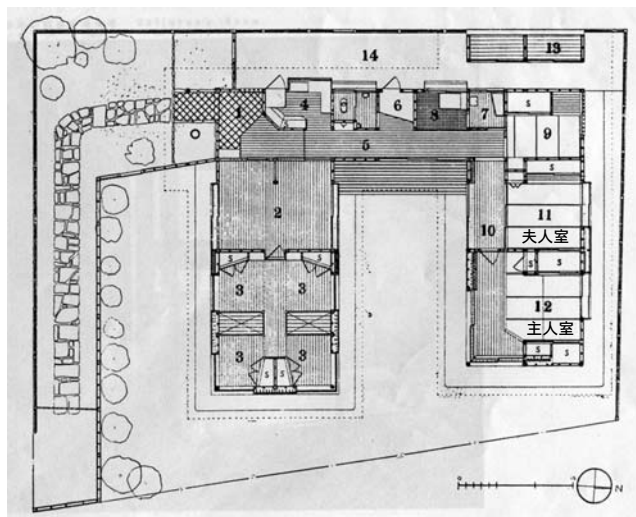


図12 平面S=1:200

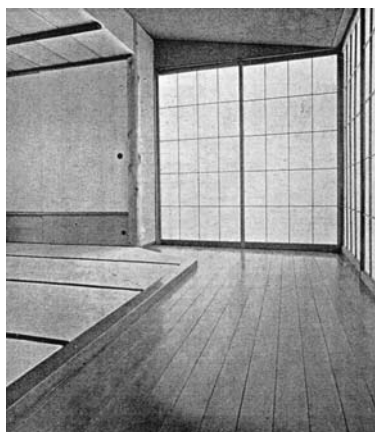


写真35 主人室

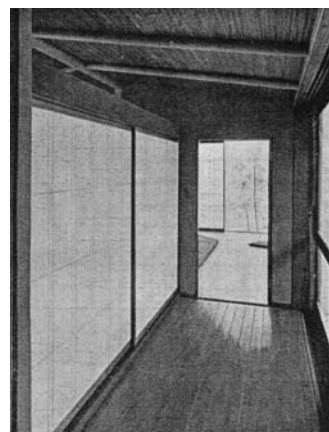


写真36 夫人室

琅かん席 1953

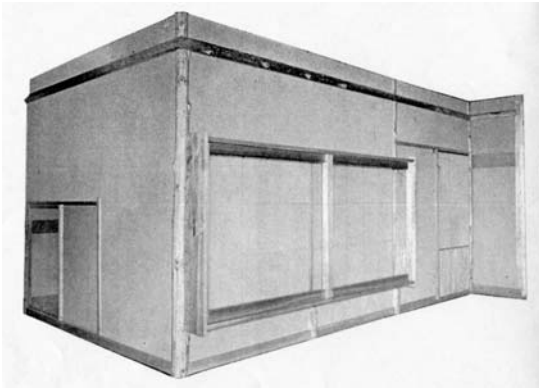


写真37 外観

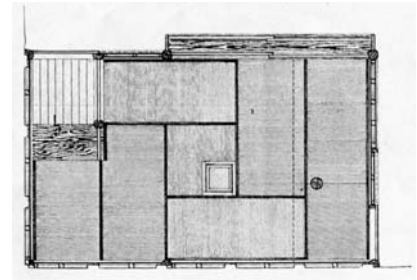


図13 平面S=1:100

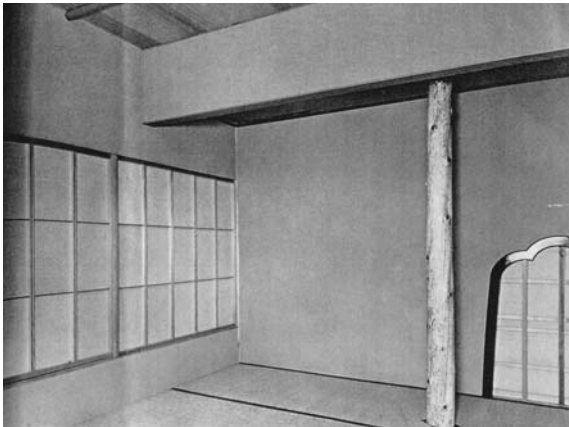


写真38 床の間

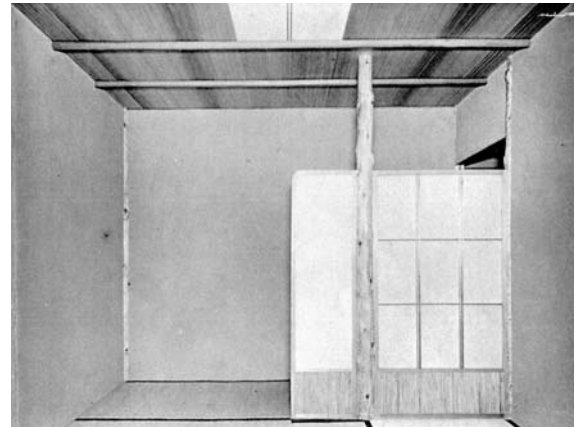


写真39 出入口部分

小平の家 1954



写真40 南外観

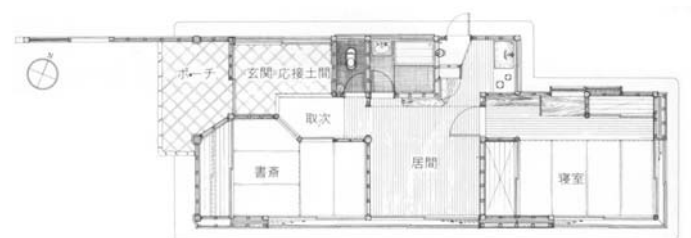


図14 平面S=1:200

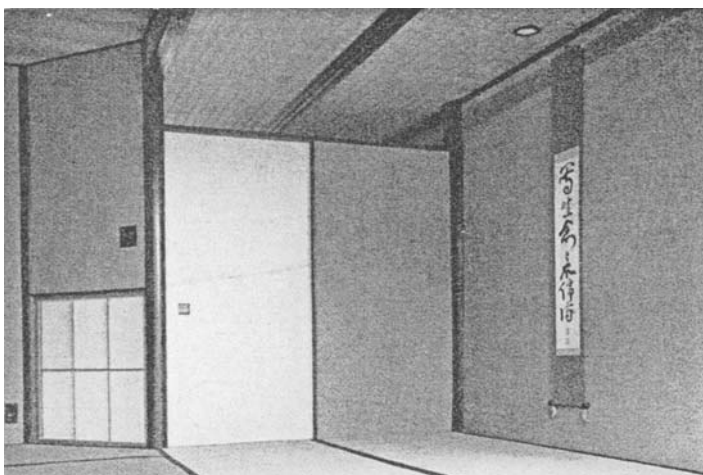


写真41 書斎

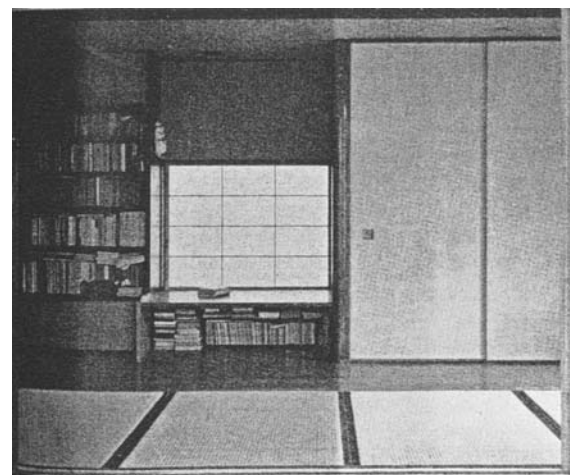


写真42 寝室

知宵亭 1954



写真43 南東外観

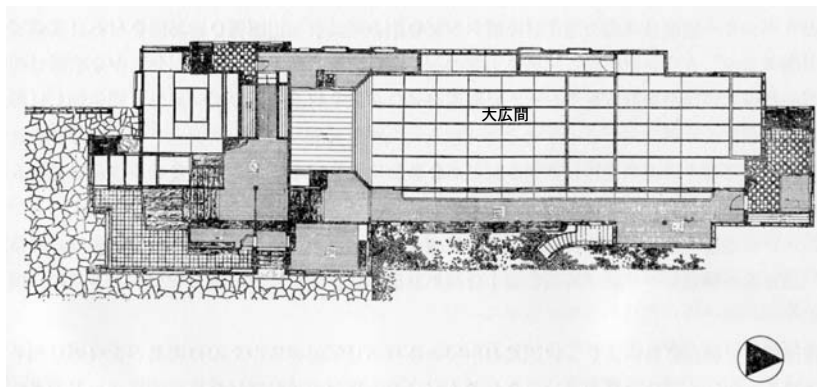


図15 平面S=1:400

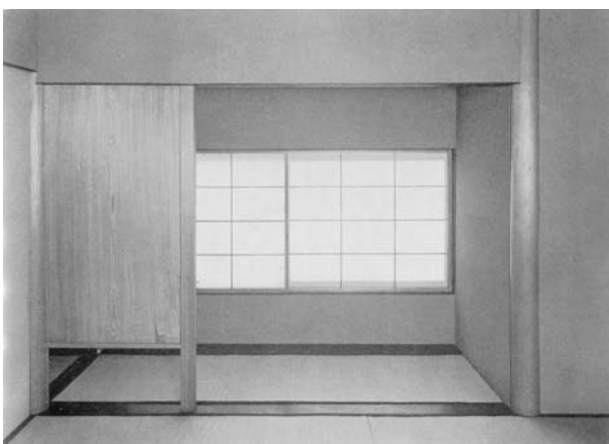


写真44 広間の一部



写真45 大広間

半宵亭 1954

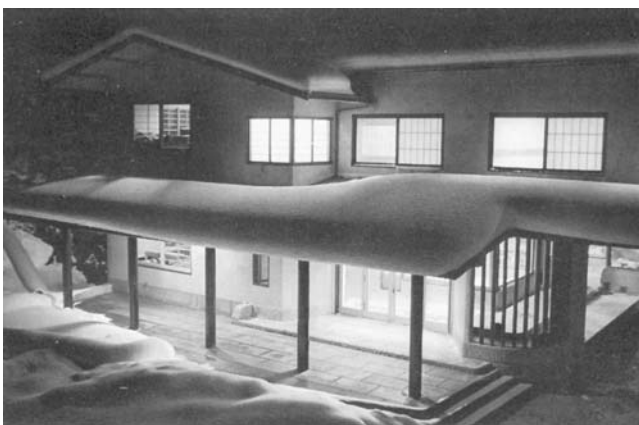


写真46 外観

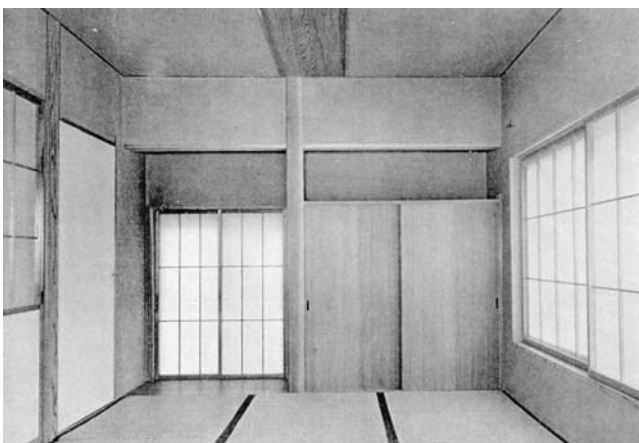


写真47 客室次の間の一つ

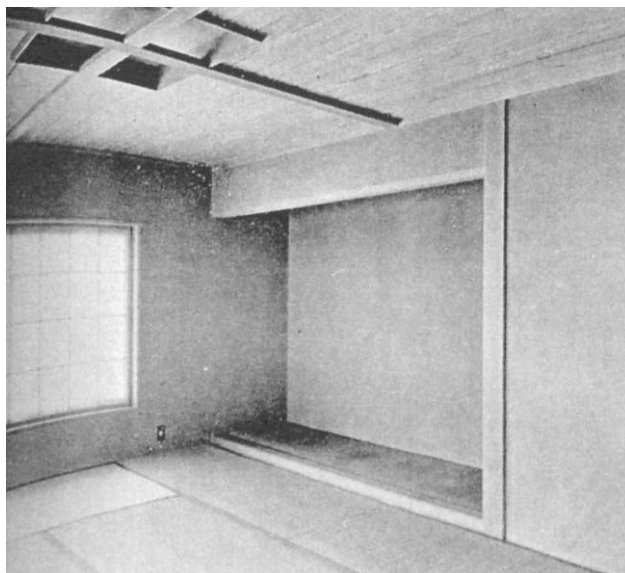


写真48 客室の一つ

松井田町役場 1956



写真49 外観

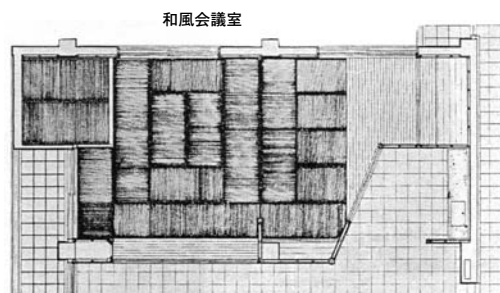


図16 平面S=1:200



写真50 和風会議室

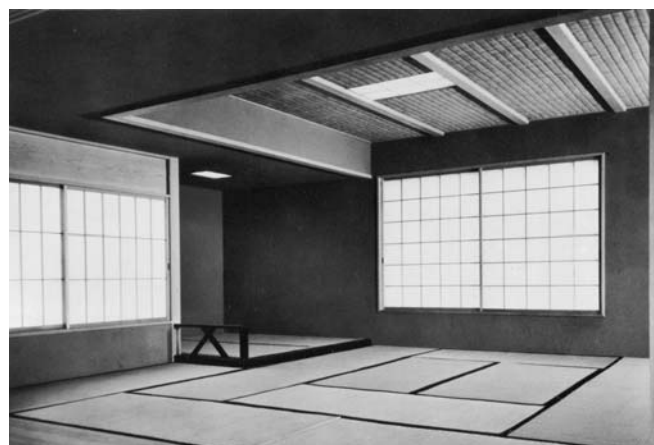


写真51 和風会議室

奥田邸 1957



写真52 西側正面

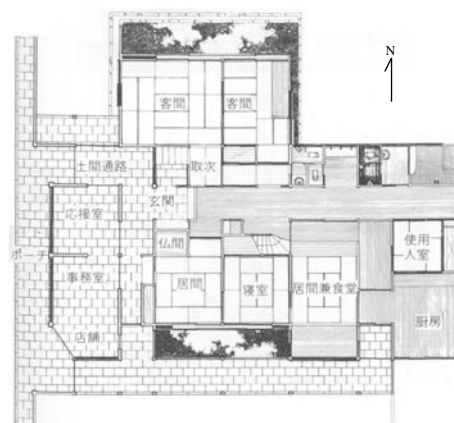


図17 平面S=1:400



写真53 客間



写真54 取次、客間

古川邸 1959

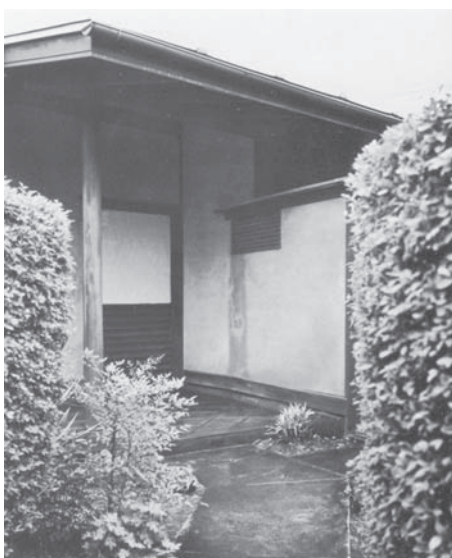


写真55 外観



図18 平面S=1:200

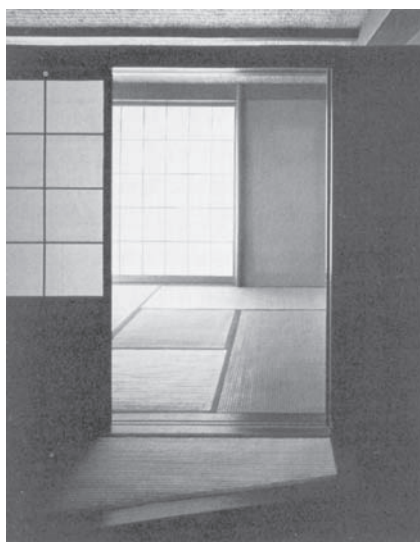


写真56 老人室



写真57 寝室

四同舎 1959



写真58 外観



図19 平面S=1:400



写真59 集会室

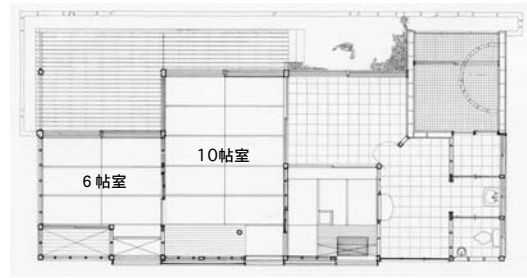


写真60 集会室

漣亭 1959



写真61 南外観



N

図20 平面S=1:200



写真62 10帖室

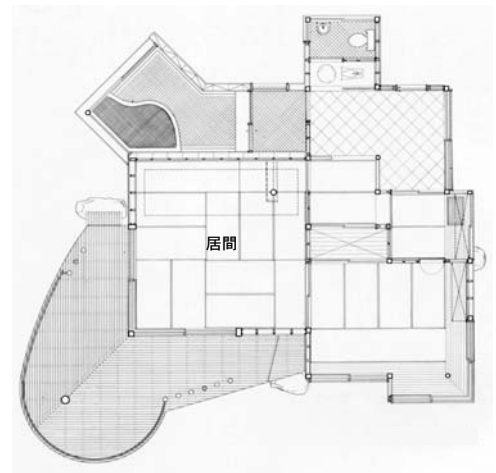


写真63 6帖室

嵐亭



写真64 北外観



N

図21 平面S=1:200



写真65 居間



写真66 床の間端部

杉亭



写真67 西外観

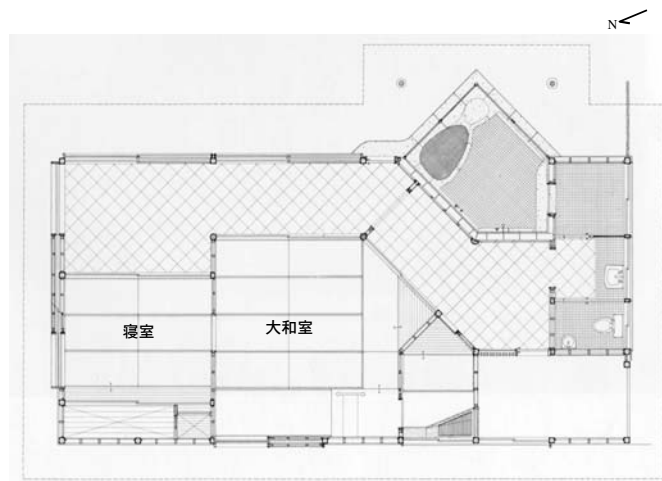


図22 平面S=1:200



写真68 寝室



写真69 大和室

飯塚邸 1962



写真70 玄関外観

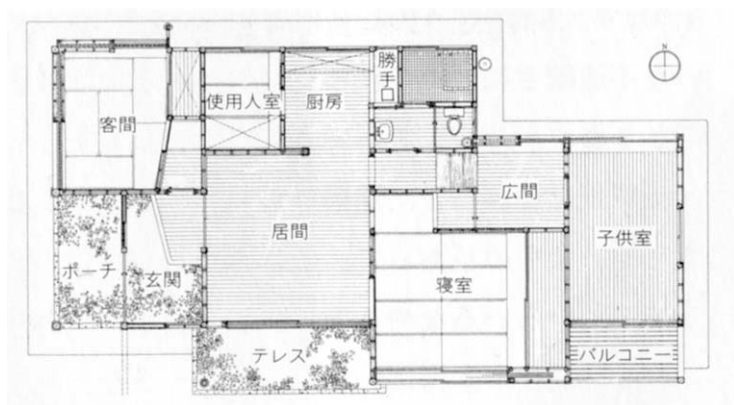


図23 平面S=1:200



写真71 玄関外観

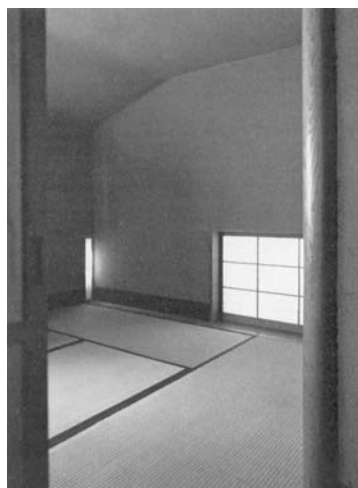


写真72 客間

呉羽の舎 主屋 1965



写真73 南外観

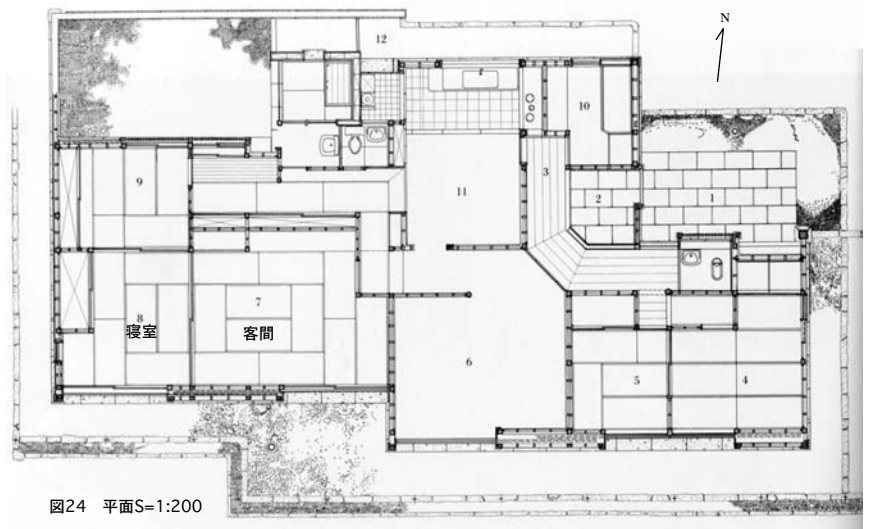


図24 平面S=1:200



写真74 客間

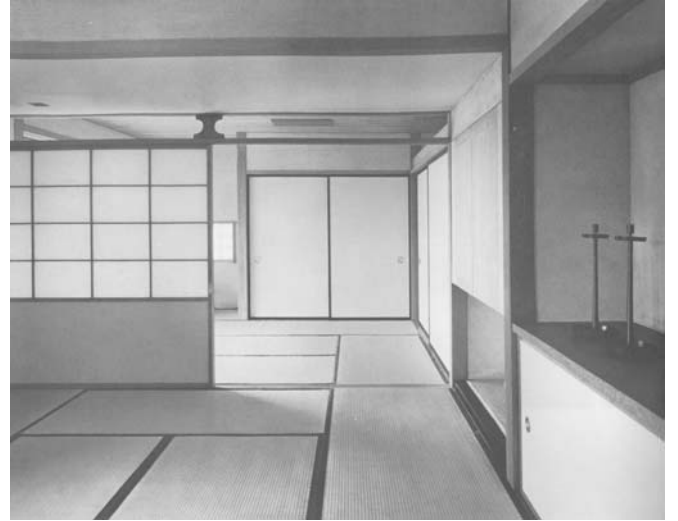


写真75 客間から寝室を見る

呉羽の舎 書屋 1965



写真76 東外観

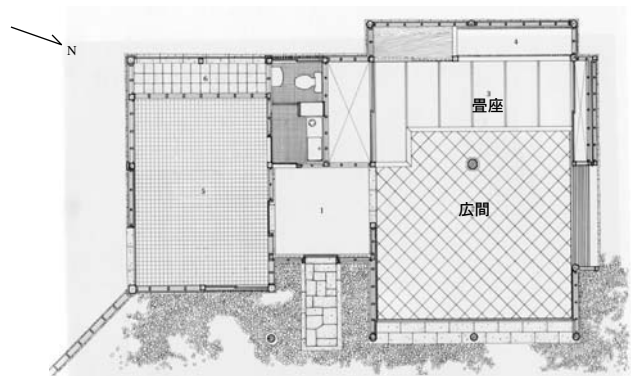


図25 平面S=1:200



写真77 畳座



写真78 広間

鹿子木邸 1965



写真79 北側外観

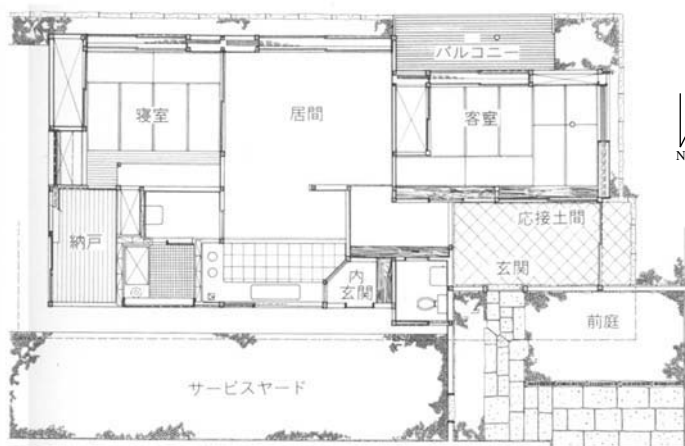


図26 平面S=1:200

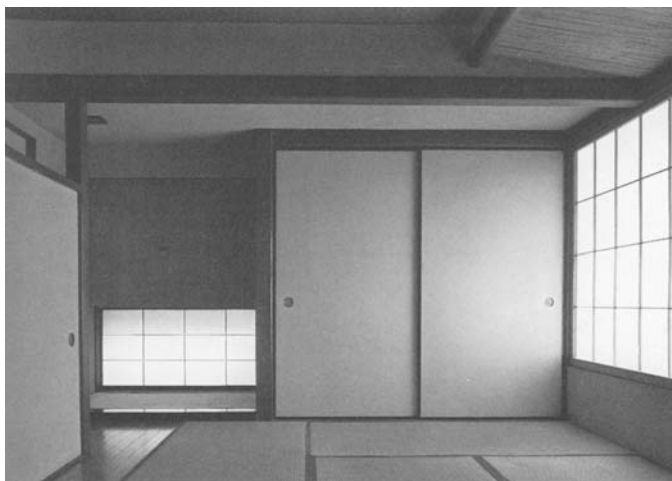


写真80 寝室



写真81 客室

親和銀行本店 I 期 1967



写真82 路地

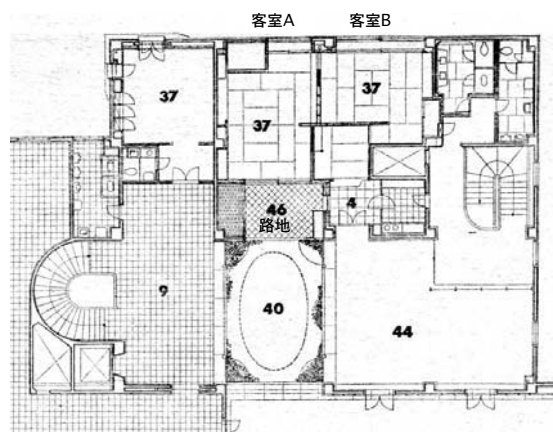


図27 平面S=1:400

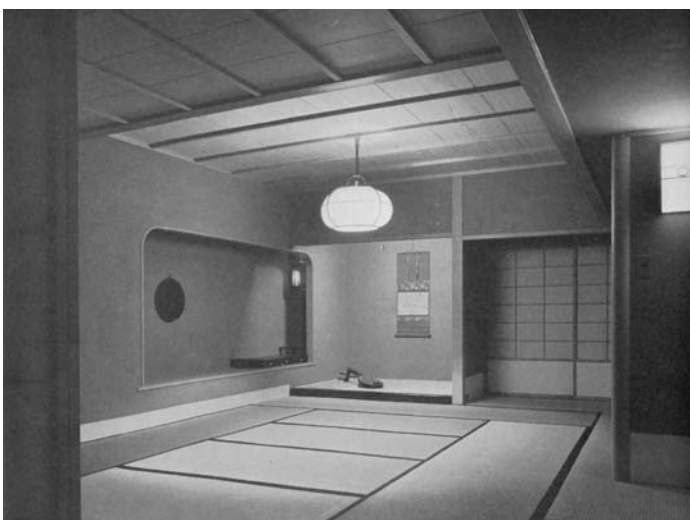


写真83 客室A



写真84 客室B

海山居 1968

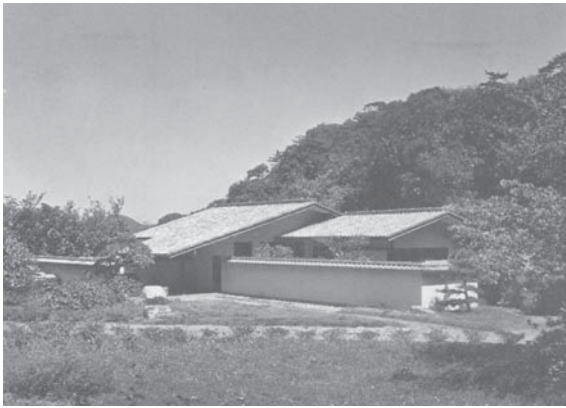


写真85 南東外観

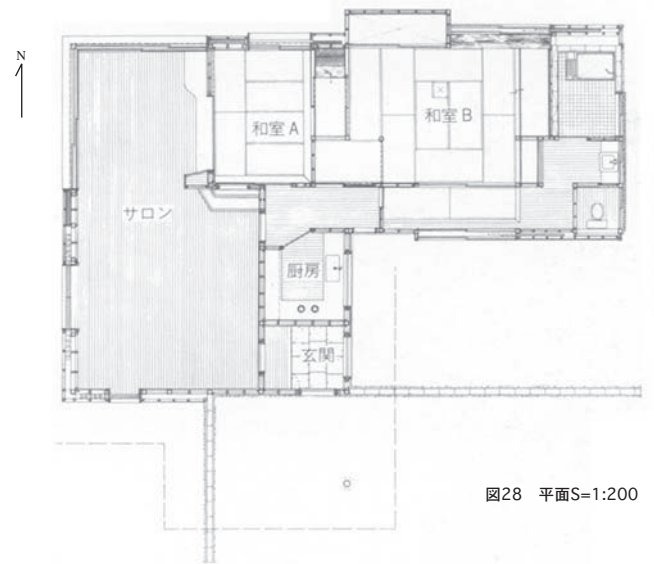


図28 平面S=1:200

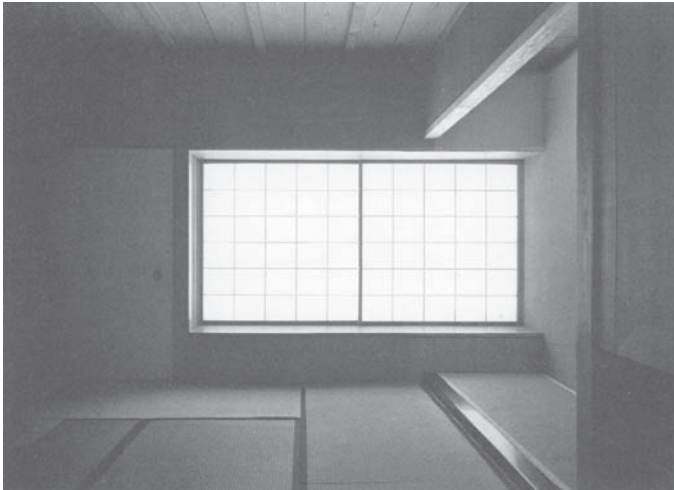


写真86 和室B



写真87 和室B

昨雪軒 1969



写真88 西外観

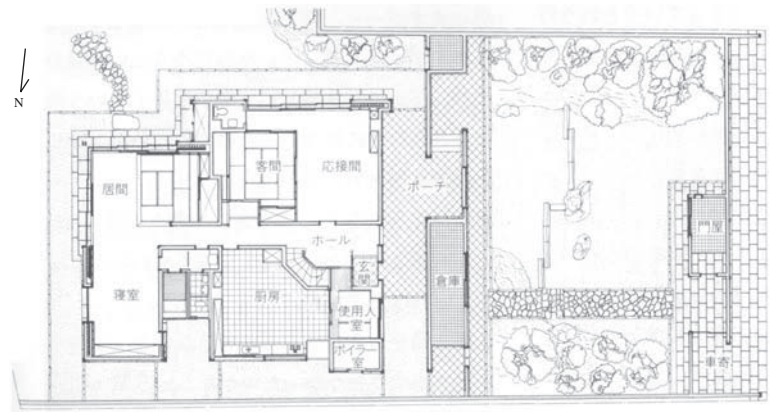


図29 平面S=1:400

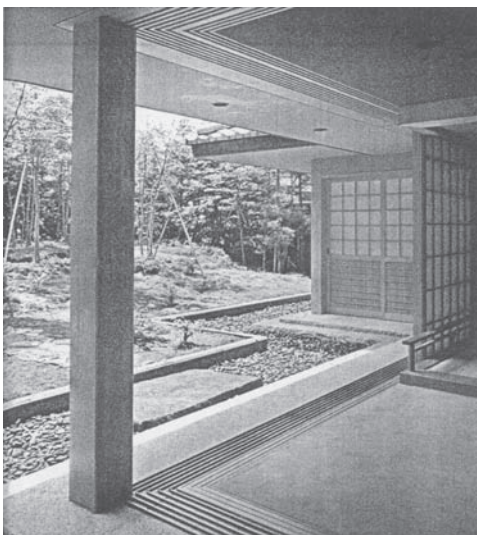


写真89 居間

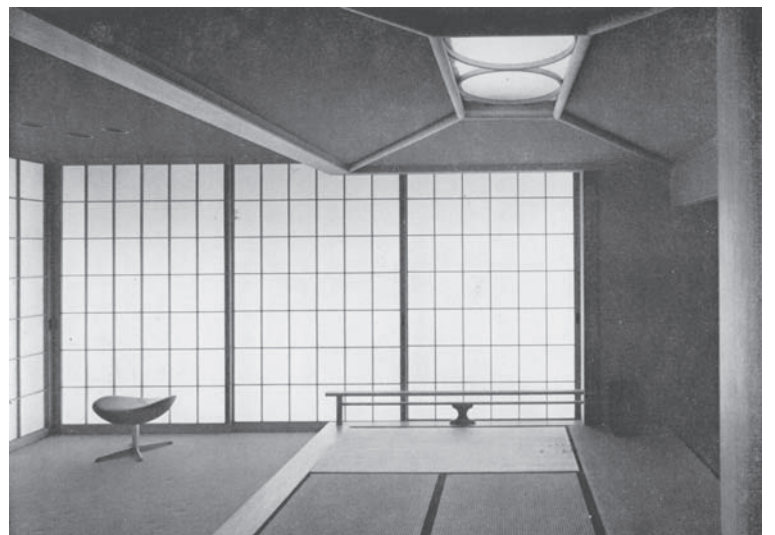


写真90 居間

尻別山寮 1972



写真91 南東外観



図30 平面S=1:400

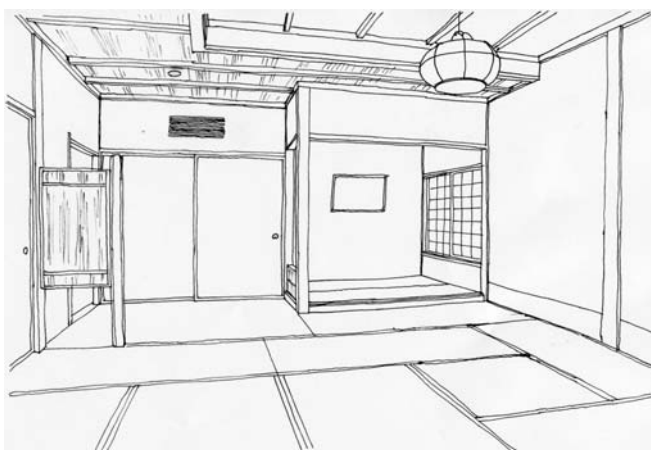


図31 和室北面を見る

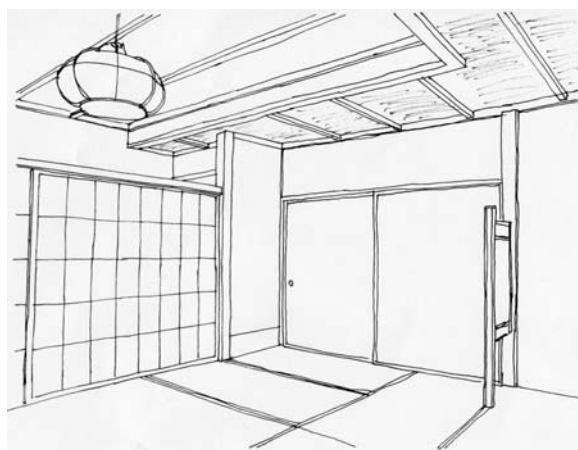


図32 和室南西を見る

雲伴居 1984



写真92 西側正面

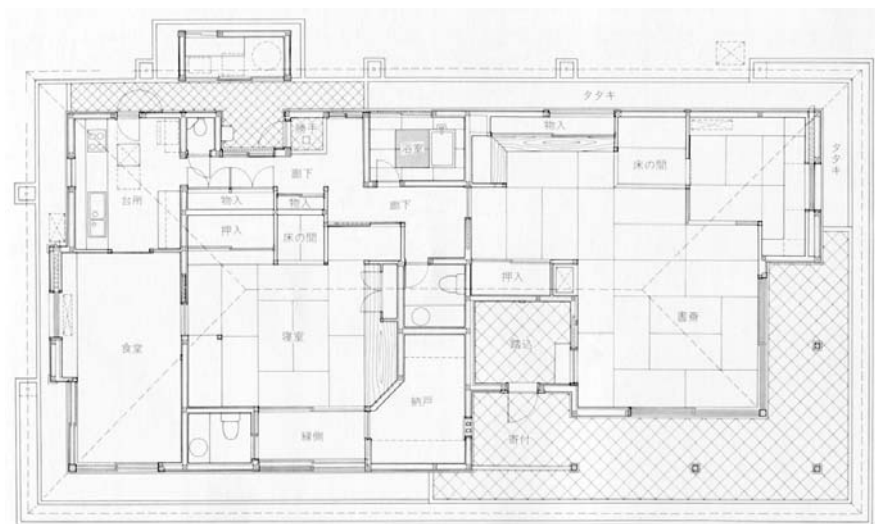


図33 平面S=1:200



写真93 寝室

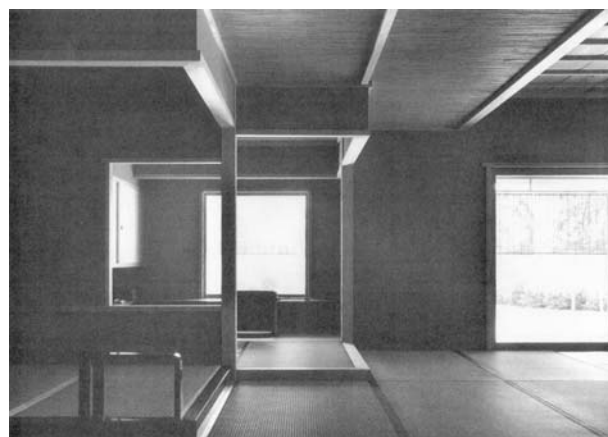


写真94 書斎

桂花の舎 1984



写真95 南東側外観

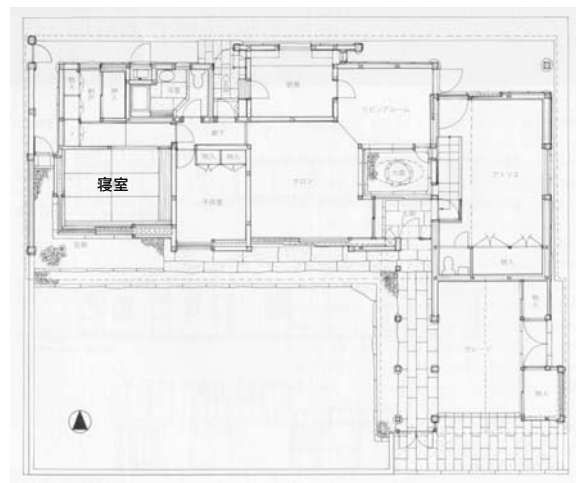


図34 平面S=1:300

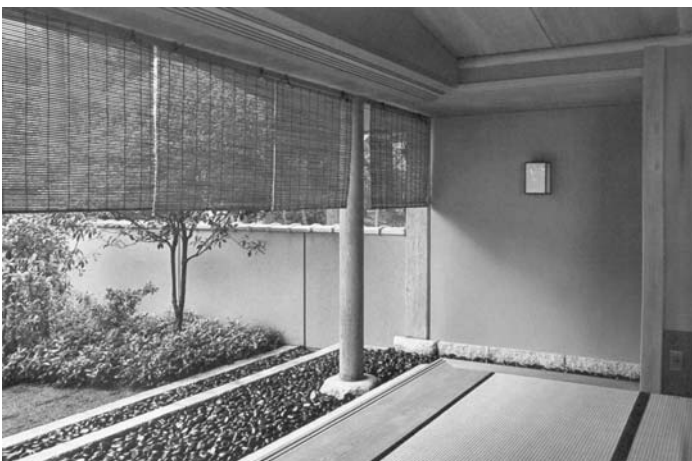


写真96 寝室

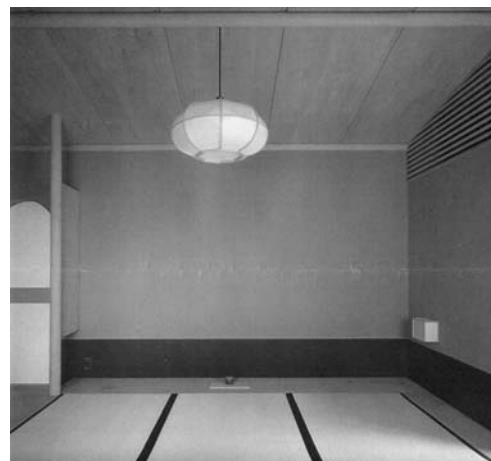


写真97 寝室

以上、白井晟一研究所 1988『白井晟一全集 補遺』同朋舎出版 と 彰国社(編)1985『建築文化』2月号を参考に作成した。

第2部 図版出典

図 1, 2, 3, 4, 5, 10, 11 14, 17, 18, 19, 23, 26, 28, 29, 33, 34, 写真 5, 10, 12, 13, 29, 31, 43, 45, 46,

49, 52, 54, 55, 56, 58, 70, 72, 79, 81, 88, 93, 96 : 『建築文化』1985年2月号, 彰国社

図 6, 7 : 白井晟一研究所 1988『白井晟一全集 補遺』同朋舎出版

図 8, 写真 23, 24, 33 : 『新建築』1953年8月号, 新建築社

図 9, 20, 21, 22, 24, 25, 30, 写真 14, 15, 22, 28, 50, 51, 53, 57, 67, 71, 74, 77, 80, 85, 86, 87 : 川添登(解説) 1978『白井晟一 建築とその世界』世界文化社

図 12, 写真 34, 35, 36 : 『新建築』1954年9月号, 新建築社

図 13, 写真 16, 17, 18, 19, 20, 21, 37, 38, 39, 47, 48 : 『近代建築』1954年10月号, 近代建築社

図 15, 写真 44, 83 : 水原徳言 1979『縄文的なるもの 白井晟一の建築と人』相模書房

図 16 : 『新建築』1956年7月号, 新建築社

図 27 : 『建築』1969年7月号, 中外出版

写真 1, 2, 3 : 『建築知識』1936年5月号, 建築知識社

写真 4 : 『建築世界』1938年6月号, 建築世界社

写真 6, 11, 32, 73, 84 : 栗田勇(編) 1970『現代日本建築家全集 9・白井晟一』三一書房

写真 7, 8, 9 : 『建築世界』1941年8月号, 建築世界社

写真 25, 26, 27 : 馬場璋造(編) 1976『新建築 11月臨時増刊 昭和住宅史』新建築社

写真 30 : 塩屋宋六(編) 1984『白井晟一研究 V』南洋堂出版

写真 40, 41, 42 : 『新建築』1956年9月号, 新建築社

写真 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 66, 68, 69, 91 : 筆者撮影

写真 75, 76, 78 : 彰国社(編) 1969『木造の詳細 3 住宅設計編』彰国社

写真 82, 95 : 白井晟一 2010『白井晟一 精神と空間』青幻舎

写真 89, 90 : 『新建築』1973年2月号, 新建築社

図 31, 32 : 筆者作成

写真 92, 94 : 白井晟一研究所 1988『白井晟一全集 写真』同朋舎出版

写真 97 : 大橋富夫(写真) 1985『現代和風住宅集 5 現代の精華』講談社

謝辞

本研究をまとめるにあたり，多くの方々からご指導，ご支援を頂きました。

まず，学位論文主査である京都大学大学院人間・環境学研究科教授の伊従勉先生には，大学院修士課程入学時より今日に至るまで，終始親身かつ熱心なご指導を頂きました。ここに心より感謝申し上げます。また，副査をお引き受け頂いた京都大学大学院人間・環境学研究科教授の西垣安比古先生，同准教授の中嶋節子先生には，有益なご指導，ご助言を頂き，深く感謝いたします。

現職の東京藝術大学美術学部建築科でも，多くの先生にご支援を頂きました。まず，私が本研究に取り組むことができたのは，故・黒川哲郎先生が，私を助手として研究室に招いてくださったのがはじまりであり，その後もたくさんのご指導を頂きました。ここに感謝の意を表するとともに，ご冥福をお祈りいたします。また，元倉眞琴先生には，大学の活動において多岐にわたりご指導頂く一方で，博士後期課程への編入学に際し貴重なご助言を頂き，その後もいつも研究の進捗状況を気にかけてくださいました。さらに，前野嶷先生，六角鬼丈先生，トム・ヘネガン先生，野口昌夫先生，光井渉先生には，折にふれ，研究に関して貴重なご指導，ご助言を頂きました。この場を借りて，深くお礼申し上げます。

また，建築家であり，1967年より白井晟一に師事され，「昨雪軒」や「雲伴居」などを担当された柿沼守利氏には，白井の建築について，実体験をもとにした貴重なご意見を頂く一方，当時の資料を見せて頂くなど，大変あたたかいご支援を頂きました。ここに深く感謝申し上げます。

さらに，材木店店主として「雲伴居」計画に関わられた木村二氏には，当時の様子について貴重なお話を伺いました。深くお礼申し上げます。

最後に，私の研究をサポートしてくださった京都大学伊従研究室の皆さま，研究に関して何かと相談にのってくださった東京藝術大学の同僚であった皆さま，そして，これまで仕事と研究の両立を理解し支えてくれた家族に感謝の意を表します。

2014年1月